

2021年度パッセ I-A-1 I-A-2 研究報告書 目次

パッセ I-A-1

	氏名	ページ
1	佐々木 美裕	1
2	中島 明	3

パッセ I-A-2

	氏名	ページ		氏名	ページ
1	吉田 竹也	5	37	山田 望	77
2	後藤 明	7	38	前田 洋枝	79
3	渡部 森哉	9	39	太田 和彦	81
4	青柳 宏	11	40	BOSAKAIBO,B Georges	83
5	藤川 美代子	13	41	山田 哲也	86
6	上峯 篤史	15	42	POTTER,David M	88
7	和泉 悠	17	43	蜂巣 吉成	91
8	中尾 央	19	44	名倉 正剛	93
9	ANTONY SUSAIRAJ	22	45	沢田 篤史	95
10	上田 崇仁	24	46	横森 励士	98
11	平子 達也	26	47	野呂 昌満	100
12	福本 拓	28	48	塩濱 敬之	102
13	CRIPPS Anthony	30	49	白石 高章	104
14	千葉 裕太	32	50	横山 哲郎	106
15	泉水 浩隆	34	51	奥村 康行	108
16	永田 智成	36	52	藤井 勝之	110
17	小倉 康寛	提出なし	53	栗原 寛明	112
18	真野 倫平	38	54	大石 泰章	114
19	小林 純子	40	55	坂本 登	116
20	張 玉玲	42	56	張 漢明	118
21	蔡 大鵬	44	57	村杉 恵子	120
22	上田 薫	46	58	平岩 恵里子	122
23	小林 佳世子	48	59	森山 幹弘	124
24	奥田 隆明	50	60	吉田 信	126
25	竹澤 直哉	52	61	MUNSI,Roger Vanzila	128
26	上野 正樹	54	62	神崎 宣次	130
27	松井 宗也	56	63	DEACON,Bradley	132
28	川北 眞紀子	58	64	中村 督	134
29	西村 邦行	60	65	山岸 敬和	136
30	田中 実	62	66	MILES,Richard	139
31	小原 将照	64	67	永江 亘	141
32	榊原 秀訓	66	68	洞澤 秀雄	143
33	ALVA,Reginald Joaquim	68	69	森山 花鈴	145
34	梁 曉虹	70	70	五島 敦子	147
35	金綱 基志	73	71	飯田 祥明	149
36	O'CONNELL, Sean	75	72	加藤 孝基	151

研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パッセ研究奨励金 I-A-1」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Point-to-point airline network design under cooperation and competition	書 名	
雑誌名	Proceedings of International Symposium on Scheduling 2021	論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月	2021年6月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	124-129	ペ ー ジ	
著 者 名	Jinha Hibino, Shungo Koichi, Takehiro Furuta, Mihiro Sasaki	著 者 名	
備 考	○済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
②		②	
論文題目	Cooperation and competition to design a point-to-point airline network under regulation for a new entry	書 名	
雑誌名	Journal of Advanced Mechanical Design, Systems, and Manufacturing	論 文 名	
巻 号	Vol. 16, No. 4	出 版 社	
発行年月	2022年10月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	20 pages	ペ ー ジ	
著 者 名	Jinha Hibino, Shungo Koichi, Takehiro Furuta, Mihiro Sasaki	著 者 名	
備 考	○済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）

2021年度
パッへ研究奨励金 I-A-1 (特定研究助成・特別)研究成果報告書

2022年 4月 6日

氏名	中島 明	所属	理工学部 機械システム工学科
研究課題	非拘束マニピュレーションにおける動特性を考慮した VR 見まね学習法		
研究の種類	グループ		
共同研究者	坂本登		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究では、人間の多様な操り動作を表す非拘束マニピュレーションについて、人間の動作データに基づいたロボット運動制御法を獲得するため、VR 環境を利用した見まね学習法について取り組んだ。非拘束マニピュレーションは Throwing, Catching, Hitting/Batting, Pushing, Sliding, Rolling, Balancing といった広い表現能力を持つ一方、その広大な表現空間のため、目的を達成できる動作を生成することが非常に難しい。そのため、人間の動作からロボット運動を生成する見まね学習が有効な手法として注目されている。しかしながら、人間の動作は非侵襲的であることが求められるため、正確な計測が難しく、また、有効なセンサ機器にも乏しい。そこで本手法では、学習対象とする動作を仮想空間 (VR 空間) に構築して、その環境と現実環境 (人間) との相互インタラクションを実現することで、より容易で安価な人間動作のロボットへの導入を目指した。</p> <p>具体的には 3 つテーマに取り組んだ：(1) 3 次元空間でのコンタクトジャグリングを実現する制御系設計、(2) 2 次元空間でのボール打ち上げタスクの安定化制御、(3) 2 次元空間でのロボットマニピュレータと壁面との相互インタラクションを実現するリアルタイムシミュレータの開発。(1) では人間の手の平でボールを操るジャグリングの一種であるコンタクトジャグリングに取り組み、3 次元空間でのモデリングおよび制御手法を開発した。(2) では卓球でのボール打ち返しの一種としてボールの打ち上げ運動を扱い、連続・離散状態を含むシミュレータの開発および打ち上げタスクの安定化制御を実現した。(3) ではロボットマニピュレータと壁面との接触 (衝突) を扱い、壁面をマスレスなバネ・ダンパ系としてモデリングすることで、マニピュレータと壁面の相互作用を表現可能なシミュレータを作成した。ここでは人間の腕の動作を 6 自由度のハプティクスデバイスにより計測し、それをロボットマニピュレータの手先目標値としてリアルタイムに反映するものとなっており、VR 空間のロボットマニピュレータを人間の腕として動かすことで、仮想空間内の物体に対して接触・押すなどの動作が可能となっている。これら (1)~(3) すべてを融合することが最終目標であったが、残念ながら本年度内では未達となった。(1) については本年度内に成果刊行物として発表し、(2) については 2022 年度の国際会議 (投稿済み)、(3) については国内会議で発表予定である。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
「2021年度南山大学パッセ研究奨励金 I-A-1」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。			
①		①	
論文題目	A Palm Circle Task Controller of Contact Juggling for Ball-and-Plate System with 6-DOF Manipulator	書名	
雑誌名	Proceedings of SICE Annual Conference 2021	論文名	
巻号		出版社	
発行年月	2021年9月	出版年月	
ページ	pp. 615-620	ページ	
著者名	Akira Nakashima, Taiga Ishiguro and Noboru Sakamoto	著者名	
備考	済	備考	済・未（ 年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 1月 20日

氏名	吉田 竹也	所属	人文学部人類文化学科
研究課題	バリと沖縄の楽園観光地に生きる観光サバルタンの事例考察を通じた観光リスク論の探求		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究は、①観光リスク論の理論的探求、②「観光サバルタン」に着目しつつライフスタイル移住論を手掛かりに、バリや沖縄で①を具体化する研究、③複数の類似の観光地の間の関係メカニズムから来る観光リスクの発生について検証する研究、④観光概念を動態論的視座から更新する研究、の4つからなるものである。</p> <p>2021年度は、新型コロナウイルス感染対策の影響により、昨年度に続いて夏季の海外渡航ができず、バリ出張を断念したため、研究計画の遂行に支障が生じた。とくに②はバリ島での現地調査・資料収集が滞っている。ただし、SNSを通して最小限の情報収集を行うことはできており、その内容は7月に観光した『神の島楽園バリ』の中にも盛り込むことはできた。夏には沖縄方面に出張したが、緊急事態宣言下であったこともあって、やはり昨年度と同様に、対面調査については慎重を期した。しかし、今年度最重要の課題と位置づけていた西表島・沖縄本島北部の環境省施設を訪れての情報収集は、先方のご厚意もあって、果たすことができた。これによって、昨年度いったん研究ノートにまとめていた奄美・沖縄の世界自然遺産に関するデータの補充を行うことができた。</p> <p>研究奨励金は、すべて書籍の購入に充てた。夏季に予定していた調査のための出張を国内のみに変更したことの結果である。</p> <p>昨年度の経験から、現地での資料収集があまりできないことを予期し、今年度は当初からデスクワークによるデータの収集・整理と議論構築に注力する方向で研究を進めた。その成果として、手元のデータを整理してバリに関する単著を刊行することができた。また、①④に関するノートの執筆を進めた（これはまだ成果の刊行には至っていない）。③については、新たな調査が進まないこともあって、具体的な研究トピックから今後外すことを考えなければならないであろう。</p> <p>一方、デスクワーク中心となった結果として、全体の議論の構想は進めることができている。「観光サバルタンの事例考察」は進められておらず、議論として発展させることができているが、サバルタンを「周縁的存在」と捉え直し、そうした人々や周縁的観光現象のいくつかに関する民族誌的記述を積み上げて観光リスク論の探求を行う、という構想を温めている。ひきつづき、今年度の作業の継続の上に、一定の軌道修正をも視野に入れながら、次年度も本研究テーマによる研究を進めていきたいと考えている。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パッセ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書名	『神の島楽園バリ——文化人類学ケースブック』
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	樹林舎
発行年月		出版年月	2021年7月
ページ		ページ	210 ページ
著者名		著者名	吉田 竹也
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年4月 6日

氏名	後藤 明	所属	人類文化学科
研究課題	ユーラシア大陸から渡海した人類集団の統合的研究		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>申請者の課題はホモ・サピエンスが「アウト・オブ・アフリカ」をなしとげ、ユーラシア大陸へと移動し、さらには太平洋の島々やアメリカ大陸へ海を渡って移動した意味や方法、背景にある技術や知識をを総合的に考えることである。そのために 2021 年度は具体的な 3 つの課題を設定し、本助成金の研究テーマとした。</p> <p>申請書にあった 2021 年度の研究目的は(1). 原初的な舟、とくにアウトリガーカヌーの構造 (例 船体と浮木や腕木の比率) を民族資料から統計分析する、(2). 海を隔て、目視できない目標に到達するために必要な方法、広義の「ナビゲーション」方法の検討 (例 M.R. オコナー『道を見つける力：人類はナビゲーションで進化した』、2021) を民族誌や神話伝承、認知心理学の成果から理解する枠組構築、(3). 神話モチーフや神話テキストの統計分析。</p> <p>(1) に関しては、出ユーラシアの統合的人類史学 文明創出メカニズムの解明 第 6 回全体会議、A01 班 人口的環境の構築と時空間認知の発達において「P-1 オセアニアにおけるアウトリガーカヌーの形態分析 Morphometric analysis of outrigger canoes in Oceania」としてポスター発表を行った。さらに現在、詳細は校正中の著作『環太平洋人類集団の舟』(2022 年刊行予定、南山大学人類学研究所モノグラフ) にて発表予定である。</p> <p>(2) については、文献を中心に環太平洋の先住民における伝統的な天文学に基づく、方位観、暦およびナビゲーションのデータ収集を行った。その成果は「ハワイ」『貝塚』(査読付き) として発表した。さらにアジアと太平洋における伝統的暦に関する国際シンポジウム (2021 年 3 月) の成果報告書である Calendar used in Asia and the Pacific (南山大学人類学研究所研究論集、申請者後藤も編者の一人) にて論文「Calendar among Oceanic Seafarers」として、太平洋の航海移動民に特徴的な天文知識と暦の分析結果として発表している。</p> <p>(3) については、オーストラリア・アボリジニやアフリカ・カラハリサン集団の神話モチーフをデジタル化し、統計分析にかける準備を完成した。その成果の一部は「人類最古の天文学と天文神話」(角南聡一郎他編『神話研究の最前線』収録予定) として論文文化を行っている</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	2022 「ハワイ諸島における考古天文学的研究—近年の研究展望—」： .	書 名	レジリエンス人類史
雑誌名	『貝塚』	論文名	遠隔島嶼のレジリエンス
巻 号	77	出版社	京都大学出版会
発行年月	2021 年 12 月	出版年月	2022 年 3 月
ペ ー ジ	11-24	ペ ー ジ	246-264
著 者 名	後藤 明	著 者 名	後藤 明
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書 名	Calender used in Asia and Pacific
雑誌名		論文名	Calendar among Oceania seafarers
巻 号		出版社	南山大学人類学研究所
発行年月		出版年月	2022 年 3 月
ペ ー ジ		ペ ー ジ	未定
著 者 名		著 者 名	後藤 明
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論文名	
巻 号		出版社	
発行年月		出版年月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 4月 5日

氏名	渡部森哉	所属	人類文化学科
研究課題	中央アンデスのワリ帝国期の図像表現の研究		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>新型コロナウイルスの関係でペルー共和国に渡航することができなかつたため、現地のペルー人に土器の図面を作成してもらい、図像分析を進めた。</p> <p>ワリ帝国は中央アンデスに後 9-10 世紀に台頭した帝国であり、インカ帝国（後 15-16 世紀）と多くの類似点を示す。そのためインカ帝国の祖型としばしば見なされる。一方で相違点も存在する。その 1 つが、インカ帝国では具象的図像表現が殆ど存在しないのに対し、ワリ帝国では多くの人物像が土器などに描かれたという点である。そのため、ワリ文化の図像表現を詳細に分析することで、ワリ帝国を構成する人間集団について考察することができる。古代アンデスは無文字社会であるため、多くの無文字社会と同様に、人物像は具体的な歴史上の人物を表しているのではなく、役割や民族集団といったカテゴリーを表していると推測できる。ワリ文化の人物表現はいくつかの種類に分類できる。</p> <p>研究代表者が調査を実施しているペルー北部高地カハマルカ地方においては、顔を 4 分割して斜めに赤と白で塗り分ける人物表現が多く認められる。この人物はペルー南部の遺跡エスピリトゥ・パンパでも確認されている。同遺跡ではカハマルカ文化の土器も出土しており、ペルー北部高地との関係があったことを示している。またワリ帝国末期にはこの人物は捕縛された姿で描かれている。この人物に着目することで、ワリ帝国の通時的変化を把握できる可能性がある。また、ワリ帝国期には黒色磨研土器が多く製作されており、人物を表現した壺が多い。カハマルカ地方のエル・パラシオ遺跡で出土した黒色人物が手にしている持ち物が不明であったが、文献の精査によってサボテンであることが判明した。このことによってこの人物の帰属を判定する手がかりが増えた。おそらく儀礼を司る神官集団であり、ペルー北海岸の社会との繋がりを示している。</p> <p>関係する研究発表として次のものがある。</p> <p>Watanabe, Shinya 2021.04.15 Cultural Diversity and Its Implications: A Case Study from Middle Horizon Cajamarca, Northern Highlands of Peru. Paper presented at the 86th Annual Meeting of the Society for American Archaeology, online.</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書名	Actas del VII Congreso Nacional de Arqueología
雑誌名		論文名	Terlén La Bomba en el valle medio del Jequetepeque: nuevos datos del Horizonte Medio
巻号		出版社	Ministerio de Cultura del Perú
発行年月		出版年月	2022年8月頃
ページ		ページ	未定
著者名		著者名	Watanabe, Shinya & Ugaz, Juan
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（2022年8月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2022年4月8日

氏名	青柳 宏	所属	人文学部人類文化学科
研究課題	動詞句階層構造仮説の再検討：動詞文法化の日韓比較から		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究の目的は、報告者の前年度までの研究(Aoyagi 2010, 2017, 2019, 2020 等)を受けて、[1]のように語根($\sqrt{\text{Root}}$)、動詞化素(<i>little v</i>)、使役化素(Cause)、ボイス素(Voice)、適用化素(Appl(icative))などの主要部からなる多層構造をなしているという動詞句階層構造仮説を検証することにあった。</p> <p>[1] [ApplP EA1[+m] [VoiceP EA2[+a] [CauseP EA3[+c] [vP(=VP) IA $\sqrt{\text{R}^{\wedge}\text{v}}^{\wedge}\text{Cause}^{\wedge}\text{Voice}^{\wedge}\text{Appl}$][+m]=[+mental state], [+a]=[+actor], [+c]=[+cause change]</p> <p>この仮説、特に Appl の出現位置に関する違いによって、(i)日本語に存在する除外型受身（例：太郎は花子に泣かれた）が韓国語に存在しないこと、(ii)日本語にみられるモラウの受益を意味する補助動詞への文法化（例：太郎は花子に働いてもらった）が韓国語の <i>pat-ta</i> にはみられないことが同時に説明される。また、興味深いことに、日本語と同じ日琉祖語から分岐した琉球諸語には、韓国語と同様に(i)除外型受身も(ii)モラウの意味の動詞の補助動詞化もみられない。</p> <p>そこで、今年度は昨年度後半に続き、ヤル系授受動詞について検討を加えた。上述のように、韓国語には除外型受身のラレや授益の(～テ)モラウに該当する補助用言は存在しないが、日本語のヤル/アゲルと同様に、韓国語の <i>cwu-ta</i> には(～テ)ヤルに該当する用法がある。ところが、日本語で許される[2a, b]のうち、韓国語で許されるのは[2a]のみである。</p> <p>[2] a. 太郎は花子に飯を食わせてやった。 b. 太郎は花子に漫画を読ませてやった。</p> <p>「食わす」「読ませる」はそれぞれ「食う」「読む」の使役形であるが、「家族を食わす」は可能だが「*学生を読ませる」は不可能であることが示すように、同じではない。Aoyagi (2021, to appear)では、[2a]と[2b]では Cause の位置が異なり、かつ、ヤル系動詞の占める Appl の位置も異なることを示した。より具体的には、日本語の High Appl は[1]のように Voice より高い位置に生じうるが、韓国語のそれは Voice より低く、vP より高い位置に生じることが判明した。</p> <p>以上の研究成果は、以下の学術論文に発表した。</p> <p>1. “How High Is High Applicative in Japanese and Korean?” (要旨査読付論文)、単著、2021年9月、<i>Papers from the Poster Sessions of the 28th Japanese/Korean Linguistics</i>, CSLI: Stanford University (published online), pp. 1–14 (14p.) DOI: https://web.stanford.edu/group/cslipublications/cslipublications/ja-ko-contents/JK28/poster01.pdf</p> <p>2. 『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論 3』(査読付)、共著(小川芳樹、中山俊秀、他 16名)、2022年11月(刊行予定)、開拓社、総頁数未定(執筆担当部分：「日韓語の適用形について—補助動詞ヤルと <i>cwu-ta</i> を中心に—」、単著、(15p.))</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書名	『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論 3』
雑誌名		論文名	「日韓語の適用形について－補助動詞ヤルと cwu-ta を中心に－」
巻号		出版社	開拓社
発行年月		出版年月	2022年11月（予定）
ページ		ページ	未定
著者名		著者名	青柳宏
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（2022年11月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	『形態論と言語理論』
雑誌名		論文名	「日韓語における多重接辞について」
巻号		出版社	開拓社
発行年月		出版年月	2023年1月（予定）
ページ		ページ	未定
著者名		著者名	青柳宏
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（2023年1月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2021年 12月 8日

氏名	藤川美代子	所属	人文学部
研究課題	海洋動植物の収奪とドメスティケーションをめぐる文化人類学的研究(2)		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>2021 年度は、台湾・日本における寒天原藻および寒天の生産・加工・流通に関わる現地調査(日本のみ)と史資料調査を重点的に実施した。得られた成果は以下のとおりである。</p> <p>1) 台湾: 日本統治時代に台湾東北部で「海女」と呼び得る人々が誕生した背景には、①明治期以降、寒天(・原料のテングサ)が国際商品化したこと、②日本が植民地政策下でテングサ漁場開拓を試みたことが影響している。また、彼女たちの現在を考える時、③素潜り漁の男性、タンクを背負う原住民やダイバー、産地問屋など多様なアクターとの関係性や、④世界の海藻産地(アフリカ・南米等)との競合、消費地の中国大陸・香港・韓国・日本との関係、⑤露店での商品販売をめぐる海女同士の駆け引きなどミクロかつ日常的な部分への注視が必要不可欠である。</p> <p>2) 日本: ①静岡県伊豆半島の須崎・仁科両地区での現地調査から、多種の寒天原藻が産地の海女から選別作業担当者、各生産地の漁協へ、入札を経て仲買業者へ、全国各地のトコロテン・寒天加工者へ、菓子店等へと受け渡されていく過程では、各アクター間に海藻に関わる知識の著しい不均衡と分断が見られつつも、仲買業者を通じて日本国内の生産・加工・流通に関わる各アクターや世界の寒天原藻の産地とが確かにつながる様を見て取ることができた。②日本の寒天が世界的な需要を生んでいた江戸時代後期から昭和 60 年代頃までに、日本各地・朝鮮・台湾・中国・東南アジア・欧米をつなぐハブとして重要な役割を果たしたと思われる大阪の「俵物会所」を中心とする海藻問屋に関する資料を収集・分析しつつある。③1910 年代に、チリ政府の依頼を受けた近代捕鯨の父・岡十郎が漁場調査に赴いた後、テングサを含む海洋資源の採捕権を求めて智利漁業株式会社を設立する経緯に、渋沢栄一・近藤廉平・浅野総一郎らが関わっていたことや、日本人がアメリカで寒天原藻の採集・寒天への加工を実現したことなどが当時の新聞資料から明らかになりつつある。</p> <p>3) 口頭発表の成果: 日本民俗学会第 73 回年会 公開シンポジウム「海が結ぶ日本と世界」ー渋沢敬三と日本常民文化研究所ー(10 月 9 日、於:神奈川大学みなとみらいキャンパス)に招かれ、「海に生きる女性ー船上生活者と海女ー」と題して研究発表を行った。</p> <p>今後も引き続き、寒天やその他の増粘多糖類の原藻(非養殖・養殖を含む)に関わる生産・加工・流通について調査・分析を進めたい。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	「よい石花菜」とは何か 台湾東北角における Gelidiaceae の採集・加工・売買をめぐる民族 誌的研究	書 名	
雑誌名	『国際常民文化研究叢書』	論 文 名	
巻 号	15	出 版 社	
発行年月	2022年3月刊行予定	出版年月	
ペ ー ジ	未定	ペ ー ジ	
著 者 名	藤川美代子	著 者 名	
備 考	済・未（ただし、校正稿。刊行物 は2022年3月に提出予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出版年月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出版年月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）

2021年度
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 4月 7日

氏名	上峯篤史	所属	人文学部人類文化学科
研究課題	中国旧石器文化研究 (3) : 鋸齒縁石器群の年代精査		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>研究目的</p> <p>東アジアにおける新人 (ホモ・サピエンス) 集団の定着過程に国際的な関心が集まっている (Bae et al. 2017)。DNA 分析に基づく研究が新人の生物学的起源のリライトを繰り返す一方で、人類がもつ文化や行動に着目した考古学的研究は難航していて、新人文化とその前段階の旧人文化との関係 (連続 or 非連続) について議論が決着していない。その原因は、中国が公表する情報 (年代、石器群の内容) の不鮮明さ、情報量の少なさにある。この点の解消を目指して、昨年度までは中国における重要資料の悉皆的な実見と資料化、現地調査を実施しての年代の再検討に取り組んできた (上峯 2019、上峯ほか 2020、上峯ほか 2021)。また中国からさらに東への人間集団の拡散状況をとらえるため、京都府京丹後市にて新人拡散期の遺跡を発掘調査して新たな資料を獲得した。</p> <p>今年度は、これまでのプロジェクトで得た年代試料の分析から、遺跡の精密な年代決定を試みた。本研究で信頼できる年代値が獲得・提示されれば、既知の遺跡どうしの時間的關係がより具体的に整理され、中国北部や日本列島への新人拡散についてより細かな時間幅で議論できるようになる。こうした新たな年代測定を試みる研究は、河北省文物研究所と共同研究協定をむすび、文理融合的な研究を実践してきた応募者だからこそ実現可能な、特色ある研究である。</p> <p>研究の経過と結果</p> <p>今年度も訪中しての調査が困難であったため、昨年度までに獲得したサンプルの分析、得られた分析データの解析を進めた。また代替研究として、日本国内の石器資料で本研究の目的に近いものの検討も、あわせて実施した。</p> <p>中国河北省水簾洞遺跡に関して、新たにもたらされた動物骨の放射性炭素年代測定結果に、石器製作技術の解析結果を加えて、Quaternary International 誌にて論文発表した。日本国内の資料としては、京都府京丹後市上野遺跡、長野県大町市木崎夏期大学遺跡の研究に取り組んだ、前者については、新たな発掘調査によって鋸齒縁石器群の新規資料を獲得し、現在、年代決定をふくめた室内分析作業のただ中にある。研究成果は 2022 年度中に公表予定である。後者については、年代決定と遺跡周辺の古地形復原のための分析を進めており、2022 年度中に、研究成果を論文投稿の予定である。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Lithic production strategy of early upper Paleolithic in Shuilian Cave, North China	書名	
雑誌名	Quaternary International	論文名	
巻号	610	出版社	
発行年月	2022. 2	出版年月	
ページ	108-121	ページ	
著者名	上峯篤史、渡邊貴亮、王法崗、山根雅子	著者名	
備考	済	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年4月13日

氏名	和泉悠	所属	人文学部人類文化学科
研究課題	言語哲学を中心としたヘイト・スピーチの多面的研究		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究の目的は、ヘイト・スピーチを中心とする、市民社会において不信と断絶を生む言語活動を、言語哲学とその関連分野の研究手法を用いて分析し、包括的な理解を与えることである。</p> <p>科研費課題としては 2021 年度が最終年度であり、第一に、これまでの研究成果を包括的な観点からまとめることに注力した（成果図書の一部①）。この書籍においては、ヘイト・スピーチをはじめとした有害な言語現象を、言語哲学・言語学研究の枠組みにおいて、どのように取り扱うべきか、という問いに取り組んだ。穏当な言語現象を研究対象として発展してきた既存の研究を整理しつつ、標準的な見解の可能性と限界を検討した。</p> <p>第二に、今後の展開も視野に入れつつ、ヘイト・スピーチに関する、理化学研究所の荒井ひろみ氏らとの共同研究を進展させた。5 月に開催された応用哲学会第十三回年次研究大会においては、「哲学の応用と社会実装—ヘイトスピーチをめぐる文理共創研究の可能性と課題—」という題目にて研究発表を行い、日本語ヘイト・スピーチ自動検出技術作成に向けた課題や展望を議論した。また、8 月に立命館大学にて行われた国際研究会、<i>The 3rd International Workshop on Hate Speech in Asia and Europe: Pandemic, Fear, and Hate</i> においては“Abusive Tweets in Japanese during the COVID-19 pandemic”という題目で研究発表を行い、パンデミックと排外主義的言説の関係性という観点からツイッターの投稿を収集・分析した。</p> <p>以上の研究発表を踏まえ、ヘイト・スピーチ自動検出技術に関する論考を執筆した（成果雑誌の一部①）。この論文では、ヘイト・スピーチ自動検出や、カウンタースピーチの自動生成といった、関連技術が実際どのように作成され、機能するのかという点を、具体例をあげつつ概説し、その技術が抱える実際の・社会的課題を指摘し、検討した。たとえば、「自動」に検出されるといっても、どのような判定基準を与えるのか、そしてその基準を学習するための大量のデータを「人力」でひとつひとつ準備しなければならない。その過程における恣意性をどのように克服するかが課題のひとつである。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	AI はレイシズムと戦えるのか 自然言語処理分野におけるヘイトスピーチ自動検出研究の現状と課題	書名	悪い言語哲学入門
雑誌名	思想	論文名	
巻号	1169	出版社	筑摩書房
発行年月	2021年8月	出版年月	2022年4月
ページ	pp. 88-105	ページ	272 p.
著者名	和泉悠, 仲宗根勝仁, 朱喜哲, 谷中瞳, 荒井ひろみ	著者名	和泉悠
備考	済	備考	済
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 3月 22日

氏名	中尾央	所属	人文学部
研究課題	弥生・古墳時代の考古遺物データに関する定量的研究		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究の大きな目的として以下を挙げた:「本研究では、特に日本の弥生時代と古墳時代に関して、甕棺や住居址など、各種の考古学的データを用いて定量的に考察することを目的とする」。今年度はまず、甕棺のデータを用いて弥生時代北部九州(糸島, 早良, 福岡, 三国, 朝倉, 筑紫など)の人口を推定し、その推定値と古人骨に残された暴力痕跡から推定された暴力頻度の関係を定量的に考察した論文を発表した(論文1)。古墳時代については、宮崎, 岡山, 福島の前古墳時代住居数と古墳サイズの関係について、データを集め終わって論文を準備中である。また、弥生時代前期の遠賀川式土器について、さまざまな考察を行って論文として発表した(論文2・4)。遠賀川式土器の三次元計測を行ってその結果を二次元実測図のデータと比較し、従来手法との差異を考察したり(論文2)、また三次元・二次元データにもとづく解析結果を踏まえて遠賀川式土器の拡散過程を推測したり(論文4)した。</p> <p>最後に、これは当初の研究計画にはなかったものだが、コロナなどで学会出張が取り消されたために新規の課題として、古人骨に関する考察も行った。日本各地で縄文～古墳時代までの古人骨を三次元計測し、その三次元データについて幾何学的形態測定(geometric morphology)の中でもランドマーク法と呼ばれる手法を用いて、古人骨形状の数理的解析を行った。具体的には国立科学博物館, 大阪市立大学医学部, 京都大学理学部・総合博物館, 土井ヶ浜人類学ミュージアムなど、多数の古人骨を所蔵している研究所・施設でさまざまな時代の古人骨を計測した。まだ解析は古墳時代古人骨の一部にしか行っていないが、頭蓋形状について、一部の地域・時期でゆるくながら形状差が見られることがわかり、この内容を次年度に論文化の予定である。さらに次年度は、こうした古人骨の形状変化と考古遺物形状の変化の両者の関係について、考察を進めていく予定である。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Population pressure and prehistoric violence in the Yayoi period of Japan	書名	
雑誌名	Journal of Archaeological Science	論文名	
巻号	132	出版社	
発行年月	2021/08	出版年月	
ページ	105420	ページ	
著者名	Nakagawa, T., Tamura, K., Yamaguchi, Y., Matsumoto, N., Matsugi, T., and Nakao, H.	著者名	
備考	済	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目	遠賀川式土器を例とした三次元モデルと二次元実測図データの比較	書名	
雑誌名	情報考古学	論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名	野下浩司・金田明大・田村光平・中川朋美・中尾央	著者名	
備考	未（2022年3月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目	SfM とレーザー計測による古人骨計測結果の比較	書名	
雑誌名	奈文研論叢	論文名	
巻号	3	出版社	
発行年月	2022/03	出版年月	
ページ	39-64	ページ	
著者名	中川朋美・金田明大・田村光平・中尾央	著者名	
備考	済	備考	済・未（年月頃予定）

④	
論文題目	遠賀川式土器の形態に関する数理的考察 — 田村遺跡、矢野遺跡、綾羅木郷遺跡を中心に—
雑誌名	奈文研論叢
巻号	3
発行年月	2022/03
ページ	65-82
著者名	野下浩司・金田明大・田村光平・中川朋美・中尾央
備考	済

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2022年2月3日

氏名	Antony Susairaj	所属	人類文化学科
研究課題	The Hazards of Passing on the Hereditary Occupation: A Study on the Identity and Occupation of Arunthathiyar Community in India		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>This research is done among Arunthathiyar community living in Janglapuram Village, Tirupattur District, Tamil Nadu, South India. Arunthathiyar community is considered to be the lowest caste in the Indian society. In caste-based Indian society, occupation is hereditarily determined and passed on to the younger generations of the respective castes though by law there is freedom to choose one's occupation. Arunthathiyar community who are considered to be lower in status, are made to be impure and perform jobs which are unclean and menial. They are traditionally engaged in manufacturing of winnowers made of bamboo; their identity is tied to this occupation. In recent years, most of the younger generation of this community prefer white-collar jobs over the hereditary occupation. The reason for discontinuing the hereditary occupation is researched based on the field research, gathering of materials, and discussion with research scholars. The result of the research is scheduled to be published in 'Academia, Journal of the Nanzan Academic Society, Humanities and Natural Sciences (24),' June 2022.</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2021年度南山大学パッセ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	The Hazards of Passing on the Hereditary Occupation: A Study on the Identity and Occupation of Arunthathiyar Community in India	書名	
雑誌名	Academia, Nanzan University	論文名	
巻号	人文・自然科学 24号	出版社	
発行年月	2022年6月	出版年月	
ページ	23 (A4紙)	ページ	
著者名	Antony Susairaj	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2021年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 3月30日

氏名	上田崇仁	所属	人文学部日本文化学科
研究課題	日本語教育活動の実践による日本語教育能力・多文化適応能力の変化に関する研究		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>当初、本研究の計画における目的は、「①本学学生を研究対象として、日本語指導が必要な外国人に対する日本語教育に実際に関わることにより、指導能力がどのように成長・変化していくかを指導状況の観察記録と学生の報告書から明らかにする。②多文化環境における適応能力、意識の変化も同様に明らかにする。③上の二つの結果から、日本語教育実習をどのように組み立てていくかを検討する。」の3点であった。しかしながら、新型コロナウイルスに関するまん延防止措置や緊急事態宣言などの影響が継続したために、①とした実際の日本語教育活動のための教室開設及び運営が不可能であった。そのため、③についても実施が困難となった。このため、②を研究の中心に据え、学生の働きかけを行い、学生からのコメントや報告書を基に、意識変化を追うこととした。具体的には、論文等の講読、講義形式での事例紹介と解説、異文化理解のためのゲーム、ゼミ内グループ別のプロジェクト研究、外部機関の見学を行った。詳細は公開した論文に掲載している。学生からの報告書をテキストマイニングの手法で、ワードクラウド、共起キーワード、二次元マップの三種類の視覚化を通して検討した。ゼミで学生がプロジェクトとして取り組んだ話題に関しては意識の広がりや深化が見られた一方で、座学でのみ取り上げた話題は、表面的な関心にとどまっている可能性が高い。新型コロナウイルスの影響で、学外での活動を行えない状況で、学生の経験、視野をどう広げ深めていくのか、今回のゼミでの活動は一定の成果を上げた判断している。その一方で、教員側がどのように授業を提供するかが、当然ではあるが、大きく影響していることがよくわかった。話題として取り上げたものや、プロジェクトで取り組ませたこと以外は、一過性の話題になってしまうようである。日本語教育は、狭義には目の前の学習者に適切な使用が可能になるように日本語を教えることではあるが、より広義には日本語学習によって学習者がどのような影響を受けるのか、どのような環境で日本語を活用するのかなどの視野が必要となる。この結果を踏まえ、今年度のゼミでの活動はもとより、日本語教育に関連する授業全般において、その後者を支える活動になるよう、改善を重ね、更に指導をしていきたい。いただいた研究資金については、その経費の積み上げが①の教室会場の借り上げ及び参加学生の交通費であったことから、事態の推移を見守りながら必要となる書籍の充当などに切り替えつつ、最後まで教室の開催をあきらめずに進めた。しかしながら、現実として教室開催の打ち合わせを行ったのみで、経費の執行ができず、残金が生じた。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	日本語教育領域を志望した学生の意識の広がりと深化	書名	
雑誌名	南山大学日本文化学科論集	論文名	
巻号	第22号	出版社	
発行年月	2022年3月	出版年月	
ページ	1-20	ページ	
著者名	上田崇仁	著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2022年 4月 12日

氏名	平子達也	所属	人文学部日本文化学科
研究課題	島根県仁多郡奥出雲町仁多方言の文法概説作成のためのオンラインによる調査研究		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>出雲方言の言語類型論的・一般言語学的観点から見たその特徴を明らかにするためには、出雲方言の記述文法書を作成する必要がある。本研究の目的では、その前段階として、申請者が主に歴史的観点から調査研究を行ってきた出雲仁多方言を対象とし、その言語体系の全体像を概観できる「文法概説」を作成することにあつた。</p> <p>少なくとも、研究期間内に「文法概説」作成に必要なデータを収集し終えることを目標とし、当初はデータの収集で精一杯だと考えていた。しかしながら、期せずして、Shimoji, Michinori(ed.) <i>An Introduction to the Japonic Languages : Grammatical Sketches of Japanese Dialects and Ryukyuan Languages</i>. (「研究成果公刊」の「「図書」の部」① https://brill.com/view/title/62978) の出版が計画された。この編著は、その名の通り日本語諸方言の文法概説をまとめたものである。本編著におけるそれぞれの文法概説は、対象読者として必ずしも日本語諸方言に通じていないものを想定しており、類型論的・一般言語学的観点から、それぞれの方言の特徴を明示する形での記述が求められるものであつた。これは本研究において報告者が企図した文法概説そのものである。編者である下地理則氏(九州大学)から依頼もあり、また、上述のような背景にも鑑みて、そのうちの1つの章を執筆することとした(Chapter 8 Izumo を担当)。</p> <p>執筆依頼を受けた時点では、十分なデータが得られていなかった。そのため、当初の予定通り、国立国語研究所の「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」プロジェクトで用いられている調査票を用いつつ調査を行なった。調査は、web 会議システム (Zoom) を使つてのオンライン調査と電話調査であり、合計 10 数回行った。従来から得ていたデータと、本研究における調査によって得られたデータを用い、最終的に 2022 年 2 月に原稿を完成させ、提出した。</p> <p>調査・執筆の過程で、名詞化接辞を伴わない節の名詞化が、どのような条件下で許されるかなど、これまで明らかでなかった形態統語論的な特徴についても明らかにすることができた。現在、原稿(文法概説)は出版に向けての準備段階である(校正原稿も未着)。当初の計画とはやや異なる形となつたが、上記文法概説の執筆により、本研究の目的はほぼ 100%達成できたものと考えられる。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書名	<i>An Introduction to the Japonic Languages : Grammatical Sketches of Japanese Dialects and Ryukyuan Languages</i>
雑誌名		論文名	Chapter 8 Izumo (Western Japanese)
巻号		出版社	Brill
発行年月		出版年月	2022年9月22日(予定)
ページ		ページ	未定
著者名		著者名	Shimoji, Michinori (ed.)
備考	済・未(年月頃予定)	備考	未(2022年9月頃予定)
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未(年月頃予定)	備考	済・未(年月頃予定)
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未(年月頃予定)	備考	済・未(年月頃予定)

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 3月 30日

氏名	福本 拓	所属	人文学部日本文化学科
研究課題	COVID-19 パンデミック下の在日外国人の就業環境と地域労働市場の変容		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>研究経過</p> <p>本研究の目的は、日本における外国人住民の安定的な「定住」実現に向けた課題や障壁を、特に COVID-19 流行下の状況も踏まえて検討することにある。主たる研究対象地域として、東海地方を中心に、報告者がこれまで多文化共生アドバイザーを努めてきた四日市市を取り上げた (COVID-19 の収束が見込めず宮崎県日向市での実地調査は断念した)。研究の具体的な方法として、外国人住民・不動産業者・技能実習生の監理団体等に対するヒアリングを断続的に実施したほか、関連統計・資料の収集を行った。</p> <p>研究結果</p> <p>①日系南米出身者ならびに②技能実習生のそれぞれについて、以下のような知見が得られた。①については、近年住宅を取得した人々や彼ら・彼女らを仲介した不動産業者 (ブラジル人経営によるものも含む) から、地域の住宅市場・労働市場に関連した情報を得た。結果、日本生まれの子どもの存在が住宅取得の強い動機になっていること、外国籍児童への対応がスムーズな学校区が選ばれやすいこと、そして言語上の障壁から同国人の経営する不動産業者が選ばれやすいことが明らかになった。住宅購入者の多くが、COVID-19 による影響は強く受けていない点も認められた。リーマンショック時の記憶が残存しており、そのために本人ないし配偶者がなるべく雇用継続の面で安定した職種を選ぶ傾向がある。しかし同時に、全体としては依然不安定な就業形態にある者の割合も大きい。つまり、社会階層化がより鮮明になりつつある。また、ローカルな住宅市場との関連では、地価や土地の広狭といった要因のために、既存の住宅ストックは十分活用されておらず、外国人の住宅取得は地域の高齢化の改善や持続的発展には必ずしも寄与していない。この点からは、行政等の介入による効率的な支援が求められるといえる。</p> <p>②に関しては、COVID-19 の流行下でも、現業職を中心に労働者不足が解消されない状況が続いており、そのために継続的な雇用確保という意味で技能実習生への依存度合が高まっている状況が明らかとなった。同時に、最低賃金の上昇や監理団体への管理費支出の負担が大きいため、(かつて言われたような) 人件費縮減という意味は失われつつある。3年ないし 5 年のローテーションでの労働者入れ替えが大勢を占めており、円安で技能実習生の確保が次第に困難になる中、地域の労働市場の持続性にいずれ深刻な懸念が生じる可能性も考えられる。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	南米出身外国人の住宅取得と「定住」再考一	書名	
雑誌名	『地理学評論』 (予定)	論文名	
巻号	未定	出版社	
発行年月	未定	出版年月	
ページ	未定	ページ	
著者名	未定	著者名	
備考	2022 年秋の日本地理学会秋期学術大会にて本研究の骨子を発表し、同誌への投稿を予定	備考	済・未（ 年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）

2021
**Pache Research Subsidy I-A-2 (Specified Research Support:
 General) Research Result Report**

Date: 31/1/2022

Name	Anthony Cripps	Affiliation	Eibei
Research theme	Designing effective teaching material for Japanese teachers of English		
<p>Summary of research achievements (Please write down the progress and achievements of your research briefly within 320 ~400 words.)</p> <p>This project aimed to research and design effective teaching material for Japanese teachers of English. The project explored the research question ‘What kind of material do Japanese teachers of English need?’ Through the creation of dedicated teaching materials, Japanese teachers of English had the opportunity to experiment with new and innovative material. The teaching materials that this research project created included useful audio and video files, as well as a host of other teaching support material such as lesson plans, and content based/skills-based handouts. A material development workshop was held for Japanese teachers of English. In this workshop teachers discussed the fundamentals of effective material development. The English teachers also had the chance to use textbooks developed for Eibei students and comment on their effectiveness.</p> <p>As part of this research project a presentation was given at the HICE conference in Hawaii (online) in January, 2022. In addition to the presentation, a paper entitled ‘Looking back, looking forward: Reflections on teaching an academic English course’ was published in the proceedings of the HICE2022 conference. I also plan to present my findings in the Tomorrow People conference and the CELC conference.</p>			

Published Research Results (Proposal included)

Please write down the published research with a clear indication of subsidy support, "2021 Nanzan University Pache Research Subsidy I-A-2". Please indicate whether the publication has been turned into the Education Planning & Research Promotion Office or not on the "Remarks" column.

Category of "Magazines"		Category of "Books"	
①		①	
Title of the article	Looking back, looking forward: Reflections on teaching an academic English course	Title of the book	
Title of magazine	HICE2022 Proceedings	Title of the article	
Volume #	1	Publishing company	
Published date	February	Published date	
Page	1-16	Page	
Author	Anthony Cripps, Nikki Hannah and Justin Mejia	Author	
Remarks	Done • Not yet (Turn in by:)	Remarks	Done • Not yet (Turn in by:)
②		②	
Title of the article		Title of the book	
Title of magazine		Title of the article	
Volume #		Publishing company	
Published date		Published date	
Page		Page	
Author		Author	
Remarks	Done • Not yet (Turn in by:)	Remarks	Done • Not yet (Turn in by:)
③		③	
Title of the article		Title of the book	
Title of magazine		Title of the article	
Volume #		Publishing company	
Published date		Published date	
Page		Page	
Author		Author	
Remarks	Done • Not yet (Turn in by:)	Remarks	Done • Not yet (Turn in by:)

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 4月 7日

氏名	千葉裕太	所属	外国語学部
研究課題	テオティワカンにおける黒曜石の象徴性と色の選択傾向の変移		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究の分析対象は、テオティワカン遺跡の巨大モニュメント「月のピラミッド」内から発見された、「墓 2」、「墓 3」、「墓 5」、「墓 6」より出土した黒曜石製遺物である。本研究の要である黒曜石製遺物の度量データについてはすでに採集を終えているが、複数の作業員により採集され Excel に入力されたデータのため、表記の細部に揺れが見られた。そのため表記ルールを定め、現在データの統一化を進めている。「月のピラミッド」の「墓 5」「墓 6」出土の製品については統一化が完了し、現在「墓 2」のデータの統一化を進めている。「墓 2」が完了次第、「墓 3」に進み、それが終わり次第、空間分析のために発掘図面上に落とし込み 3 次元復元図の作成へと進めていく計画である。</p> <p>本研究では世界観や色の象徴論に注目して、メソアメリカ全体の考古資料・歴史資料の情報と、テオティワカンの出土事例との適合を探り、この選択傾向が生じた要因と、その通時的変化について明らかにすることを目指している。そのため、メソアメリカにおける黒曜石の象徴性を探るため、上記のデータ統一化作業と並行して、歴史資料の精査から黒曜石の医術利用と色の象徴性との関連を調査した。その成果について日本ラテンアメリカ学会の定期大会で口頭発表を行ったところ、コメンテーターや複数の会員から様々な質疑を受け、また研究をより進めるための資料の提供も受けた。それらを踏まえてできるだけ早く論文を執筆し公刊する予定である。</p> <p>加えてテオティワカンにおける黒曜石に関する研究として、マヌエル・ガミオによる考古学研究と黒曜石製手工芸品産業について調査を行った。その成果は本学の『アカデミア』に寄稿予定であったが、報告者の新型コロナウイルス感染による体調不良により、断念した。あらためて研究をすすめ、できるだけ早い完成と交換を目指していく。</p> <p>上記の研究経過の通り、本研究は途上にあり、現時点では成果物の提出はできない。成果物の公刊が実現し次第、報告、提出する。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）

2021年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2021年3月31日

氏名	泉水 浩隆	所属	外国語学部スペイン・ラテンアメリカ学科
研究課題	スペイン語の無強勢語の発音と知覚に関する実験音声学的考察		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>筆者は、ここ数年、日本人スペイン語学習者の強勢語・無強勢語の発音と、それらがスペイン語ネイティブスピーカーによってどのように知覚されるかということに興味を持っている。この点に関する一連の分析を『アカデミア』文学・語学編 106号(2019年6月)、107号(2020年1月)、108号(2020年6月)、109号(2021年1月)で発表するとともに、さらにこれらから得られた結果を援用し、2020年10月に行われた日本イスパニヤ学会でも発表を行った。</p> <p>これらの研究結果を受け、今年度は、以下のような形での展開を考えた。</p> <p>ア. 泉水(2019, 2020a, 2020b, 2021)での結果を踏まえ、使用した刺激と異なる強勢語・無強勢語を含む文を選び、音声分析用ソフトウェアを用いて、その特徴を分析し、これまで得られた結果と比較対照する。</p> <p>イ. ア. と並行し、今後の知覚実験に向けた素材の試作を行い、状況的に可能であれば小規模な知覚実験を実施する。</p> <p>ウ. 同様に、状況的に可能であれば、ネイティブスピーカーおよび日本人スペイン語学習者から新たに選んだ強勢語・無強勢語を含む録音データを採集する</p> <p>イ. およびウ. については、残念ながら、対面での実験が行えるほどコロナ禍の状況が好転しなかったため、実施には至らなかったが、ア. については、2019年8月にメキシコ・グアナフアトで実施した実験、および、2019年10月にスペイン・サラマンカで実施した実験の結果を比較し、スペイン語でまとめた論文を <i>Sophia Linguistica</i> (上智大学国際情報言語研究所、査読誌) 70号に投稿し、採択された。また、関連テーマで現在進行中の科研費プロジェクト(課題番号 JP19K00865「日本人スペイン語学習者の韻律に見られる諸問題と音楽を利用した発音指導」)で行っている研究では、2020年6月に CIFE 2020 Girona (VIII Congreso Internacional de Fonética Experimental) において現地で1件発表を行う予定だったが、コロナ禍の影響により同大会の開催が1年順延されたため、2021年6月29日(火)、ハイブリッド方式で行われた同学会で、ようやくオンラインで発表するに至った。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	“Un estudio experimental sobre la percepción de las palabras tónicas y átonas: contraste entre <i>qué</i> y <i>que</i> ”	書名	
雑誌名	<i>Sophia Linguistica</i>	論文名	
巻号	70	出版社	
発行年月	2021年12月	出版年月	
ページ	pp.1-16	ページ	
著者名	SENSUI, Hirota	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 4月 7日

氏名	永田 智成	所属	外国語学部
研究課題	連邦制的分権化改革の帰結：南欧諸国を中心に		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>ある多民族国家では、連邦制の導入に代表される地方分権化政策が効果的に機能することによって、分離独立運動を鎮める働きをしている。他方、ある別の多民族国家では地方分権化を推進した結果、逆に分離独立運動を活発化させてしまっている。なぜこのような違いが生まれてしまうのか。国によって地方分権化政策の効果が異なってしまう要因はどこにあるのか。これが本研究における大きな問いである。</p> <p>上記の問題意識を前提に、今回は2つの問題に取り組んだ。ひとつは、独立をするための住民投票といっても、地域や国が違えば、その意味や内容は異なるということである。本課題では、スペイン・カタルーニャ州とイタリア・ヴェネト州およびロンバルディア州における住民投票の比較を通して、住民投票の実施により地域主義が過激化する事例と穏健化する事例との違いを、中央と地方の政党政治の回路の違いにより説明を試みた。結論から言えば、スペインの場合は、中央と地方で異なる政党システムを有していることから、中央・地方間の交渉が複雑となり、中央が地方の政策に介入するチャンネルが十分に用意されているとは言い難く、住民投票実施という事例ひとつをとっても中央は危機感を抱き、住民投票実施阻止という断固とした対応になる。他方、イタリアではスペインとは真逆の状態であるので、中央が住民投票の実施を阻止するところまではいかず、また大事にも至らなかった。この研究を『アカデミア』で発表させて頂いた。</p> <p>もうひとつ、初期ユーロメンバーになるための条件を満たす試みの中で、スペイン・イタリア両国において、民営化や分権化が大規模に行われたことを実証しようと試みた。これは、民営化や分権化というのは右派政権左派政権に関係なく、外圧が最もこうした動きを促すということの説明を試みるものであった。この研究成果を『スペイン史研究』にて発表しようと試みたが、残念ながら掲載には至らなかった。引き続き、発表に向けて努力していきたい。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	住民投票の実施をめぐる中央政府の対応	書名	
雑誌名	南山大学紀要『アカデミア』社会科学編	論文名	
巻号	第22号	出版社	
発行年月	2022年1月	出版年月	
ページ	45-68	ページ	
著者名	池田和希・永田智成	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年4月4日

氏名	真野 倫平	所属	外国語学部フランス学科
研究課題	アルベール・ロンドルとルポルタージュ文学の誕生		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究は、両大戦間に活躍したリポーター、アルベール・ロンドルの仕事を通じてヨーロッパにおけるジャーナリズムの発達を研究することを目的とする。ロンドルは、徒刑場、精神病院、軍隊刑務所、植民地、国際売春組織など、社会の隠された領域に光を当て、その悲惨な現状の改革を訴えた。ジャーナリズムの歴史においては「文学的ルポルタージュ」という新ジャンルを開拓する役割を果たした。今年度は特にルポルタージュにおけるリポーターの存在について考察を行った。</p> <p>並行して、ルポルタージュというジャンルを研究するうえでの理論的枠組みを探究した。ルポルタージュは現実についての記述であるという点で歴史と共通するが、歴史が距離を置いて過去を把握するのに対し、ルポルタージュは間近な現在を扱うという点で対照的である。そこから「歴史」「文学」「ルポルタージュ」といった枠組みがどのような点で異なるかという疑問を立て、それぞれの叙述の特徴について分析した。とりわけ歴史家の自己言及／リポーターの自己言及という問題に焦点を当てて歴史とルポルタージュのあいだの比較論考を行った。</p> <p>研究に当たっては、関連資料として、ジャーナリズムに関する資料ならびに歴史・文学関連の資料を購入した。また、研究に必要な機材としてPC用品を購入した。フランスへの研究出張を計画していたが、新型コロナウイルスの流行により中止せざるをえなかった。</p> <p>研究成果としては、以上の調査・研究にもとづき、『南山大学ヨーロッパ研究センター報』第 28 号に論文「歴史家が自己を省みる時」を執筆した。本論文においては、近年のフランス歴史学において、歴史家の自己省察が一つのジャンルとして確立されていることを指摘したうえで、その中からノラ『自己史試論』、ブシュロン『歴史家を職業とすること』とヴネール『失踪者シルヴァン・ヴネールに関する調査』を取り上げて分析し、歴史記述における自己言及の問題について考察した。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	歴史家が自己を省みるとき	書名	
雑誌名	ヨーロッパ研究センター報	論文名	
巻号	第28号	出版社	
発行年月	2022年3月	出版年月	
ページ	pp. 1-11	ページ	
著者名	真野倫平	著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 4月 3日

氏名	小林純子	所属	外国語学部フランス学科
研究課題	フランスにおける子ども向けのスポーツとジェンダー形成に関する研究		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究は、フランスで子ども向けのスポーツがどのように形成されたのか、現代のフランス社会では子どもがどのようなスポーツを実践しているか、これらの実践はジェンダー形成にどのような影響を与えているのかを明らかにすることを目的としていた。</p> <p>子ども向けのスポーツの形成においては、各種スポーツ連盟や学校体育が果たした役割が大きいことから、学校と関連するスポーツを担う連盟の規模や歴史を明らかにしたほか、柔道を例に先行研究ならびにオフィシャルなカリキュラムを分析し、現代の学校体育の中で育成されることが期待されている能力を明らかにした。また、体育を専門とする教師への聞き取りを通じて、授業における柔道、授業とは異なる枠組みとしての学校スポーツにおける柔道、学校外活動としての柔道の位置づけを明らかにした。</p> <p>その結果、フランスにおける柔道は、他のスポーツと比べて授業の中で実践されることは稀であり、学校スポーツ以上に学校外活動として子どもの自由な時間に行われることが多いこと、その理由として、場所やツールなどの物理的な制約や、教師の専門性、指導の難しさなどの技術的な制約が存在するということのほか、他の格闘系のスポーツ同様、女子と男子の平等な実践が課題となっていることが分かった。同時に柔道には、実践の方法によっては女子と男子の非対称的な関係の再生産を見直したり、自分自身の身体との関係や見方を変化させたりする可能性も見出されていることが分かった。</p> <p>フランスで子ども向けの柔道がどのように形成されてきたのかを理解することは、子どもへの知識や技術の伝達だけでなく、教師や専門家などの大人の職業的な正統性を浮かび上がらせるものでもあった。ここには、ある社会が学校に期待する能力や学校が重視する教育的価値と同時に、個別のスポーツのもつ教育的価値が立ち現れており、柔道以外のスポーツのみならず文化活動においても、それぞれの分野の固有の論理や利害関係を分析していくことの重要性を再認識することにつながった。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書名	タイトル協議中（共著）
雑誌名		論文名	「現代フランスの学校教育と課外活動：スポーツの場合」
巻号		出版社	青弓社
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	小林純子
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（2022年6月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2021年度
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2022年 3月30日

氏名	張 玉玲	所属	外国語学部 アジア学科
研究課題	在日華僑の生業と生活空間に関する民族誌的研究		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を800～1,000字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究は、日本の地方都市に分散して居住する華僑に着目し、彼らの生業と生活空間について民族誌的研究を行うことで、地方における華僑コミュニティの形成と展開のプロセスの解明と、農村の都市化、近代化を含む日本の社会変動の歴史を「周縁的」存在としての華僑からとらえなおすことを主な目的としている。</p> <p>2021年度は、地方における華僑地方における華僑の民族誌的研究の試みとして、戦前華僑の主な生業であった呉服行商から戦後の洋品店や中華料理など町の商店街での店舗経営などの職業転換や生存戦略を、彼らの居住地の近代化・都市化過程と結びつけながら、聞き取り調査、新聞記事、古写真、広告（ポスター）などの一次資料の収集を行い、分析作業を行った。研究結果は具体的に以下の二点にまとめることができる。</p> <p>1. 主に1920年に来日し福岡で呉服行商を行ったのち、1930年頃栃木県足利に移り、通信販売をはじめたJの回想録を事例として取り上げ、明治以降の福岡及び足利の鉄道、炭鉱産業の発展、織物産業の近代化及び農村の都市化とそれに関連する人々の移動、生活スタイルの変化などに対する分析を通して、呉服行商人の日本での生業と移動を規定する歴史的、社会的要因が明らかとなったと同時に、Jという生活者の目から見た近代化の波に飲み込まれつつある農村の諸相が浮き彫りとなった。（研究成果②）</p> <p>2. 九州各地及び三重、愛知、島根などで聞き取り調査を行った結果、意図的に交通が不便な農山村地域に移り、呉服行商を生業とした福建出身者の戦後の動きとして、鉄道などの便が良い近隣の小都市の商業地区（駅前の商店街など）に移り、洋品店や中華料理、パチンコなどの店舗経営を始めたことが挙げられる（研究成果①）。戦前から築き上げた同郷または日本人とのネットワークが存在していたことが原因の一つとして判明したが、1同様、彼らの生業と移動を規定する居住地の歴史的、社会的要因の解明は課題として残されている。今後引き続き取り組む予定である。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2019年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	「地方における華僑コミュニティの形成と展開-熊本県在住華僑の生業と暮らしの民族誌-」	書名	
雑誌名	『アカデミア』 人文・自然科学編	論文名	
巻号	第22号	出版社	
発行年月	2021/06	出版年月	
ページ	pp.107-130	ページ	
著者名	張 玉玲	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目	「福建の呉服行商人と近代日本の農村社会-ある華僑の回想録への解説を通して」	書名	
雑誌名	『日本民俗学』	論文名	
巻号	第309号	出版社	
発行年月	2022年2月	出版年月	
ページ	pp.65-93	ページ	
著者名	張 玉玲	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年2月15日

氏名	蔡 大鵬	所属	経済学部経済学科
研究課題	産業・貿易政策の政治経済学的研究—企業の政治活動を中心に—		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>グローバル経済の持続的な発展を実現していくためには、WTO を中心とする自由貿易体制を持続可能なものに改革することが必要不可欠である。そのための、不公平な貿易慣行に効果的に対処するためのルールを具体的に提示することは各国政府や産業界の現実的な要請であり、その経済理論的解明の点でも喫緊の課題である。研究期間中では、これまでの中国の産業・貿易政策を概観した上、国内外企業間の戦略的相互作用、また政府間の戦略的相互作用の両面を考慮しつつ、強制的な技術移転などの「不公平な貿易慣行」を採用する動機とその影響を明らかにすると共に、その効果的な対処法の提示を努めた。具体的には、下記の項目について分析を行った。</p> <p>(1) 「中国の産業・貿易政策」に関する考察 林毅夫・張維迎等が中心となって展開されていた産業政策のあり方に関する論争を切り口として、これまでの中国の産業・貿易政策の実態とその問題点についてレビューすると共に、政府と市場の関係のあり方を考察した。さらに、思想交流史の分析において用いる「脈絡転換」の視点を基づき、改革開放後の中国における経済学理論の再導入プロセスとその問題点についても考察し、経済学理論の再導入と産業・貿易政策の決定プロセスとの関係について分析した。関連研究成果を論文「産業政策再弁: 試論経済学理論的「脈絡性転換」現象（産業政策の再考: 経済学理論における「脈絡転換」について）」にまとめ、公刊することができた。</p> <p>(2) 「研究開発補助金と強制的な技術移転」に関する考察 中国政府は、自国に進出している多国籍企業に対して自国企業への技術移転を促すために、研究開発補助金を許与したり、また外資規制や政府調達等様々な行政手段を用いて、技術移転を要求したりしている。これまで、途上国における知的財産権の保護に関する先行研究が多いが、研究開発補助金と強制的な技術移転については、分析されてこなかった。そこで、投資受入国における最適参入規制を解明した Cai and Karasawa-Ohtashiro (2018) と Cai and Karasawa-Ohtashiro (2021) などをベースにしなが、 「研究開発補助金および強制的な技術移転が採用されるのはなぜか」について解明すると共に、多国籍企業や投資受入国の社会厚生等へのインパクトについても分析した。分析の際、企業による政治活動についても明示的に考慮した。関連研究成果を論文「Strategic Potential of R&D-intensive FDI Subsidy: Host Government's Endogenous Policy Choice」 (with Yingzi Long) にまとめており、現在投稿に向けて準備している。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書名	東亜思想交流史中的脈絡性轉換（東アジア思想交流史における脈絡轉換）
雑誌名		論文名	産業政策再弁：試論経済学理論的「脈絡性轉換」現象（産業政策の再考：経済学理論における「脈絡轉換」について）
巻号		出版社	台湾大学人文社会高等研究院東亜儒学研究中心
発行年月		出版年月	2022年2月
ページ		ページ	403 - 425
著者名		著者名	蔡大鵬
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 3月 30日

氏名	上田 薫	所属	経済学部経済学科
研究課題	寡占モデルのシェア関数アプローチによる研究		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>1. 研究経過：集計可能ゲームとは、各プレイヤーの利得関数に入る他のプレイヤーの戦略が集計関数により単独の値で表現されるゲームを指す。近年の寡占モデル研究において、古典的なクールノー寡占モデルのみならず多くの寡占モデルが集計可能ゲームであることが注目されている。報告者が従来研究してきた集計可能ゲームに対するシェア関数アプローチを適用することで、寡占モデルについて新しい知見を得ることが本研究の主要目的であった。</p> <p>寡占に関する先行文献を改めて検討した結果、製品差別化価格寡占モデルを研究対象として選んだ。シェア関数アプローチの重要な特長として、プレイヤー間の異質性の扱いが容易になる点があることから、製品差別化寡占モデルにおいて費用条件のみならず需要条件においても企業間に非対称性があるような場合の分析を、目指すことにしたのである。即ち、各企業の直面する需要曲線が異なる形をしている場合である。空間的競争アプローチにおいても、代表的消費者によるアプローチにおいても、こうしたケースを扱ったものは少ない。いくつかの可能性を検討した結果、最終的には、Bowley (1924)、Shubik and Levitan (1980) による線形需要関数寡占モデルを基本とし、企業が需要条件および費用条件の双方において非対称であるような場合に関する、シェア関数アプローチによる分析という形を採ることになった。</p> <p>こうした分析において当初目指した目標の一つは端点解を選ぶ、つまり需要がゼロになる価格を選ぶ企業が存在するような均衡の特徴付けだったが、これについては十分な成果を得るに至らなかった。主な原因は、企業が設定する価格の分布と需要パラメータの分布の関係の明確化に成功しなかったためである。そこで中途から研究の焦点を変更して、需要の非対称性の程度についてどこまで限定を加えれば全企業の均衡生産量が正になるか調べることにし、いくつかの興味深い結果を得た。即ち、需要及び費用パラメータの分布に適度な制限を設けることで、全企業が正の需要を得るような均衡が一意に存在することを示し、さらに、この均衡における企業間の非対称性とプライス・コスト・マージン、販売量、利潤の相対的な関係について明らかにした。</p> <p>2. 研究成果：1 に述べた経緯により得られた成果をまとめた論文を、「非対称な製品差別化の下での線形価格寡占モデルへのシェア関数アプローチ」という題名で南山経済研究第 36 巻第 3 号に掲載することができた。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	非対称な製品差別化の下での線形 価格寡占モデルへのシェア関数ア プローチ	書 名	
雑誌名	南山経済研究	論 文 名	
巻 号	第 36 巻第 3 号	出 版 社	
発行年月	2022 年 3 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	205-219	ペ ー ジ	
著 者 名	上田薫	著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）

2021年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年4月 8日

氏名	小林佳世子	所属	経済学部経済学科
研究課題	進化心理学および行動経済学の視点からみた 経済学における合理性		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究の最大の目的は、ヒトのもつ合理性を進化の視点までさかのぼって議論することで、伝統的経済学の中で扱われてきた「超合理性」と、近年大きな発達をしてきた行動経済学の中で扱われている「限定合理性」の両者をつなぐ概念としての、「適応合理性」の考え方を明らかにすることである。</p> <p>今回は、経済学や認知科学の世界で非常によく使われる、最後通牒ゲームという実験パラダイムを題材として用いた。最後通牒ゲームで示される認知バイアスは、大きく 2 つである。第 1 が、ヒトが見知らぬ他者にも示すその協力性あるいは利他性であり、第 2 が、自らが損をしてでも悪しき者を罰しようとする「罰する者」としての傾向である。2005 年にサイエンス誌は、現代の科学が直面する 25 の最重要課題の 1 つとして、協利行動の進化の問題を選んだが、両者ともに、この問題と直接関係する非常に重要な認知バイアスでもある (Kennedy & Norman 2005)。</p> <p>利他性に関する前者の議論は、『最後通牒ゲームの謎：進化心理学からみた行動ゲーム理論入門』として、昨年度 6 月に単著として出版された。そこでは、利他性のように一見「不合理」に見えるふるまいも、経済学が前提としてきたいわゆる「合理的」なふるまいも、その両者を、進化の中の適応という視点でみることで統一的に考えることができることを示した。本書では、それを、「適応合理性」と名付けた。</p> <p>なお本書は、経済図書賞としては最も権威のある、「2021 年度・第 64 回『日経・経済図書文化賞』」を受賞した。</p> <p>また第 2 の認知バイアスである、コストをかけてでも他者を罰するというヒトのふるまいについては、「ゲーム理論からみた怒りの感情の役割：最後通牒ゲームの受諾者を題材として」という論文で議論した。これは、『認知科学』という、認知科学の世界では日本で最も権威ある雑誌に受理された。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	ゲーム理論からみた怒りの感情の役割：最後通牒ゲームの受諾者を題材として	書名	
雑誌名	認知科学	論文名	
巻号	28巻3号	出版社	
発行年月	2021.9	出版年月	
ページ	445-457.	ページ	
著者名	小林佳世子	著者名	
備考	済	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2022年 3月 15日

氏 名	奥田隆明	所 属	経営学部
研究課題	周遊型観光消費モデルの小地域への展開 ～複数交通ネットワークの連携効果の計測～		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>この研究の目的は、企業が持つ携帯位置情報（観光ビックデータ）を活用して、小地域を対象にした周遊型観光消費モデルを開発し、交通ネットワークの連携効果を計測することにある。今年度はこの研究の 2 年目に当たり、高速鉄道の新駅が設置される三重県で市町村レベルの訪日外国人流動表を作成し、これを用いて 2 階層の周遊型観光消費モデルを開発した。また、観光集積の大きさが観光消費に与える影響を分析するために、独占的競争理論に基づいた周遊型観光消費モデルを開発した。以下では、その論文の内容について簡単に述べる。</p> <p>1) 三重県内市町村レベルにおける外国人観光消費モデルの開発、土木計画学研究・講演集、Vol. 64、奥田隆明・張銘</p> <p>リニア中央新幹線の新駅が建設される三重県を取り上げ、訪日外国人の携帯位置情報を利用して市町村レベルの訪日外国人流動表を作成する方法を提案した。また、作成した訪日外国人流動表を用いて、三重県内における観光消費の実態分析を行った。分析の結果、西日本からの外国人は伊勢志摩地域を周遊していること、東日本からの外国人は桑名市などを観光しているが、三重県北部を周遊する外国人は少ないことなどを明らかにした。</p> <p>2) 価値共創によるモビリティ・サービスのイノベーション～三重県内における外国人周遊観光マーケティング～、サービス学会国内大会・講演論文集、Vol. 10、奥田隆明・張銘</p> <p>都道府県レベルと市町村レベルの観光消費を分析する 2 階層の周遊型観光消費モデルを開発した。また、訪日外国人の携帯位置情報を利用して市町村レベルの流動表を作成してモデル・パラメータを推定し、リニア中央新幹線の開業が訪日外国人の観光消費にどのような影響を与えるのかについて分析を行った。また、こうした分析結果を踏まえて、今後、三重県が取組むべきサービス・イノベーションについても考察を行った。</p> <p>3) 周遊型観光消費を考慮した独占的競争モデルの開発、日本地域学会年次大会・学術研究発表論文集、Vol. 58、奥田隆明・張銘</p> <p>リニア中央新幹線の間駅には、必ずしも観光集積が十分でない場所に建設されるものも多い。本研究では、交通結節点の観光集積を高める政策を評価するために、観光集積の大きさが観光消費に与える影響を分析する独占的競争モデルを提案した。このモデルでは、観光客が観光サービスの多様性を求めて周遊しながら観光消費を行うことが仮定される。また、観光企業は一定の固定費用を持つことが仮定され、両者のバランスにより観光企業の集中と分散が決定される。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パッヘ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	三重県内市町村レベルにおける外国人観光消費モデルの開発	書名	
雑誌名	土木計画学研究・講演集	論文名	
巻号	Vol.64	出版社	
発行年月	2021年11月	出版年月	
ページ	CD-ROM	ページ	
著者名	奥田隆明・張銘	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目	価値共創によるモビリティサービスのイノベーション～三重県内における外国人周遊観光マーケティング～	書名	
雑誌名	サービス学会国内大会・講演論文集（査読有）	論文名	
巻号	Vol.10	出版社	
発行年月	2022年3月	出版年月	
ページ	259-266	ページ	
著者名	奥田隆明・張銘	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目	周遊型観光消費を考慮した独占的競争モデルの開発	書名	
雑誌名	日本地域学会年次大会・学術研究発表論文集	論文名	
巻号	Vol.58	出版社	
発行年月	2021年10月	出版年月	
ページ	Web ページ	ページ	
著者名	奥田隆明・張銘	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 4 月 4 日

氏名	竹澤 直哉	所属	経営学部 経営学科
研究課題	カルマンフィルタによるシステムティックリスクの推定と情報量に関する研究		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>研究経過</p> <p>Time Varying Beta の特性を測定するために、Long Term Persistence Measure を使った分析結果を順調に得ることができた。その研究成果は 2021 年 10 月に発行された南山経営研究第 36 巻第 2 号(pp. 221-232)の論文としてまとめられた。</p> <p>研究結果</p> <p>この研究は市場のシステムティックリスクを測定することにある。一般的に、システムティックリスクはベータを用いて測定される。このベータは金融商品の市場に対する感応度を Static に測定するものとして定義されるが、本研究では Kalman Filter という手法を用いることで、金融商品の市場に対する感応度を動的に測定することを試みることを可能にしている。カルマンフィルタを適応する前の時系列データは高いノイズを含むが適応した後の推定量は不必要な情報がフィルタリングされるため、確度の高い推定値を得ることができている。言い換えると、必要な情報量が増加したと解釈することができる。</p> <p>一方、この研究では、ベータが持つ Dynamic な特性を Static に解釈することを可能にするため、Long Term Persistence を考慮したベータを提案し、実証的に計算している点で独自性を持つと言える。この長期的な性質を考慮したベータは、システムティックリスクの長期的ボラティリティーを集約した測度と考えることができる。</p> <p>この分析は systematic risk の吹き溜まりと称される投資信託に対して行われ、長期的な影響が大型株に対して小さくなることが示された(これは Static に推定されるベータの結果と整合的である)。また、この研究を通して、カルマンフィルタに対する解釈を長期的な systematic risk 水準に収束ベータを推定するための道具として位置づけることも可能であり、行動ファイナンスで考える長期的なセンチメントと関連する可能性を示唆する結果を得ることができた。以上の点から当初の研究計画は達成されたと言える。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Market Investor Sentiment and Time Varying Betas of Japanese Mutual Funds —A Kalman Filter Estimate of Time Varying Beta and its Long Term Persistence—	書名	
雑誌名	南山経営研究	論文名	
巻号	第36巻第2号	出版社	
発行年月	2021年10月	出版年月	
ページ	211-232	ページ	
著者名	Naoya Takezawa	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2021年度
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 4月 4日

氏名	上野正樹	所属	経営学部
研究課題	日本企業のインド市場開拓のケーススタディ		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>研究の目的は、インドでの在外研究（研究留学）の期間、日本企業のインド市場開拓に関するケーススタディをおこなうことである。研究環境を作るため、PC ディスプレイやプリンターの購入費を申請した。しかし、以下の理由によって研究課題を「インド進出日系製造企業の経営成果」に変更した。</p> <p>インド入国後、デルタ株、オミクロン株の感染爆発で、ケーススタディが難しくなった。外出、出社、訪問の制限があり、当初予定のフィールド調査を断念せざるをえなかった。研究の方針として、基盤研究（C）のテーマ（インド進出日系製造企業の経営成果）を深堀することにした。具体的には、日系大手製造企業 90 社、そのインドの子会社 176 社、2005 年度から 2020 年度の財務報告書を購入した。研究費はこの財務報告書を購入にあてた。また PC ディスプレイやプリンターの購入は留学研究費でまかなうことにした。研究経過を 2 点にまとめる。</p> <p>(1) テスト分析を終えた。具体的にはインドの日系子会社の ROA（総資産利益率）に、年、地域、産業、親会社、子会社という 5 つの要因がそれぞれどれくらいの影響を及ぼしているのかが明らかになった（分散分析、観測数 1843）。また、時期別、親会社の業種別にサンプルを分割した分析もおこなった。</p> <p>分析によると、経営成果にもっとも強い影響を与えているのは親会社効果（業態や移転する経営資源）であった。これは先行研究（米国と中国の日系子会社）の分析結果と同じである。一方、インドの日系子会社の経営成果 ROA は年効果（マクロ経済の影響）と地域効果（地域経済の発展状況）の影響も強く受けていることがわかった。今後は分析結果の理由を考察するとともに、ラグをとった分析も追加して結果の頑健性を検討したい。</p> <p>(2) 財務報告書をもとに、乗用車市場の完成車メーカーの経営状況を確認した。乗用車の製品特性データと販売台数データの解析を中心とし、購入した財務報告書によって売上や利益の推移などを検討した。これをもとに「マルチスズキの競争優位」をテーマとした論文を作成した。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書名	経済大国インドの機会と挑戦(第1巻)
雑誌名		論文名	マルチスズキの競争優位
巻号		出版社	白桃書房
発行年月		出版年月	2022年8月
ページ		ページ	66-84
著者名		著者名	上野正樹
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2021年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2021年 4月 6日

氏名	松井 宗也	所属	経営学部
研究課題	「距離の共分散」や「距離の相関係数」の確率場（ランダムフィールド）への応用		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>ごく最近、Szekely and Rizzo (2009)により「距離の共分散」や「距離の相関係数」という新しい統計量が提案された。この統計量は2つの確率ベクトルの独立性を検定することに有効である。基本的なアイデアは、2つの確率ベクトルの同時特性関数と、それぞれの特性関数の積の距離を測るというものである。構成が容易で明確なためか応用が広く、様々な方向に拡張されている。またいくつかの異なる分野との関連も指摘されており、統計学分野で注目を集めている。それには例えば機械学習などが挙げられる。2年前にこの統計量を応用して、多次元定常時系列の自己依存関係の検定を考えた。更に前年度は連続時間確率過程の独立性の検定を考えた。</p> <p>今回はこれを更に発展させて確率場（ランダムフィールド）の独立性の検定を行った。つまり、2つの確率場が独立かどうかの検定である。主に仮定する条件は、確率場の滑らかさとモーメント条件の2つである。これらの条件のもとで、標本（この場合はひとつの確率場）から得られる「距離の相関係数」の漸近理論を導出した。確率場（ランダムフィールド）は、場（フィールド）全体を観測することが難しいのでひとつフィールドに対してランダムな有限個の観測点を考えた。この有限観測による近似の理論的正当性も与えた。観測した2つの確率場が独立でない場合は「距離の相関」は有意に大きな値を取る。その値をもとに独立性の検定が行える。具体的には、ブートストラップ法という統計手法を用いて独立性の検定を行う。その方法が理論的に上手く働くためには、いくつかの条件が必要である。その条件についても理論的に検証した。理論研究の他に、数値実験や実証分析等で、構成した統計量の有効性も確かめた。</p> <p>結果を論文に纏めて国際ジャーナルに投稿した。審査結果は返ってきたが、要改訂とのことだったので改訂して再投稿した。現在は2回目の審査中である。2021年度中に論文の掲載が決定することは難しかったので、成果物としては別の論文を提出する。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Subexponentiality of densities of infinitely divisible distributions on the whole real line	書名	
雑誌名	無限分解可能過程に関連する諸問題(26)	論文名	
巻号	共同研究レポート 455	出版社	
発行年月	2022年	出版年月	
ページ	1-4	ページ	
著者名	松井 宗也	著者名	
備考	済・未 (2022年5月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未 (年 月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未 (年 月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)

2021年度
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 4月 7日

氏名	川北眞紀子	所属	経営学部
研究課題	企業の芸術支援による組織内外の関係性構築に関する研究		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究の目的は、企業の支援する多様な芸術が組織内外との関係性に及ぼす効果を体系的に捉えることである。そのために、企業がアートを支援している事例をいくつもインタビュー調査をしてきた。</p> <p>本年度は可児市文化創造センターala, ロフトワークというふたつの事例についてのインタビューを行った。これまで、企業が直接運営するタイプのオウンドメディアとしてのアートプレイスを中心に研究を行ってきたが、今年度は企業が運営するのではなく、複数の企業の支援を受けながら、アートと企業とを繋ぐ形のペイドメディアとしてのアートプレイスの研究に発展した。</p> <p>研究成果のアウトプットとしては、これまでに行ったベネッセが運営するアートサイト直島の事例研究を、Japan Forum of Business and Society Annalsに査読付き事例研究として掲載することができた。</p> <p>また、ニッケの芸術支援の事例について、文化経済学会の研究大会で発表を行った。パブリック・リレーションズの研究者と文化経済学の研究者からの示唆を得た（下記1）。</p> <p>1. 「パブリック・リレーションズの視座からの企業メセナーニッケ「工房からの風」の事例研究一」, 単独, 2021年6月28日, 文化経済学会<日本> 2021年度研究大会, オンライン</p> <p>コロナで取材が制限されるなか、新たな事例も追加できた。現在、書籍を執筆中でであり、この夏に刊行予定である。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Building Public Relations through an Art Place - A Case Study of Benesse Art Site Naoshima	書 名	
雑誌名	企業と社会フォーラム学会誌 Japan Forum of Business and Society Annals	論 文 名	
巻 号	No.10	出 版 社	
発行年月	2021 年 9 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	pp.31-40	ペ ー ジ	
著 者 名	Makiko Kawakita, Yassuhi Sonobe	著 者 名	
備 考	済	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年2月28日

氏名	西村邦行	所属	法律学科
研究課題	政治理論と国際関係論の交錯：戦後の米英政治学の展開から		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を800～1,000字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>申請時の研究計画書に記載していたとおり、政治理論と国際関係論との不可分一体的な発展を迫る予備的検討を進めていくために、関連する一次テキストおよび二次文献を渉猟した。そのうえで、まずは予定に沿ってジュディス・シュクラーのテキストを網羅的に手に取ったが、申請時に未確認だったここ数年の研究にも照らしつつ検討していったところ、当初想定していたようにシュクラーを焦点として議論を展開した場合、旧来的なシュクラー像を無批判に提示しなおしてしまう危惧が生じた。具体的には、国際関係論との関連で言うと比較的初期の『リーガリズム』が重要だが、この書に照準して国際関係論と政治理論の連関を検討した場合に、申請者が有していた理解に沿うと、同書を乗り越えるポテンシャルを有していたとされる後の著作を適確に位置づけられない可能性が懸念された。そこで、上記二分野の関連性という計画のより根本的な対象について理解を改めるうえでも、本研究計画の元になった直近拙稿において彼女と関連づけて論じていたケネス・ウォルツおよび彼とスタンリー・ホフマンとの関連性を改めて問い、そこから国際関係論との連関においてシュクラーがいかに位置づけられうるかの見通しを改訂していくこととした（言うならば、申請書に記載した目的を達するため、同じ対象について、申請書の計画より一段基礎的な次元から議論を進めることにした）。</p> <p>結果的に、本研究期間中は、シュクラー自身についての独立の論文を執筆するには至らなかった。ただし、その前提を整えなおす作業として、国際関係論の理論家とされてきたウォルツがいかなる意味で政治理論家としての営みを展開していたかについて、論文一本を脱稿することができた。具体的には、彼の初期の主著である『人間・国家・戦争』におけるルソー解釈、およびそれとスピノザ解釈およびカント解釈の対比が持つ意味について、先行研究には見られないまとまった考察を行った。特に結論部では、ウォルツのルソー解釈とホフマンのそれとの関連性についても論じることで、そのホフマンを手掛かりとして（やはりルソー解釈を軸に）シュクラーとの関連性を検討するための、少なくとも糸口までを提示することができた。なお、同論文は、当初は年度内に発行予定だったが、諸般の事情により次年度早々の刊行へと後ろ倒しになったため、現時点では未刊である。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	政治理論家ケネス・ウォルツ—— 『人間・国家・戦争』の古典解釈 ——	書名	
雑誌名	南山法学	論文名	
巻号	45巻3・4合併号	出版社	
発行年月	2022年5月刊行予定	出版年月	
ページ	校正中（約40頁/40,000字）	ページ	
著者名	西村邦行	著者名	
備考	未（2022年5月刊行予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2022年 3月 17日

氏名	田中 実	所属	法学部法律学科
研究課題	占有論と古代ローマの窃盗罪		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>年間を通じ、古代ローマにおける盗訴権の法文、とりわけ法学提要の盗に関する定義規定、学説彙纂で盗訴権を集中的・網羅的に扱う 47 巻 2 章の全法文、その法文を詳細に検討する中世標準註釈以来の近世近代にいたる解説書、近世のカロリーナ法典、カロリーナ法典に対する同時代の解説書、さらに近世における古事学的傾向を持つ法学文献、モムゼンの刑法体系書、近年の各国語で出版される二次文献を調査・収集し、検討した。パンデミック下他大学の研究機関を利用することが制約される中、コンスタントに研究会などで接触することのできた大学の教員の方の取り計らいにより、文献を利用することもできた。</p> <p>研究の途上で、一つには、上述の 47 巻 2 章の全法文を丁寧に、しかも独自の知見から解説するイングランドのモンローの詳細な脚註や後註の重要性を再認識した。また、盗の定義に用いられる <i>contrectatio</i> の用語に対する学者の異なった説明を整理する中、近代のモムゼンに代表される類型論ではなく、占有の観点からとりわけ盗訴権を整理する 16 世紀フランスのジャック・キュジャース、ボドゥアンの見解が今なお意味を持つことを知り、検討し、後述の論稿に反映させることができた。ローマ相続法研究会と目下不倫遺言訴訟を集中して検討している京都大学ローマ法研究会の合間に時間をとっていただき、盗訴権についての暫定的な報告を行い、両研究会会員の貴重な意見を求めることができた。以上のような研究経過を辿り、論説「ローマ法大全における盗訴権と占有についての覚書」『南山法学』45 巻 3/4 号（2022 年）を執筆し投稿した（最終稿提出済。添付は初校原稿）。</p> <p>盗と占有概念の結びつきに研究の焦点をあてていたが、占有についてしばしば強調されるのは、主体としてのいわゆる休止相続財産が占有者になれず盗が観念できないことであり、逆に、占有では説明できない事例としてしばしば援用されるのは、被害者としての盗人に、加害者たる盗人を相手方とする盗訴権が与えられないことであり、後者については、通時的に所有権概念の侵入や、共時的には別の刑事訴訟ではなく民事訴訟に特有の価値観の挿入が考えられ、新たな研究課題を見つけることにも繋がった。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	「ローマ法大全における盗訴権と占有についての覚書」	書名	
雑誌名	南山法学	論文名	
巻号	45巻3/4合併号	出版社	
発行年月	2022年	出版年月	
ページ	251頁～300頁（50頁）初校提出	ページ	
著者名	田中 実	著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 1月 11日

氏名	小原 将照	所属	法律学科
研究課題	多数当事者の債務関係と民事再生		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>倒産手続における多数当事者の債務関係は、いわゆる「全部義務者」の破産・倒産といわれるものである。これまでに破産手続に関する一連の研究をまとめて拙著『多数当事者の債務関係と破産』（法律文化社）として上梓した。そこでもあげたように、今後の研究課題は、再建型手続である民事再生手続において、どのような規律がより妥当するのか、という課題であった。</p> <p>本年度はこの研究に関連するものとして、「超過配当後の不当利得返還義務」南山法学 45 巻 2 号を上梓した。多数当事者の債務関係については、主たる債権者に開始時現存額主義が適用されることから、配当において実体法上の残債権額を上回る配当が実施される可能性が指摘されていた。最高裁は、平成 29 年 9 月 12 日決定により、超過部分も含めて主たる債権者に配当すべき旨を判示したが、その後の処理方法については明確な方法を示していなかった。大阪高判令和元年 8 月 29 日は、この最高裁の事案と当事者を同じくして、まさにこの超過配当が問題となったケースであり、求償権者による不当利得返還請求を認めたものである。</p> <p>本稿は、この下級審裁判例に関する判例研究であり、研究成果の一部である旨報告する。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	超過配当後の不当利得返還義務	書名	
雑誌名	南山法学	論文名	
巻号	45巻2号	出版社	
発行年月	2021年12月	出版年月	
ページ	213-223頁	ページ	
著者名	小原 将照	著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年1月25日

氏名	榊原秀訓	所属	法学部
研究課題	日本とヨーロッパにおける司法改革—司法の独立性とアカウントビリティ		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>まず、ヨーロッパ司法評議会ネットワークが、2013-2014 年以降継続的に『司法の独立性とアカウントビリティ』といった報告書を出し、また、裁判所行政（司法行政）のための国際協会が、裁判所行政のための国際的ジャーナル（International Journal of Court Administration）9 巻 3 号で「司法の独立性とアカウントビリティの測定」といった特集を組んでいることからそれらを検討した。ヨーロッパレベルでは、司法の独立性とアカウントビリティを測定するために指標が設定され、その説明がなされるとともに、設定された指標に関する疑問や批判として、司法に政治がかかわることの必要性、司法内部における介入への警戒の不足、アカウントビリティの内容の過剰・過剰や、実態と世論調査による認識の混同といった限界が指摘されており、それらの見解を対比しつつ、司法の独立性とアカウントビリティ、両者の相互関係を検討した。</p> <p>次に、わが国に関しては、第二次安倍政権以降において、司法、特に最高裁人事への政治の介入が顕著になってきていることから、近年の文献を検討した。わが国の司法制度の評価の仕方として、政治による司法への介入という側面と、司法内部において司法官僚による個々の裁判官支配という側面のいずれかに焦点が当てられ議論されていることが確認できた。両者の関係を統一的に把握しつつ、わが国においては関心が薄い司法のアカウントビリティや、それと司法の独立性との関係を示すことが必要であることを再認識した。</p> <p>以上の研究の成果として、まず、学会機関誌である法の科学への掲載を機会に、わが国における司法の状況を含む論文をまとめた。次に、新型コロナウイルス感染症との関係で司法のあり方も大きな関心事となっていることから、その点についても検討を進め、裁判所の検討は十分に行うことができなかったが、南山法学に成果を掲載した。最後に、先の法の科学の研究を発展させ、ヨーロッパの議論も活かしつつ、わが国の司法制度の分析を中心にした、南山法学掲載予定の原稿を執筆中である。現在および申請中の科研では、イギリス憲法・行政法研究者の集団で、司法制度改革も含めて合同で研究予定であり、イギリスの資料を冊子にまとめて情報を共有した。こういった合同研究会の場で報告を行い、成果をまとめることを予定している。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	シンポジウム改憲・国家改造と民主主義 趣旨説明	書 名	
雑誌名	法の科学	論 文 名	
巻 号	52号	出 版 社	
発行年月	2021年9月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	8頁～17頁	ペ ー ジ	
著 者 名	榊原秀訓	著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目	「新型コロナウイルス感染症下における地方議会の対応—東海三県における地方議会の対応調査のまとめ—」	書 名	
雑誌名	南山法学	論 文 名	
巻 号	45巻2号	出 版 社	
発行年月	2021年12月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	187頁～212頁	ペ ー ジ	
著 者 名	榊原秀訓	著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目	「改憲・国家改造と民主主義—第二次安倍政権以降を中心に—」	書 名	
雑誌名	南山法学	論 文 名	
巻 号	45巻3=4号	出 版 社	
発行年月	2022年刊行予定	出 版 年 月	
ペ ー ジ	未定	ペ ー ジ	
著 者 名	榊原秀訓	著 者 名	
備 考	済・未（2022年4月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）

2021 年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022 年 03 月 1 日

氏 名	レジナルド・アルヴァ	所 属	法学部
研 究 課 題	The Catholic Church's Social Mission: An Analysis in the Light of the Teachings of the Encyclical <i>Deus caritas est</i>		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>The Catholic Church is actively involved in various social activities. Social action is an integral part of the Church's mission. Since the publication of Pope Leo XIII's Encyclical <i>Rerum Novarum</i> in 1891, successive Popes too have promulgated documents to reemphasize the need to focus on social issues. In 2004, the Pontifical Council for Justice and Peace published <i>Compendium of the Social Doctrine of the Church</i> to summarize and update the Catholic Church's teachings on social issues. Pope Emeritus Benedict XVI in his Encyclical <i>Deus Caritas Est</i> (DC) noted Jesus' teaching on unifying the love of God and neighbor needs to be the basis for the Catholic Church's social mission. In this paper, I examined the Catholic Church's social mission in the light of the teachings of the Encyclical DC. The sources of this paper were the Encyclical DC, other papal documents on Church's social mission and the documents on the social teachings of the Church.</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	The Catholic Church's Social Mission	書名	
雑誌名	Academia	論文名	
巻号	23	出版社	
発行年月	2022	出版年月	
ページ	63-72	ページ	
著者名	Reginald Alva	著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2022年 4 月 8 日

氏名	梁曉虹	所属	総合政策学部
研究課題	「無窮会本系『大般若経音義』の研究」		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>① 資料調査。</p> <p>新型コロナの影響で、予定していた海外資料収集ができなかった。しかし、国内では、永平寺、大東急記念文庫に赴き、仏経音義、古写本仏経、中世漢字資料収集を行った。特に大東急記念文庫蔵①『大般若経音義』（室町初期写 一帖）、②『大般若経音義』（康暦二写、石井氏積翠軒文庫旧蔵）は、貴重な資料であり、本研究にとって参考価値大であった。</p> <p>② 書稿の執筆。</p> <p>今年度の最も重要な研究である書稿執筆完了。書名は、『無窮会本系「大般若経音義」研究—以漢字为中心』である。これはこの三年間集中的に研究してきた無窮会本系『大般若経音義』の異体字研究、及びその漢字使用法についての総合的研究である。書稿は既に完成し、現在 2022 年度南山大学学術叢書助成申請中。</p> <p>本書稿は、2019—2021 年度に交付された科学研究費の研究テーマである「日本中世における異体字の研究——無窮会系本『大般若経音義』三種を中心として」（課題号:19K00635）——をベースに更なる展開を試みた総合的研究である。科研費課題は、無窮会本、天理本、薬師寺本の三種を主要資料にした異体字の研究が中心であるが、本書稿はこれら三種の写本以外に、六地藏本、大須文庫本、高野山大学本、大東急記念文庫本、京都大学本等をも資料に加えた。その際、これまで蓄積されてきた漢字研究を取り入れつつ、テーマを漢字研究に絞り、その内容は、異体字、訛字、訛俗字、倭俗字、日本古代の学僧の“漢字観”等の研究に涉るため、内容が豊富になると思われる。特に、漢字が日本に“輸入”されてからどのように発展、変化してきたかに焦点をあて、無窮会本系『大般若経音義』が日中漢字史研究において重要な価値があることを掲示した。</p> <p>③ 国際学術会議に参加、発表。</p> <p>新型コロナの影響のため、予定していた海外の学会に参加できなかったが、都合四回程オンラインで国際学術会議に参加、研究発表をした。テーマは全て無窮会本系『大般若経音義』の漢字研究と関係がある。国内でも北海道大学主催の「シンポジウム：古辞書・漢字音研究と人文情報学」などの学術活動にも参加した。</p> <p>論文の執筆。2021 年度に公刊した論文は、4 編ある。（以下「研究成果公刊」の一覧を参考）。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	“An Exploratory Survey of the Graphic Variants Used in Japan: Part Two”	書名	
雑誌名	JOURNAL OF CHINESE WRITING SYSTEMS (JCWS)	論文名	
巻号	Vol. 5	出版社	
発行年月	2021年6月	出版年月	
ページ	115-124	ページ	
著者名	Xiaohong Liang	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目	「無窮会本『大般若経音義』第四十帙鳥名考」	書名	
雑誌名	『域外漢籍研究集刊』	論文名	
巻号	第二十一輯	出版社	
発行年月	2021年11月	出版年月	
ページ	17-38	ページ	
著者名	梁曉虹	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目	「天理本篇立音義考論」	書名	
雑誌名	『文献語言学』	論文名	
巻号	第十三輯	出版社	
発行年月	2021年12月	出版年月	
ページ	149 - 162	ページ	
著者名	梁曉虹	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

④	
論文題目	「“無窮会本系”『大般若経音義』 “詹”聲俗字考」
雑誌名	『漢語史研究集刊』
巻号	第三十一輯
発行年月	2021年12月
ページ	267-281
著者名	梁曉虹
備考	済・未（年月頃予定）

2021年度
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年4月4日

氏名	金網 基志	所属	総合政策学部
研究課題	研究開発ステージにおける企業間の知識共有の現状について		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究は、2020 年度のパッへ研究奨励金 I-A-2 で採択された「国内における企業間関係と海外企業との間の企業間関係における知識共有の現状分析」の継続研究である。研究開発ステージで、企業間での協力関係がどの程度進展しているのかを調査する方法の一つが、科学技術論文誌に掲載された著者のデータを用いることである。この科学技術論文誌を検索するデータベースに INSPEC がある。2021 年度は、2020 年度に引き続きこのデータベースを利用し、本研究で注目する企業の各年毎の科学技術論文誌に関するデータを収集した。本研究では、科学技術論文を執筆した企業ごとの共著者のパターンを、①国内の研究所のみの共同研究、②国内の研究所のみの共同研究+国内研究所と国内機関との共同研究、③国内の研究所のみの共同研究+国内研究所と海外機関との共同研究、④海外機関のみの共同研究、⑤海外機関のみの共同研究+海外機関と海外機関（海外機関の立地する国の機関）との共同研究、⑥海外機関のみの共同研究+海外機関と海外機関（海外機関の立地する国以外の機関）との共同研究に分類する。そして、集中性と分散性という分析概念を用いて、国内における研究開発の組織間の広がり、海外における研究開発の組織間の広がりの国際企業間比較（トヨタ、GM、現代自動車）を行う。具体的には以下の通りである。集中性 1 = 国内の研究所のみの共同研究/合計共同研究数。これは、閉鎖的、自己完結型 R&D（国内、立地内・組織内共同研究）を示す。集中性 2 = 国内の研究所のみの共同研究+国内研究所と国内機関との共同研究/合計共同研究数。これは、本国における国内ネットワークの広がりの程度（国内、立地内・組織間共同研究）を示す。集中性 3 = 国内の研究所のみの共同研究+国内研究所と海外機関との共同研究（海外単独、海外機関と海外機関との共同研究を除く）/合計共同研究数。これは、本国中心の国際ネットワークの広がりの程度（国際、立地外・組織間共同研究）を示す。分散性 1 = 海外機関のみの共同研究/合計共同研究数。これは、海外 R&D 拠点の単独研究開発（国際、立地内・組織内共同研究）を示す。分散性 2 = 海外機関のみの共同研究+海外機関と海外機関（海外機関の立地する国の機関）との共同研究/合計共同研究数。これは、海外 R&D 拠点独自の立地内ネットワークの広がり（国際、立地内・組織間共同研究）を示す。分散性 3 = 海外機関のみの共同研究+海外機関と海外機関（海外機関の立地する国以外の機関）との共同研究/合計共同研究数。これは、海外 R&D 拠点独自の立地外ネットワークの広がり（国際、立地外・組織間共同研究）を示す。今後、上記の分析概念に基づくデータの分析を行い、学術論文として完成させる予定である</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	研究開発ステージにおける企業間の知識共有の現状についての国際比較 (仮題)	書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未 (2022年10月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未 (年 月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未 (年 月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)

2021年度
パッセ研究奨励金I-A-2(特定研究助成・一般)研究成果報告書

2022年04月04日

氏名	OCONNELL SEAN	所属	総合政策学部
研究課題	International service-learning and global citizenship curriculum design: A study of effective experiential education approaches in Japan.		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を800～1,000字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>2021年度には、パッセ研究奨励金を用いて、日本における国際サービス・ラーニングのカリキュラム開発・実施について研究することができた。コロナ禍による緊急事態宣言（まん防）の制約があって、当初計画していた研究出張などを数回再調整することがあったが、最終的に次のような研究活動ができた。</p> <p>（1）研究出張</p> <p>1) 仙台大学訪問 2回 2) 福島大学訪問 2回</p> <p>（2）オンライン・ワークショップ研修 (UNIVERSITY OF CANTERBURY & ENGAGEMENT AUSTRALIA 共催)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 2021年6月 計3回受講 <p>研究出張については、仙台大学と福島大学で実施しているプログラムを観察し、インタビュー調査によるデータの収集もできた。まず、仙台大学にて Community Engagement 授業参観、学生による学外ボランティア活動の観察、学習効果についての学生の発表と講師へのインタビューを通じて、学びの効果について様々なデータを集めることができた。福島大学への出張では、学生による活動発表会や反省会を通じて、Fukushima Ambassador Program (FAP)（サービス・ラーニング科目）について研究資料収集及び調査を行った。</p> <p>その他の活動として、2021年度にオンラインワークショップ研修にて、University of Canterbury と Engagement Australia の講義に計3回参加し、オーストラリアとニュージーランドでサービス・ラーニング科目に関する授業デザイン、実施方法、パンデミックによる実施形態や学びの変化などについて深く勉強することができた。これらの出張とオンライン研修で収集できたデータは当パッセ研究とそれに関連する現在実施中の科学研究に大いに役立っている。従って、関連執筆（2021年度1編、2022年度1編）を別紙の通り、報告する。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書名	コロナの影響と政策 ―社会・経済・環境の観点から― (石川良文編著)
雑誌名		論文名	第10章「コロナにおけるリスクコミュニケーションの成功例」
巻号		出版社	創成社
発行年月		出版年月	2022年3月
ページ		ページ	計12ページ (pp. 176-187)
著者名		著者名	OCONNELL Sean
備考	済・未 (年 月頃予定)	備考	済・未
②		②	
論文題目		書名	Academia. Humanities and Natural Sciences 24号
雑誌名		論文名	Service-Learning in Japan: A Comparative Analysis of Domestic and International Programs at Tertiary Institutions
巻号		出版社	南山大学
発行年月		出版年月	2022年6月
ページ		ページ	計8ページ
著者名		著者名	OCONNELL Sean
備考	済・未 (年 月頃予定)	備考	済・未 (2022年6月頃予定)
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未 (年 月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 4月6日

氏名	山田 望	所属	総合政策学部総合政策学科
研究課題	「ペラギウス派神学思想の相互影響・発達史的観点による伝承史的・教会政治史的総合研究(ペラギウス派とクリュソストモスの説教や女性への書簡に見る陣痛理解の相違と共通点を中心に)」		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>ペラギウス派神学思想の中でも、とりわけペラギウスのパウロ書簡に伺える反霊魂伝遺主義者による原罪を否定する見解や、ペラギウスの弟子であったエクラヌムのユリアヌスによる陣痛解釈、さらには東方アンチオケイア神学の伝承を受け継ぐと言われるヨアンネス・クリュソストモスの陣痛理解、そしてペラギウス派を異端として排斥したアウグスティヌスによる陣痛解釈を比較することによって、いわゆる「ペラギウス論争」における女性観、陣痛観を巡る議論がどのように展開していったのか、その詳細を検証した。</p> <p>その結果、ユリアヌスによる、陣痛はイブの侵した原罪に対する罰ではないとする陣痛解釈が最も自然主義的な解釈であること、他方、ペラギウスや反霊魂伝遺主義者には、ユリアヌスによる陣痛は現在ではないとする解釈のみならず、イブの侵した墮罪の結果のみが陣痛として伝播したとの神話的原因譚としての解釈が伺えることが明らかとなった。また、クリュソストモスによる、オリンピアスという女性に個人的に宛てた書簡にも、ユリアヌスとほぼ同じ解釈が伺えるが、一方、多くの聴衆を前にした、より公共性の高い説教においては、神話的原因譚としての解釈が見られることが検証された。最後に、アウグスティヌスの場合には、いわばユリアヌスの解釈とは正反対に、イブの侵した原罪が陣痛として、その後のすべての女性たちの出産に、いわば避けがたい罰として伝遺することとなったとのきわめて否定的な解釈が提示されていることが明らかとなった。以上の検証により、古代西方、東方における女性観に関する相互影響史的、発達史的観点による共通点や相違点が明らかとなった。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Pelagians', Chrysostom's and Augustine's Different Views on Pain of Childbirth as Revealed through their Counsel to Women	書名	『古代キリスト教と女性 - その霊的伝承と多様性』
雑誌名	<i>Studia Patristica</i>	論文名	女性の尊厳と自由意志- ペラギウス派、クリュソストモス、アウグスティヌスによる女性観・陣痛観の相違
巻号	Vol. CXXVIII (128 巻)	出版社	教友社
発行年月	2021, 12 月	出版年月	2022 年 3 月
ページ	pp. 300-312	ページ	pp. 117-178
著者名	Nozomu Yamada	著者名	山田 望
備考	済	備考	校正ゲラ提出済・印刷完成本は未 (2022 年 4 月半頃予定)
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未 (年 月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未 (年 月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 4月 13日

氏名	前田 洋枝	所属	総合政策学部総合政策学科
研究課題	無作為抽出と熟議の反復が参加者と地域住民に及ぼす効果 —伊予市市民討議会を事例に—		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究は、愛媛県伊予市が 2020 年度に 5 年目の市民討議会の実施を終えたことによる市民の意識の変化を 2015 年の初年度に実施した調査と比較するため、改めて本年度に無作為抽出した市民および 5 年間の市民討議会参加者への調査を行なったものである。伊予市役所が無作為抽出した 16 歳以上の市民 2000 名への調査と 2015 年度から 2020 年度までの市民討議会参加者 163 名に対して 2021 年 8 月下旬に質問紙と返信用封筒を送付して調査を実施した。なお、オンラインでも回答できるように、質問紙の表紙に回答用 URL を掲載した。</p> <p>2021 年 9 月末までに無作為抽出の市民からは 553 名の回答を得たが、ほとんどの質問に無回答であったために無効票と判断した 1 名と、伊予市での居住年数が 6 年未満の 48 名を除外した 504 名のデータで分析を行なった(男性 191 名、女性 313 名、性別無記入 0 名、平均年齢 35.98 歳)。市民討議会参加経験者は無効票はなく、110 名(男性 71 名、女性 39 名、性別無記入 0 名、平均年齢 44.59 歳)の回答が得られた。</p> <p>基礎的な分析の結果、①市民討議会での意見を反映した第 2 次総合計画(2016 年)や第 2 次総合計画後期基本計画(2021 年)にまちづくりで重点をおく課題として挙げられたプロジェクトはいずれも参加経験者の方が関心は高かった。②市民討議会で出された意見の重要さの評価は多くの項目では参加経験者と無作為抽出市民に差はなかったが、「防災リーダー(特に若年、女性)の育成」と「中学生、高校生への地域貢献活動を市が推奨」といった若者の地域での活躍促進に関わるような項目では、参加経験者の方が重要と考えていた。③市民討議会の手続きの公正さの評価は、多くの項目で参加経験者の方が高く評価をしていた。討議結果の社会的受容も参加者の方が評価は高かった一方で、無作為抽出の市民であっても否定的な回答は少なく、1 割前後であった。④2021 年度の市民討議会への参加を仮定した場合のエンパワーメント期待は、多くの項目で参加者の方が評価は高かった一方で、無作為抽出の市民であっても有能感の期待や市民討議会によって会議テーマについての市民の関心を高め、市の取組も進むとの期待は半数程度かそれ以上の人が期待していた。などの結果が得られた。</p> <p>今後、因子分析やその結果を踏まえて構成した尺度得点による参加経験者と無作為抽出市民の比較、および 2015 年度の無作為抽出市民の調査結果との比較について分析したうえで、学会発表や投稿論文作成を進めていく予定である。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	無作為抽出市民による熟議の継続 が市民および参加者に及ぼした影 響	書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・○未（2023年3月頃投稿予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 1 月 31 日

氏名	太田和彦	所属	総合政策学部
研究課題	フードシステムの持続可能性の向上における都市の戦略的な役割の位置づけの分析		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究の成果物として、論文「持続可能な都市のための食の再地域化」共生社会システム研究 15 号 139-153 頁（査読付き）を刊行した。同論文に収められた、本研究実績の概要は以下のとおりである：</p> <p>現代のフードシステムが抱える課題——不平等の拡大、気候変動の影響への対応の遅れ、天然資源の枯渇、グローバリゼーションと移住によってもたらされる食文化と習慣の増加など——は、都市で集中的に現れているだけでなく、グローバル化したフードシステムのあり方に大きな影響を与える重要な場所として、都市はそのあり方をますます問われるようになってきている。都市部のみならず農村部の人々の生活環境の改善には、都市・農村間の、経済的・社会的・環境的つながりを強化した、バランスの取れた政策が必要とされている。これらの要望に応答するために、世界的な都市化と食料安全保障の方針の見直し、都市の食料政策をより持続可能なものにするための取り組みが国内外の都市において試みられ、それらの成果の共有の一助として「都市食料政策ミラノ協定」(Milan Urban Food Policy Pact、以下「ミラノ協定」)が採択されている。本研究では、このミラノ協定の内容と、その背景にあるローカル・フードシステムへの着目を中心に概括し、どのようなローカル・フードシステムの潜在的な公益とその波及効果が各地域・各都市に求められているかを検討した。文献研究や関連諸分野の研究者との勉強会・聞き取り調査を行った結果、都市が掲げる代表的なコンセプトが「食の再地域化」——都市と農村の乖離の緩和——であり、このコンセプトは食を中心にした都市間ネットワーク「都市食料政策ミラノ協定」においても重視されていることが明らかとなった。食の再地域化の方向性は、①都市と後背地の再接続、②都市農業の復活、③都市周辺での集約農業、④再農村化として類型化されるが、ミラノ協定の実践事例として紹介されるのは①と②が多く、この点に世界の各都市の関心が集中していることが推察される。しかし、①には生産地や生産物の偏り、②には地価や面積などの制約といった課題があり、また都市から離れた農村地域の持続可能性の向上への取り組みに関しては、別途検討の余地があることを確認した。この遠隔地の持続可能性の向上も含めて、これらのアプローチを都市の規模や地理的・経済的・政治的条件を考慮して組み合わせ、都市の将来的な食料需要と利用可能なインフラについての定量分析を行い、青写真を描くことが都市からの〈農の再生〉の過程には求められるだろう。その検討材料として、ミラノ協定の枠組みと、集積されている実践事例を参照することは有効であると考えられる。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	持続可能な都市のための食の再地域化	書名	
雑誌名	共生社会システム研究	論文名	
巻号	15号	出版社	
発行年月	2021年9月	出版年月	
ページ	139-153	ページ	
著者名	太田和彦	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2021年度
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2022年 3 月 4日

氏 名	BOSAKAIBO B. GEORGES	所 属	総合政策学部
研究課題	Land Administration Problems in the Democratic Republic of Congo: Case Study of Bongandanga Territory		
<p>As indicated above, the following theme was retained for my research: 'Land Administration Problems in the Democratic Republic of Congo: Case Study of Bongandanga Territory'.</p> <p>This study identified several problems which have been categorized into seven groups mainly policy, economic, social, legal, political, and institutional issues based on their relevance. The policy related problems are insecurity of citizen privacy, intimidating policy environment that prevent a proper implementation of policies related to land administration. In the economic related obstacles, there is lack of financial model and monetary funds. The social connected impediments concern the illiteracy of rural citizen, the nonexistence of IT, poor communication. The technical problems mainly lack of ICT infrastructure, lack of data standards, lack of e-participation, non-function of cadastral survey, lack of access to land data, ambiguous demarcation of boundaries hinder the land administration. The legal problems like lack of updated legal framework backing, existence of laws and regulations which are not practiced controlling land transaction. The political related issues are about factors like political instability, mistrust on political structure, corruption do not favor a good land administration. The last identified factors are related to the institutions. The insufficient citizens participation, no promotion of local talents, lack of transparency, rigid organization structure, poor public sector management, low skills levels of staff are detrimental to land administration.</p> <p>After the analysis of these various factors through the lens of good governance in land administration principles, this study reveals that several activities need to be foster not only by the local but also by the central government of DRC in order to break the barriers to land administration in the territory as well as the country and therefore to support and improve sustainable development, fit for purpose utilization of land resources, good governance, poverty alleviation, economic development, responsible governance of tenure and homeland security.</p> <p>Some policy implications have been suggested in order to improve the land administration in Bongandanga territory in Mongala province in DRC.</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Land Administration Problems in the Democratic Republic of Congo: Case Study of Bongandanga Territory	書名	
雑誌名	南山大学紀要『アカデミア』社会科学編	論文名	
巻号	第22号	出版社	
発行年月	2022年1月	出版年月	
ページ	22 (103~124より)	ページ	
著者名	BOSAKAIBO BOMINO GEORGES	著者名	
備考	済・未 (2022年3月頃予定)	備考	済・未 (年月頃予定)
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未 (年月頃予定)	備考	済・未 (年月頃予定)
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未 (年月頃予定)	備考	済・未 (年月頃予定)

I acknowledge that this research was supported by a grant from Nanzan University Pache Research Subsidy I-A-2 for the 2021 academic year. Pache Research Subsidy I-A-2 as a research fund from Nanzan University provided support for this research project. These published results have been supported by Pache. Indeed, it was appropriate and necessary to conduct this study to understand the land administration problems in Bongandanga territory in the Democratic Republic of Congo. In fact, the fund was necessary to help to buy books that have been used to understand various theories for the analysis of the situation. The initial plan for this grant did not work due to the spread and preventive measures for the covid pandemic. For this reason, I used the fund to buy books. As the Pache scholarship is established to assist scholars, the research can be smoothly conducted for a good outcome. Therefore, the fund was appropriate to buy books for the collection of the secondary data. These books will continue to help for the next future similar research.

BOSAKAIBO BOMINO GEORGES

A handwritten signature in cursive script, appearing to read "Bosakaibo Bomino Georges", written over a horizontal line.

2021年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 3月18日

氏名	山田哲也	所属	総合政策学部
研究課題	日本の植民地法制と「領域主権」論		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究では、日本がいわゆる「外地」を獲得した際、国際法上の領域という概念をどのように捉えていたか、また、それが法制面にどのように影響をしたかを検討した。</p> <p>まず、大日本帝国憲法制定時、日本の領域の限界について規定がなかったのは、従来、日本の国土に変更が加えられたことがなく、かつ、憲法制定時点においては、具体的な変更も予定されていなかったことが理由であることを史料から明らかにした。</p> <p>その結果、日清戦争後の台湾獲得に際して、台湾への憲法の適用の有無（いわゆる「六三法」問題）が、国会においても学界においても論争を呼ぶ、このことは韓国併合においても同様である。なお、南樺太については現地住民が著しく少数であったことから、当初より内地延長主義が採用され、また、委任統治領である南洋諸島については、国際的な基準に沿った統治が行われていた。</p> <p>日本の植民地統治はヨーロッパ諸国のそれとは異なり、台湾・朝鮮半島を中心に日本に近接した地域を対象とするものであった。開国以来、日本は、東アジアにおいてみずからの近代化（国際法の受容）と帝国化（国際法に基づく植民地獲得）を同時に進めることとなった。台湾はもとより、朝鮮半島も含め、中国（清）の支配地域を植民地化したことは、今日にまで至るさまざまな、いわゆる「歴史認識問題」の発端となったことはいうまでもない。</p> <p>植民地の獲得とそこへの法の及ぼし方の問題は、理論的な問題であると同時に政治的でもあり、さらに「一視同仁」や「内鮮一体」といったスローガンの導入もあって、日本の植民地統治は、最後まで格差原理に基づく属人的な支配・統治として実施せざるを得ないこととなった。</p> <p>日本が近代国際法を受容し、自らが結んだ不平等条約の改正に取り組む一方、植民地の獲得とその支配においては逆に近代国際法を利用しないし過剰受容した側面もある。この点の実証的な解明が次の課題である。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書名	国際法からみた領土と日本
雑誌名		論文名	日本の「植民地」獲得と法制
巻号		出版社	東京大学出版会
発行年月		出版年月	2022年3月29日（予）
ページ		ページ	61-85頁（予）
著者名		著者名	山田哲也
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・衆（22年3月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2021

**Pache Research Subsidy I-A-2(Specified Research Support:
General) Research Result Report**

Date: 03/24/2022

Name	David Potter	Affiliation	Policy Studies
Research theme	Research on Japanese and Korean Democracy Assistance in the Asian Context		
<p>Summary of research achievements (Please write down the progress and achievements of your research briefly within 320 ~400 words.)</p> <p>In tandem with a JSPS grant for this project, research progressed smoothly in 2021. Below is a listing of the research output related to this project during the academic year.</p> <p>Achievements in 2021:</p> <p>David M. Potter, "Japan's Democracy Assistance to Myanmar: Few Seeds in Infertile Soil." In Chosein Yamahata (ed.), <i>Social Transformation in India, Myanmar, and Thailand Volume II</i> (pp. 291-305). Palgrave Macmillan (2022).</p> <p>David M. Potter, "Patterns of Japanese Development Assistance for Social Transformation in Reform-Era Myanmar." In Chosein Yamahata and Bobby Anderson (eds.) <i>Demystifying Myanmar's Transition and Political Crisis</i>. (271-292). New York and London: Palgrave Macmillan (2022).</p> <p>David M. Potter and Hyo-sook Kim, "Japanese and Korean Responses to the 2021 Coup." Spring Flowers International Conference on Myanmar, Burmese American Community Institute, Indianapolis, Indiana, February 5-12, 2022 (online).</p> <p>David M. Potter and Hyo-sook Kim, "The Promotion of Democracy and Japan's and South Korea's Official Development Assistance; Possibilities and Limitations in the Asian Mode of Foreign Aid." Paper presented at the 12th meeting of the International Conference of Asian Scholars, Kyoto, Japan, August 24-28, 2021 (online).</p> <p>David M. Potter, "Japan's Electoral Assistance in the Context of Asian and African Democracy." Presentation at the Africa: Crossroad (Scramble) of (Re)Emerging Forces Webinar 6, hosted by the Institute of International Relations and Area Studies, Ritsumeikan University, July 8, 2021 (online).</p> <p>In addition, the paper presented at the International Conference of Asian Scholars (August 2021) has been accepted for publication in the conference proceedings, scheduled for publication in May, 2022.</p>			

Please write down the published researches with clear indication of subsidy support, "2021 Nanzan University Pache Research Subsidy F-A-2". Please indicate whether the publication has been turned into the Education Planning & Research Promotion Office or not on the "Remarks" column.

Category of "Magazines"		Category of "Books"	
①		①	
Title of the article		Title of the book	<i>Demystifying Myanmar's Transition and Political Crisis.</i>
Title of magazine		Title of the article	"Patterns of Japanese Development Assistance for Social Transformation in Reform-Era Myanmar."
Volume #		Publishing company	Palgrave Macmillan
Published date		Published date	2022/02
Page		Page	271-292
Author		Author	David M. Potter
Remarks	Done • Not yet (Turn in by:)	Remarks	Done
②		②	
Title of the article		Title of the book	<i>Social Transformation in India, Myanmar, and Thailand Volume II</i>
Title of magazine		Title of the article	"Japan's Democracy Assistance to Myanmar: Few Seeds in Infertile Soil."
Volume #		Publishing company	Springer
Published date		Published date	2022/03
Page		Page	291-305
Author		Author	David M. Potter
Remarks	Done • Not yet (Turn in by:)	Remarks	Done
③		③	
Title of the article		Title of the book	
Title of magazine		Title of the article	
Volume #		Publishing company	
Published date		Published date	
Page		Page	
Author		Author	

Published Research Results (Proposal included)

David M. Potter, "Japan's Democracy Assistance to Myanmar: Few Seeds in Infertile Soil." In Chosein Yamahata (ed.), *Social Transformation in India, Myanmar, and Thailand Volume II* (pp. 291-305). Palgrave Macmillan (2022).

David M. Potter, "Patterns of Japanese Development Assistance for Social Transformation in Reform-Era Myanmar." In Chosein Yamahata and Bobby Anderson (eds.) *Demystifying Myanmar's Transition and Political Crisis*. (271-292). New York and London: Palgrave Macmillan (2022).

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 3月 24日

氏名	蜂巢吉成	所属	理工学部 ソフトウェア工学科
研究課題	プログラミング学習における行き詰まり学習者への自動支援環境		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究の目的は、プログラミングで行き詰まっている学習者に対して、次の 2 つの方法により自力で「きれいな」プログラムを書けるようにすることである。</p> <ol style="list-style-type: none"> よくある誤りの指摘と修正方法、次に書くべきコードなどを指示する プログラムを「きれいに」書くための指摘等を行う <p>1 について、複数のプログラミング言語を学んだことで、文法の知識が混在して誤ったコードを記述する場合がある。本研究では誤って使われている記述言語を判定し、目的言語の正しいコード片に修正する方法を提案し、雑誌①で論文発表した。複数のプログラミング言語として C, JavaScript, PHP, Python, Ruby の分岐と反復の文法を調査し、制御文と式の関連を明らかにして、分岐と反復の共通モデルを定義した。次に、誤りのコード片について、制御文と式との関係を表す字句の間違い、複合文の開始を表す字句の間違いなどの典型的な誤りを整理した。さらに、これらのコード片について、記述言語が不明でも式を単位として部分的に解析を行う式レベルの構文解析方法を提案し、共通モデルに必要な式の情報を抽出して共通モデルに変換する方法を提案した。共通モデルから目的言語へのコード変換はテンプレートを用いて定義した。修正ツールを試作し、典型的な誤りを組み合わせたテストケースで動作確認し、WebAPI として公開した。</p> <p>また、演習課題で行き詰まった学習者に対して、チャットボットを用いてフィードバックする方法について卒業研究のテーマとして研究を行った。模範解答にコメントを記述し、そこから効率よく学習者に質問をしていく方法を提案した。今後さらに研究を進展させ、実際の演習に用いて評価し、論文投稿する予定である。</p> <p>2 について、卒業研究のテーマとして、判定木を用いたブルーリーダについて研究を行った。別解を含む模範解答から重要箇所を抽出して判定木と呼ぶ木構造で表現し、学習者のプログラムを判定木を利用して「きれいな」プログラムであるかどうか判定する方法について研究した。重要箇所を抽出するためのルール記述の負担が大きい、学習者への適切なフィードバックメッセージについては未検討である、実際の演習における評価が行われていないという課題があるが、今後これらを解決して、論文投稿する予定である。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	複数のプログラミング言語の文法知識に起因する制御文の誤りの自動修正方法の提案	書名	
雑誌名	ソフトウェア工学の基礎 28 (FOSE 2021)	論文名	
巻号		出版社	
発行年月	2021年11月	出版年月	
ページ	51-60	ページ	
著者名	蜂巢吉成, 東直希, 三上比呂, 長野滉大, 吉田敦, 桑原寛明	著者名	
備考	済	備考	済・未 (年 月頃予定)
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未 (年 月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未 (年 月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 4月 4日

氏名	名倉 正剛	所属	理工学部 ソフトウェア工学科
研究課題	アプリケーションサービスの保守開発支援に関する研究		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究ではアプリケーションサービスの保守開発を支援する方法として、主に次の 2 項目に基づいて研究を遂行することを計画していた。①ソフトウェアコードに対するリファクタリング支援技術の確立 ②障害発生時の対応を支援する技術の確立。</p> <p>① ソフトウェアコードに対するリファクタリング支援技術の確立について</p> <p>前年度までの研究成果として、ソースコードを対象に、コーディングスタイルに関する特徴量を利用して、不具合の発生を予測する手法を確立した。今年度はコーディングスタイルに対する遵守状況をはじめとした、リファクタリング支援に利用できる特徴を、開発データを分析することにより調査した。OSS リポジトリを対象に、コミット前後で変化したコード片のパターンを分類した。具体的にはコミット前後でのコード片のトークンの差異を抽出し、数値ベクトル化してクラスタリングした。その結果として、類似の変更をクラスタリングできることが確認できた。この内容は、国内会議で口頭発表した。(※公刊外の成果: 「コミット前後で変化したコード片のクラスタリングに基づく変更内容の分類に関する一考察」末次, 名倉, 高田, 角, 情報処理学会 ソフトウェア工学研究会ソフトウェアエンジニアリングシンポジウム 2021 ポスターセッション, 2021, 備考: 企業・ポスター賞受賞)。</p> <p>なお当初はコーディングスタイルの遵守の状況の分析を実施する予定であったが、より一般的なリファクタリング作業の分析の内容を優先して実施した。当初実施する予定だったコーディングスタイルの遵守状況の分析についても並行して作業を実施しており、次年度成果として報告できるように分析を遂行中である。</p> <p>② 障害発生時の対応を支援する技術の確立について</p> <p>前年度では、ログ情報からコンポーネント間の影響性を考慮して障害原因を特定する手法のプロトタイプを開発した。今年度は、ログ情報の発生状況から、ソフトウェアプログラムに対する障害原因特定手法 (SBFL: Spectrum-Based Fault Localization) を利用することにより、原因を示すログを特定する手法を確立した。具体的には、ログに記録されたある呼び出しに関連する一連の処理系列を、SBFL でのテストケースとみなし、実行に失敗している呼び出しに含まれるログを、障害原因を示す可能性の強いログとして、疑惑値を算出する方法を提案した。この成果は、研究協力者と共著で研究成果として、査読付き国際会議で発表した (Y. Sha, M. Nagura and S. Takada: Fault Localization in Server-Side Applications Using Spectrum-Based Fault Localization, Proc of 2022 IEEE International Conference on Software Analysis, Evolution and Reengineering (SANER))。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Fault Localization in Server-Side Applications Using Spectrum-Based Fault Localization	書 名	
雑誌名	Proc. of 2022 IEEE Int'l Conf. on Software Analysis, Evolution and Reengineering (SANER)	論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月	2021年4月	出版年月	
ペ ー ジ	pp. 1128-1135	ペ ー ジ	
著 者 名	Y. Sha, M. Nagura and S. Takada	著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出版年月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出版年月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2022年 3月 11日

氏名	沢田篤史	所属	理工学部ソフトウェア工学科
研究課題	品質特性を考慮した IoT システムアーキテクチャ設計方法に関する研究		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究の目的は、2020 年度から 2022 年度の研究期間で申請者を研究代表者として採択されている科研費基盤(C)20K11759 の課題と連携しながら、IoT システムのための品質主導型ソフトウェアアーキテクチャの設計方法を検討することである。</p> <p>この目的を達成するために、2021 年度には前年度までに行ってきた品質特性とアーキテクチャ設計パターンとの対応関係の分析結果に基づき、具体的なアプリケーションを題材にしながら、アーキテクチャ設計方法について検討してきた。</p> <p>本研究で 2021 年度に取り上げた品質特性は、従来取り上げてきた相互運用性、互換性、柔軟性に加え、ソフトウェアの保守性に関わる安定性や利用性、セキュリティ、さらに並行システムに関する信頼性などである。取り上げたアプリケーションは、ゲーム、モバイル端末による位置測定などがある。</p> <p>今年度における本研究の成果は、査読付き学術論文 3 編、学会発表 6 編として公刊済みである。（別紙「研究成果一覧」を参照）</p> <p>学術論文 1 は、品質特性に対する処理をモジュールとして扱い、組込みシステムを設計する方法論を提案したもので、本研究の目標とする品質主導型ソフトウェアアーキテクチャの設計と、設計されたアーキテクチャがどのように詳細化されて IoT アプリケーションとして実現されるのかを示すものである。</p> <p>学術論文 2 と研究発表 1 では、ロールプレイングゲームを題材に、その利用性を向上させるためのソフトウェア基盤としてのアーキテクチャのあり方を議論した。</p> <p>学術論文 3 では、画像の改ざん検知アプリケーションを取り上げ、セキュリティ向上のためのメタレベルコンポーネント構成からなるアーキテクチャを提案した。</p> <p>研究発表 2 では、IoT を活用した屋内測位アプリケーションを取り上げ、柔軟性を向上させるためのアーキテクチャパターンの有用性について議論した。</p> <p>研究発表 3, 4, 5 では、IoT を含む一般的なソフトウェアの保守性を高めるためのアーキテクチャ設計やソフトウェア分析の手法について議論した。</p> <p>研究発表 6 では、並行システムのデバッグを題材に、IoT アプリケーションの信頼性を阻害する要因は何で、阻害要因はソフトウェア構造とどのように関係するのかを考察した。これらの研究と成果発表を通じ、今年度に設定した研究目標はおおむね達成できたものと考えられる。次年度以降も科研費補助金（基盤 C）の研究と連携し、幅広しオントロジ構築に向けた活動を行う予定である。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

※ このフォーマットには収められないので別紙に研究成果をまとめる。

(別紙)

2021 年度 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果一覧

理工学部ソフトウェア工学科

沢田篤史

研究課題：品質特性を考慮した IoT システムアーキテクチャ設計方法に関する研究

学術論文（査読付き）

1. 野呂 昌満, 沢田 篤史, 張 漢明, 繁田 雅信, アスペクト指向アーキテクチャに基づく組込みソフトウェアの設計法の提案, 査読付き論文, 2021 年 8 月, ソフトウェアエンジニアリングシンポジウム 2021 論文集, 情報処理学会シンポジウムシリーズ Vol. 2021, 情報処理学会, pp. 32-40, 9p. (提出済)
2. 竹内 大輔, 野呂 昌満, 沢田 篤史, ゲーム対戦戦略をプレイヤー習熟度へ適応させる機械学習機構の設計, 査読付き論文, 2021 年 11 月, ソフトウェア工学の基礎 28 (日本ソフトウェア科学会ソフトウェア工学の基礎研究会 FOSE2021), 近代科学社, pp. 133-138, 6p. (提出済)
3. Akira Mizutani, Masami Noro, Atsushi Sawada, Design of Software Architecture for Neural Network Cooperation: Case of Forgery Detection, 査読付き論文, 2021 年 12 月, *Proceedings of 2021 28th Asia-Pacific Software Engineering Conference*, IEEE Computer Society, pp. 130-140, 11p. (提出済)

研究発表（査読なし）

1. 竹内 大輔, 野呂 昌満, 沢田 篤史, ゲームプレイヤーの習熟度に応じた対戦戦略の変更を可能とする機械学習器の設計, 2021 年 5 月 21 日, 電子情報通信学会知能ソフトウェア工学研究会 (KBSE2021-2), オンライン開催, 信学技報, Vol. 121, No. 35, pp. 7-12, 6p. (提出済)
2. 所澤 亮介, 小川 佑, 藤田 龍, 沢田 篤史, 野呂 昌満, 屋内測位方法の柔軟な切り替えのためのコンテキスト指向アーキテクチャの設計, 2021 年 7 月 8 日, 電子情報通信学会ソフトウェアサイエンス研究会 (SS2021-4), オンライン開催, 信学技報, Vol. 121, No. 94, 6p. (提出済)
3. 可知 敬明, 青山 幹雄, 野呂 昌満, 沢田 篤史, 機械学習を用いたソフトウェア安定性分析に関する研究, 2021 年 9 月 3 日, 日本ソフトウェア科学会第 38 回大会 (2021 年度)51-L, オンライン開催, 5p. (提出済)
4. 小澤 司, 青山 幹雄, 沢田 篤史, 野呂 昌満, 業務の依存関係分析に基づく Web システムアーキテクチャの再設計方法に関する研究, 2021 年 10 月 19 日, 電子情報通信学会ソフトウェアサイエンス研究会 (SS2021-15), オンライン開催, 信学技報, Vol. 121, No. 204, pp. 13-18, 6p. (提出済)
5. 可知 敬明, 青山 幹雄, 野呂 昌満, 沢田 篤史, 表現学習を用いたソフトウェア安定性の分析, 2021 年 11 月 25 日, 情報処理学会ソフトウェア工学研究会 (2021-SE-209), 愛媛県松山市/オンライン, 情処研報, Vol. 2021-SE-209, No. 2, pp. 1-8, 8p. (提出済)
6. 張 漢明, 高木 裕也, 沢田 篤史, 野呂 昌満, 並行システムデバッグ支援のためのフォールトパターンに関する考察, 2022 年 3 月 11 日, 情報処理学会組込みシステム研究会 (2022-EMB-59), オンライン開催, 情処研報, Vol. 2022-EMB-59, No. 56, pp. 1-7, 7p. (提出済)

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2022年 1月 26日

氏名	横森 励士	所属	理工学部ソフトウェア工学科
研究課題	ソフトウェア開発の保守工程における支援手法に関する研究		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を800～1,000字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>近年活用されているソフトウェアの中には、保守されている期間が30年以上となるものは珍しくなく、長期間にわたって保守がなされているものがとても多い。そのようなソフトウェアは、長期の保守の間に様々な改変を受けており、そのどれもが必要な改変である。保守活動を支援するための手法は、ソフトウェアを長期間にわたって維持するために欠かすことできない。本研究では、支援手法につなげることを目的として、2つのアプローチでソフトウェアの成果物についての分析を行ってきた。その評価結果を論文としてまとめることを目指して本年度も活動を行ったので、それぞれについて今年度の成果を報告する</p> <p>1. スマートフォンアプリケーションの苦情内容の分析について ソフトウェアにおけるユーザーレビューは、開発者にとって今後の開発方針を決めるための指針として活用されることが多い。本研究では、ユーザーレビューにおける不満点の記述を分析し、どのような内容の苦情がみられたかについて紹介している。 昨年度は、日本のユーザ、北米のユーザを対象としたアプリケーションにおいて、中高評価帯を含むすべての評価帯のレビューにおける苦情の傾向を紹介した論文を作成した。結果として、中高評価帯においては、機能追加に関する苦情が多くなること、国によって傾向の違いがありそうであることなどがわかった。その内容をまとめた論文は、国内会議において採録され、発表を行った。 今年度は、この分析結果を踏まえて、新たに英国におけるアプリの苦情内容を分析した結果や、同一のアプリを3か国で分析した場合の地域による差などを分析した結果を紹介し、査読付きの国内会議に投稿した。投稿した結果採録され、2021年11月に発表を行った。今後、分類・評価を品質モデルの上で行う方法などを提案することを計画している。</p> <p>2. 利用部品の共通性に基づいたソフトウェア部品のクラスタリング手法について ソフトウェアを構成する部品は、自らの機能を実現するために、他の部品が提供している機能を利用することが求められる。ソフトウェアを構成する部品が増えると、似たような機能を実現する部品が増加すると考えられる。同じような機能を実現する部品に着目すると、それらが利用する部品の集合はかなり一致することが期待できる。 これらの仮説を踏まえて、各部品が利用している部品の集合を求め、その一致度で階層的クラスタリングを行い、得られたクラスターを部品群とみなす手法を提案した。昨年度は更なる分析結果を紹介した論文を論文誌に投稿したが、不採択となった。現在、査読コメントに対する対応として、実験の目的がわかりやすくなるように図を追加したり、実験の内容を説明した文章を加えたりするなどの改良を行った改訂版を作成しており、今年度中の再投稿を計画している。現在蓄積している実験結果などをまとめて、もう一本別の論文を来年度に投稿する計画を立てている。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	ユーザーレビューにおける地域・アプリケーション 固有の苦情傾向に関する調査	書 名	
雑誌名	ソフトウェア工学の基礎 28	論 文 名	
巻 号	レクチャーノート/ソフトウェア学 47	出 版 社	
発行年月	2021年11月	出版年月	
ペ ー ジ	91-96	ペ ー ジ	
著 者 名	横森 励士 吉田 則裕 野呂 昌満 井上 克郎	著 者 名	
備 考	済	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出版年月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出版年月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 4月 5日

氏名	野呂昌満	所属	理工学部
研究課題	ソフトウェアの動的再構成のためのパターンと知的コンポーネントに関する研究		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>知的コンポーネントの有無に関わらず，動的再構成を可能とする構造を定義し，複数の応用領域に提供しその意義ならびに有用性を確認した。</p> <p>その後，知的コンポーネントの扱いに焦点を当て，組み込みソフトウェアにおけるその統合を考察する例題として，偽画像の検出について研究した。人工知能の分野では，偽画像の発見を学習方法によるものとして捉えてその技術について議論してきた。本研究では，それらの差異は，ソフトウェアアーキテクチャ上のコンポーネントの配置によるものとの認識の下，既存の AI 技術を総括し統合アーキテクチャを定義した。</p> <p>転移学習，敵対的生成ネットワーク，バギング，ブースティングなどの要素技術を統合的に含意するソフトウェアアーキテクチャを設計した。これらの技術を詳細に調査した。これらの技術を統合するために複数の弱学習器を前処理系に置き，それらの出力を意思決定のデータとすることでその目的が達成可能であるとの着想を得た。</p> <p>以上のように設計したニューラルネットワークを用いて偽画像の識別に関する協調するニューラルネットワーク群の実現に成功した。</p> <p>その他，決定論的に定義したアーキテクチャについても議論した。これらの議論は当然，知的コンポーネントの配置に対する十分な示唆を与えた。</p> <p>以上の結果として，外部との十分な協力体制の下，ソフトウェアアーキテクチャの観点から，意義のある研究が遂行できた。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	IoT の柔軟な相互運用性を実現するソフトウェアアーキテクチャの提案	書 名	
雑誌名	情報処理学会論文誌	論文名	
巻 号	Vol. 62, No. 4	出 版 社	
発行年月	2021年4月	出版年月	
ペ ー ジ	pp. 995-1007	ペ ー ジ	
著 者 名	横山史明, 沢田篤史, 野呂昌満	著 者 名	
備 考	済	備 考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目	アスペクト指向アーキテクチャに基づく組込みソフトウェアの設計法の提案	書 名	
雑誌名	情報処理学会 SES2021 論文集	論文名	
巻 号		出 版 社	
発行年月	2021年8月	出版年月	
ペ ー ジ	pp. 32-40	ペ ー ジ	
著 者 名	野呂昌満, 沢田篤史, 他	著 者 名	
備 考	済	備 考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目	Design of Software Architecture for Neural Network Cooperation: Case of Forgery Detection	書 名	
雑誌名	Proceedings of 2021 28th Asia-Pacific Software Engineering Conference	論文名	
巻 号		出 版 社	
発行年月	2021年12月	出版年月	
ペ ー ジ	pp. 130-140	ペ ー ジ	
著 者 名	Akira Mizutani, Masami Noro, 他	著 者 名	
備 考	済	備 考	済・未（年 月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 4月 1日

氏名	塩濱 敬之	所属	理工学部データサイエンス学科
研究課題	多様体上の統計モデルの構築とその位相的データ解析への応用		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究課題で扱う幾何的な構造をもった空間とは、私たちの身近に存在する、円周や球、トーラスやシリンダーといった幾何多様体のことを指す。幾何多様体上のデータ解析において中心的な役割を果たすのは角度を表す確率変数の扱いである。角度データのような周期性を扱った統計解析において、周期性により加減乗除算を直接適用できないため統計解析において特別に注意を払う必要がある。また、そのような周期性を扱った統計解析方法の確立が必要とされている。幾何多様体上の統計解析は、機械学習・パターン認識、タンパク質構造の分析といった生物学や化学、画像処理や認識、自然言語処理、トラッキングデータを使った位置情報の解析といった様々な分野で必要とされている。</p> <p>一方、データのもつ位相構造から特徴抽出する手法は Carlsson (2009) によって広く知られることとなり、既存統計解析手法ではうまく扱うことができなかったデータ構造を要約する手法として有用である。点群からホモロジーを抽出する手法はネットワークやグラフ構造の分析が基礎となっている。そのため、データ間に何らかの幾何的な制約や構造が含まれている場合には、往々にしてユークリッド距離に基づく隣接関係が適切に定義できない。この様なデータのもつ構造を背景にした位相的データ解析の手法は確立されているとはいえない。</p> <p>2021 年度の研究経過とその結果は次の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 位相的データ解析におけるパーシステント・ダイアグラムから新しい特徴量を提案し、その特徴量が時系列データの識別に大きく寄与することを確認した。この研究は国際シンポジウムで報告し、現在投稿論文としてまとめている段階である。 2) トーラス、シリンダーにおける角度変数の相関構造を扱う新しいモデルを提案し、その確率的構造や統計的性質を明らかにした (Abe, Imoto, Shiohama, and Miyata; 2022)。 3) 空間統計における、確率場における確率変数の空間定常性や等方性の過程は、実データ解析において現実的な仮定ではない。そこで空間統計解析における空間異質性の幾何構造を扱った統計モデルの構築が必要とされている。その予備研究のために、空間バリオグラムの時空間構造の推定を試みた (Kanno and Shiohama; 2022)。 			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Land price polarization and dispersion in Tokyo: a spatial model approach	書名	Directional Statistics for Innovative Applications
雑誌名	Asia-Pacific Journal of Regional Science	論文名	On some flexible models for circular, toroidal, and cylindrical data
巻号	Online published	出版社	Springer
発行年月	2022年1月	出版年月	June 2022
ページ	25 pages	ページ	15 pages
著者名	Y. Kanno and T. Shiohama	著者名	T. Abe, T. Imoto, T. Shiohama, and Y. Miyata
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（2022年6月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 4月 12日

氏名	白石高章	所属	理工 学部
研究課題	多次元モデルにおける多重比較法とその理論		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>帰無仮説の族$\mathcal{H}_p = \{H_{p_j} \mid j=1, \dots, m_p\}$ ($p=1, \dots, q$) に優先順位がつけられているときに直列型ゲートキーピング法とよばれる閉検定手順による多重比較検定が Maurer et al. (1995) によって提案されている. Bonferroni の方法や Holm (1979) の方法による理論が用いられている. 直列型のゲートキーピング法は帰無仮説の族$\mathcal{H}_1, \dots, \mathcal{H}_q$ の順で検定が行われていくが, 途中の\mathcal{H}_p ($1 \leq p < q$) の中の 1 つでも棄却できないと, 以後の帰無仮説の族$\mathcal{H}_{p+1}, \dots, \mathcal{H}_q$ の検定は行われない. この欠点をカバーする閉検定手順として, Dmitrienko et al. (2003) は並列型ゲートキーピング法 (parallel gatekeeping procedure) とよばれる閉検定手順による多重比較検定法が提案された. その閉検定手順において単純で検出力の低い Bonferroni の方法や Holm (1979) の方法を用いているが, 全体の検定手順は複雑な方法となっている.</p> <p>本論文では, 観測値が q 個の多標本正規分布モデルを考えた. ただし, q 個の多標本確率ベクトルの間に独立性の仮定はいれない. ここで考えたモデルは, q 次元正規分布に従う多標本モデルを含む一般化がなされている. k_p 個の平均のすべての相違を多重比較するための帰無仮説の族を$\mathcal{H}^{(p)}$ ($p=1, \dots, q$) とし, 帰無仮説の族$\mathcal{H}^{(1)}, \dots, \mathcal{H}^{(q)}$ に優先順位がつけられているとした. 対立仮説に順序制約がある場合とない場合について正規分布の下でのパラメトリック法として最大値 t 検定統計量, F 検定統計量, Bartholomew 統計量に基づく閉検定手順を用いたハイブリッドな直列型ゲートキーピング法を提案した. シングルステップよりもマルチステップの閉検定手順を使用した方が検出力は高かった. Maurer et al. (1995) のゲートキーピング法に沿うと, Bonferroni の方法または Holm (1979) の方法に替えたゲートキーピング法となるが, この方法は, ここで提案した手法よりもはるかに検出力が低い. さらに提案した手法により癌のデータの解析を行った. 年齢が上がるに従って癌による死亡が多くなることが解った.</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Hybrid Serial Gatekeeping Procedures for All-Pairwise Comparisons in Multi-Sample Models	書名	
雑誌名	南山大学紀要『アカデミア』理工学編	論文名	
巻号	22巻	出版社	
発行年月	2022年3月	出版年月	
ページ	89-105	ページ	
著者名	Takaaki Shiraishi（白石高章）	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年4月18日

氏名	横山哲郎	所属	理工学部
研究課題	2次元非圧縮流の表現とその応用に関する研究		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を800～1,000字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>流体力学において非圧縮流は理論的な扱いが比較的容易であるために古くから研究が行われている。非圧縮流の解析をコンピュータで行う場合には離散化が必要である。数値計算でシミュレーションを行う方法や特徴的な流線や淀み点のみをトポロジカルに扱う方法がある。これらは数値計算よりも遙かにデータ量が少ないという特徴をもつ。また、申請者は情報損失が原理的に行われることの無い可逆的な操作のみをもちいた変換によって解析結果の理解が容易で本目的に特化した計算機システムによって効率的な処理が行えることを狙っている。</p> <p>申請者は、計算機科学分野で用いられる形式言語理論やソフトウェア設計論において広く知られた手法を応用して、木文法を用いた流体の分類や木構造の簡易な表現を行ってきた。また、非圧縮流の可逆性に注目してトポロジカルな情報や変換規則の表現の工夫を行ってきた。</p> <p>当初予定していなかった形式言語理論の研究が進んだためにその成果を雑誌に発表を行った。これは2019年度に実施した研究を拡張したものである。研究成果は、電子情報通信学会の総合大会や Theoretical Computer Science に報告した。</p> <p>2次元曲面上のすべての流れのトポロジーを完全に記述する離散表現については研究が進んだ。非圧縮ではない可逆性を持たないような流れについても網羅的にカバーできるようになった。今後さらに細部を検討して研究成果を論文としてまとめたい。</p> <p>円板上の非圧縮流の反転の実データを対象として解析したり、シミュレーションによる提案手法の評価をしたりするのは、データ整理の手間が想像よりも大幅にかかった。12月からアルバイトを雇用してデータ整理をしてもらったがごく一部しか整理が完了しなかった。より早い時期からデータ整理を実施するべきであった。今後の研究活動における課題の一つである。</p> <p>コロナ禍によって情報収集を行うための学会参加や他大学からの訪問者が少なかった。関連研究者との研究交流を円滑にしていくことも今後の課題である。特に、査読者にもなり得るほど興味が近い海外在住の研究者に研究の早期から研究交流を実施する機会を増やしていきたい。</p> <p>当初予定した予算が一部不要となったのは以下の理由による。国内旅費は学会がオンライン開催となり必要な額が減った。データ整理等をお願いしようとしていた方はコロナにより来学する機会が減った。学術雑誌掲載料が不要な雑誌に掲載された。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	From Reversible Programming Languages to Reversible Metalanguages	書名	
雑誌名	Theoretical Computer Science	論文名	
巻号	TBA	出版社	
発行年月	(オンライン) 2022年2月	出版年月	
ページ	TBA	ページ	
著者名	Robert Glück, Robin Kaarsgaard, Tetsuo Yokoyama	著者名	
備考	○済・未(年 月頃予定)	備考	済・未(年 月頃予定)
②		②	
論文題目	可逆ハフマン符号化のゴミ出力量の最適化	書名	
雑誌名	電子情報通信学会 2022年総合大会情報・システムソサイエティ特別企画 ジュニア&学生ポスターセッション予稿集	論文名	
巻号		出版社	
発行年月	2022年2月	出版年月	
ページ	ISS-P-060	ページ	
著者名	田島嘉人, 横山哲郎	著者名	
備考	○済・未(年 月頃予定)	備考	済・未(年 月頃予定)
③		③	
論文題目	素朴な方法と Rabin-Karp 法による可逆文字列照合アルゴリズム	書名	
雑誌名	南山学会紀要『アカデミア』理工学編	論文名	
巻号	22	出版社	
発行年月	2022年3月	出版年月	
ページ	pp. 124-132	ページ	
著者名	谷崎 海良, 平工 真基, 横山 哲郎	著者名	
備考	○済・未(年 月頃予定)	備考	済・未(年 月頃予定)

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2022年 3月 11日

氏名	奥村 康行	所属	理工学部 機械電子制御工学科
研究課題	信号処理技術を用いた運動用器具の実装に関する研究		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>近年、VR(仮想現実)技術が注目を集め、このような VR 技術の応用分野として、運動の練習を支援する機器の開発が考えられる。本研究では、バスケットボールのチーム練習を一人で行うため、VR を用いた練習アプリを二種類製作し、その特性評価を行った。アプリとしては、オフェンスの際に前方から現れる守備選手を避けてシュートする練習を行う、ならびにディフェンスの際に攻撃選手の動きを見て自分が守備動作を行う、という二種類である。前者のアプリの機能は、(1)設置されている障害物やディフェンスにプレイヤーが 3 回接触した時点でプレイが終了する機能、(2)バスケットゴールにシュートを打つ、(3)スコア機能の三つである。後者のアプリではオーソドックスなゾーンディフェンスの一つである 3-2 ゾーンを対象とし、右ウィングにポジショニングする選手視点での練習を想定して攻撃選手の動きを提示する。特性評価としては、VR 空間内での練習者の視点移動とともに生じる首振り角度、移動距離に関し、実際との誤差が前者では最大で 11 度、後者で 45cm であることを明らかにした。</p> <p>また、VR 環境で視聴覚表現以外に触覚・力覚・圧覚といった感触表現を実装するアプローチが盛んに行われている。ここで、触覚は普段の生活でも重要な感覚であり、感触を知覚することで、物体の形状などを把握し、人間はそれに合わせた動作をする。したがって、臨場感を出すために感触情報を加えることは有効だと考えられている。本研究では、歩行動作に合わせて足裏感覚を発生するハプティックシューズを用いて、ユーザの正面の位置にある障害物を認識して、行動できるようになるためのデバイスを作製した。具体的には、視覚障害者の利用を想定してシューズに距離センサを実装し、正面にある障害物の検知を足裏から感触で伝えるデバイスを作成し、その性能評価を行った。実際に感じやすい感触の傾向と、歩きにくくなる感触の選定が目的である。シューズを装着して、足踏みをし、事前に伝えた感触がどの程度感じたかについて 5 段階評価アンケートを 9 名の方を対象として実施した。アンケートを取った結果から、最も多くの方が感じやくかつ歩きにくいと回答された項目は、「炭酸水」を表す感触であった。「炭酸水」の音の特徴としては、周波数が 20～150Hz で大きい音が連続的であると感知しやすいことがわかった。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Evaluation of 3D Virtualization Accuracy for VR-based Personal Basketball Team-practice System	書名	
雑誌名	Proceedings of the 2021 IEEE 10 th Global Conference on Consumer Electronics	論文名	
巻号		出版社	
発行年月	2021年10月	出版年月	
ページ	pp. 484-485	ページ	
著者名	H. HONMA, Y. IIDA, Y. OKUMURA 他	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目	Prototype Development of Vibration-induced Haptic Shoes for Perceiving the Front Obstacle	書名	
雑誌名	Proceedings of the 2021 IEEE 10 th Global Conference on Consumer Electronics	論文名	
巻号		出版社	
発行年月	2021年10月	出版年月	
ページ	pp. 762-763	ページ	
著者名	K. NAKAGAWA, Y. OKUMURA 他	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年2月26日

氏名	藤井勝之	所属	理工学部
研究課題	2.4GHz 帯ウェアラブル二次元通信シートのヌル点簡易位置推定		

研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)

本研究では、マイクロ波使用時のウェアラブル二次元通信シート上に生じるヌル点の位置の簡易推定を目的として、従来から用いられているメッシュ状の刺繍を円形化することを提案した。はじめに、FDTD 法により、着用時を想定した「人体近傍」及び「シート変形時」の電界強度分布の算出を行った。その結果、ヌル点の領域の拡大や位置の移動が確認されたものの、形状自体は変化しないことが分かった。これを踏まえて、シートの開放端部及び刺繍を円形化することにより、給電点から開放端部までの光学的距離を一定にし、ヌル点の形状を円形とした。円形メッシュモデルにおいても、ヌル点形状の「人体近傍」や「シート変形」によって大きく変化しないことが分かった。これら性質を利用して、同心円のモデルであれば刺繍の存在やシート端部での境界条件などを考慮しなくてもヌル点の領域を簡易に把握することが可能である。また、実用上においては、使用以前にヌル点あるいは非ヌル点を 1 か所特定しておくことにより、給電点から同一距離 r [mm]にある全ての箇所で伝送効率が低下または安定した電界強度を得られることが容易に推定可能となる。これらで推定したヌル点は「人体近傍」や「シート変形」によって大きく変化しない点から着用後も有効と考えられる。更に、2.4GHz 帯の全ての周波数においてヌル領域の半径に大きな差異は見られないことから、本推定の妨げにならないと考えられる。最後に、円形メッシュモデルの放射状ライン数を検討し、放射状ライン数 19 以上のモデルは同等のリング型ヌル及び非ヌル点の電界強度をもつことが分かった。よって、円形メッシュモデルにおける放射状ライン数を 19 まで減らすことにより、刺繍量の削減が可能であることを示した。今後は、円形化によるカバー領域の減少や給電点位置の制約等の改善を検討する。

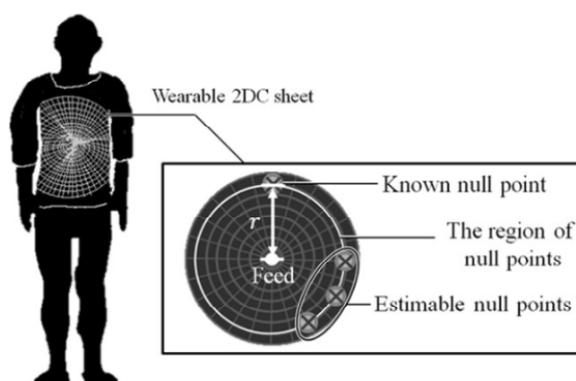


図 1. ヌル点の簡易位置推定 (宇田他, 信学論 B, 2021.)

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	2.4GHz 帯ウェアラブル二次元通信 シートのヌル点簡易位置推定	書名	
雑誌名	電子情報通信学会論文誌	論文名	
巻号	vol.J104-B	出版社	
発行年月	2021年9月	出版年月	
ページ	pp. 727-740	ページ	
著者名	宇田伊吹, 藤井勝之, 奥村康行	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2022年 3月 27日

氏名	栞原 寛明	所属	理工学部 電子情報工学科
研究課題	パターンを利用する自動プログラム修正のためのフレームワーク		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究では、ソフトウェア開発支援の実現に向けて、プログラムのバグを人手によらず修正する技術である自動プログラム修正の高度化を目的として以下の研究を進めた。</p> <p>API 利用パターンを用いた自動プログラム修正の予備評価</p> <p>API 利用パターンを用いた自動プログラム修正の手法を 2021 年度に提案したが、手法の評価ができていない。提案手法は、プログラムの修正において参考すべき API 利用パターンの検索と、見つかった API 利用パターンに基づくソースコードの修正から構成される。本研究では、前者の API 利用パターンの検索について予備評価を行った。</p> <p>この手法における API 利用パターンの検索とは、既存のソースコードをマイニングして得られる API 利用パターンを収集したデータベース（パターンデータベース）から、修正対象ソースコードの修正箇所周辺の API 利用パターンに類似した API 利用パターンを見つけることである。パターンの長さに対する最長共通部分列の比率を類似度とし、類似度の高い API 利用パターンを検索結果とする。</p> <p>予備評価では、実際の Java プロジェクトの開発履歴からメソッド呼び出しを 1 つ追加する修正を選択し、修正後のソースコード全体を用いて構築したパターンデータベースを、修正箇所を含むメソッド内の修正前の API 呼び出し列をキーとして検索した時に、修正後ソースコードに対応する適切な API 利用パターンが見つけれられるか確認した。結果として、適切な API 利用パターンがパターンデータベースに含まれていれば見つけれられることと、適切ではないが類似度が高い API 利用パターンも存在することがわかった。このことから、パターンデータベースの構築方法が重要であり、今後の課題となっている。</p> <p>以上の成果に関して学会発表を行った。</p> <p>パターンを用いた自動プログラム修正のためのフレームワークの実現</p> <p>上記の予備評価のためのプロトタイプツールを実装した。ただし、API 利用パターン以外の何らかのパターンを利用した自動プログラム修正も同じ枠組みで実現できる可能性がある。そこで、今回の実装ではパターン、パターンデータベース、類似度の計算アルゴリズムなどを抽象化したフレームワークを構築し、その上にプロトタイプツールを実装した。現時点でフレームワークは開発中であるが、他のパターンを利用した自動プログラム修正の手法も実装することでフレームワークの利点を評価し、学会発表等を行う計画である。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	複数のプログラミング言語の文法知識に起因する制御文の誤りの自動修正方法の提案	書 名	
雑誌名	ソフトウェア工学の基礎 XXVIII	論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月	2021/11	出 版 年 月	
ペ ー ジ	51-60	ペ ー ジ	
著 者 名	蜂巢吉成、東直希、三上比呂、 長野滉大、吉田敦、桑原寛明	著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目	API 利用パターンを用いた自動プログラム修正におけるパターン検索の予備評価	書 名	
雑誌名	情報処理学会研究報告	論 文 名	
巻 号	Vol. 2022-SE-210, No. 29	出 版 社	
発行年月	2022/03	出 版 年 月	
ペ ー ジ	1-8	ペ ー ジ	
著 者 名	桑原寛明、渥美紀寿	著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 3月 31日

氏名	大石 泰章	所属	理工学部機械システム工学科
研究課題	非線形システムの最適なサンプル値制御法の確立および解析と拡張		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究では、非線形システムの最適なサンプル値制御法に関して以下の3つの課題に取り組んだ：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 最適なサンプル値制御法の確立； 2. 最適なサンプル値制御法の拡張； 3. 後退地平方式によるスパース制御の実現. <p>「最適なサンプル値制御法の確立」では、前年度に開発した安定多様体法にもとづくサンプル値制御系の設計法について理論的整備を行うとともに、設計法を具体的な対象に適用する数値実験を行なった。安定多様体法では、最適制御問題に対応する Hamilton 系の安定多様体を求めることで制御則を得る。サンプル値制御系の場合、Hamilton 系は順時間でも逆時間でも陰的にしか定義されないが、原点周辺でダイナミクスが定まること、数値計算によって時間発展が計算できることを示した。また、得られた設計法を振子の振り上げ制御と車両の追従制御に適用し、比較的長いサンプル時間であっても制御が可能であることを確認した。</p> <p>「最適なサンプル値制御法の拡張」では、制御対象のサンプル時刻間応答を考慮した最適制御を行う方法を開発した。基本的には最適制御の目的関数をサンプル時刻間の状態の積分で定義すればよい。微分方程式の数値解法を使ってサンプル時刻間の状態を求め、さらに数値積分を使えば目的関数の評価ができるし、さらに状態や入力に対する導関数の評価も可能であるから、Hamilton 系の時間発展を計算して安定多様体を求めることができる。以上のアイデアに基づいて設計法を構築し、振子の振り上げ制御と車両の追従制御に適用できることを確認した。</p> <p>「後退地平方式によるスパース制御の実現」は新しいテーマである。非零の制御入力を加える時間を最小化する制御をスパース制御という。特にサンプル値制御系におけるスパース制御を考え、後退地平方式で実現する方法を考えた。元来のスパース制御では、固定した地平を考えてその中で最適制御を求め、それをそのまま適用する。これでは予期せぬ外乱に対応できないので、後退地平方式を使用するのが自然であるが、この場合の制御入力は全体として最適ではなくなり、スパースにならないことがある。これを防ぐために目的関数に時間とともに増大する重みを導入することを考えた。この場合、後退地平方式で得た入力と固定地平方式で得た入力一致し、特に後退地平方式の入力もスパースになることが確認できる。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Optimality and sparsity of the receding-horizon input for sparse control	書名	
雑誌名	Proceedings of the 13th Asian Control Conference	論文名	
巻号	—	出版社	
発行年月	2022年5月	出版年月	
ページ	電子出版	ページ	
著者名	大石泰章・岩田拓海・永原正章	著者名	
備考	済・未(2022年5月頃予定)	備考	済・未(年月頃予定)
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未(年月頃予定)	備考	済・未(年月頃予定)
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未(年月頃予定)	備考	済・未(年月頃予定)

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2022年 4 月 7 日

氏名	坂本登	所属	理工学部
研究課題	メカニカルシステムに対するターンパイク軌道の計算理論開発		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p><研究目的（概要）> 背景：最適制御理論において、ターンパイク現象が L1 最適制御（燃料最小制御）やスペース最適制御と密接に関係していることが、申請者と E. Zuazua 氏、永原氏らとの共同研究により明らかになってきた。本件申請研究では、メカニカルシステムという実システムのカテゴリーに対し、ターンパイク軌道（制御入力および出力軌道）を効率的かつ高精度で計算する理論の開発と実験検証を行った。</p> <p>主要成果：</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ターンパイク性が注目を集める理由の一つである制御系の効率化に着目し、メカニカルシステム特有の力学的特性をどのように利用可能であるか調べた。 ● L1 最適制御／スペース最適制御がターンパイク現象としてメカニカルシステムに対して発現するメカニズムを明らかにした。 ● L1 最適制御／スペース最適制御には不連続的な制御則が現れることが知られている。不連続な微分方程式の解を扱う Filippov 理論などを援用した近似的設計理論を開発した。 ● 力学的に拡張し、人工衛星の軌道投入問題など、航空宇宙分野への応用を開発した。 <p>メカニカルシステムとしては、具体的に倒立振り子実験装置を想定した。最適制御の評価関数は局所的に可安定性と可検出性が成立つように設定することで、最適性の必要条件から得られるハミルトン正準方程式（ハミルトン・ヤコビ方程式の特性方程式と言ってもよい）に安定多様体が存在し、ラムダ補題が適用できる状況を確認した。これにより、ホモクリニック軌道近傍にターンパイク軌道が存在することが数値計算によりわかった。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	The turnpike property in nonlinear optimal control --- A geometric approach	書名	
雑誌名	Automatica	論文名	
巻号	134	出版社	
発行年月	2021年9月	出版年月	
ページ	109939	ページ	
著者名	N. Sakamoto 他	著者名	
備考	済（本報告）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 4月 12日

氏名	張漢明	所属	理工学部機械システム工学科
研究課題	同時性を含む区間振る舞いモデルの形式化と事象の抽象化支援に関する研究		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>並列システムにおけるソフトウェア開発の問題点として、事象の同時性を扱うことができる、振る舞い検証の開発支援技術が整備されていない、ということがあげられる。事象の同時性を扱うことができる、標準的なプロセス代数を拡張した理論は存在する。しかしながら、これらのプロセス代数において、全ての開発環境基盤に対して処理系が提供されることは期待できない。一方、CSP と CCS にはモデル検査器を含む成熟した開発環境が整備されている。計算機科学の研究成果を実用化するためには、ソフトウェア工学の観点から、既存技術を利用した事象の同時性を含意した振る舞い検証方法を考察する必要がある。</p> <p>本研究の目的は、既存技術を利用可能にするための、事象の同時性を含意した振る舞い記述のパターンを提案することである。これまでの研究成果は、事象に「始め」と「終り」を付加した構造を区間とした振る舞いモデルと、CSP のモデル検査器 FDR を用いた検証事例、の提示である。実際のソフトウェア開発において振る舞い検証を適用するためには、これまでの事例を抽象化して方法として提示する必要がある。パターンは、問題に対する解決法を構造的に示すもので、プロセスを含意するものである。本研究において、既存技術を利用した事象の同時性を含意した振る舞い検証方法の提示という問題を、パターン提示問題に帰着するという着想を得た。</p> <p>CSP を用いた基本区間および区間メタパターンの定式化は、既存の技術を用いた事象の同時性を含意した実行前検査を可能にする。区間メタパターンは、逐次・再帰・選択・並列が共通構造として抽出された。これらの構造を CSP のライブラリ関数として提示した。このライブラリ関数を用いてシステムの振る舞いを記述することにより、既存の CSP モデル検査器の利用を可能にする。区間メタパターンの構造は、標準のプロセス代数と同じ構造である。しかし、事象の同時性を含意した区間メタパターンは、記述者に、際どいタイミングを考慮すべき重要な区間を考えさせる違いがある。これは、システムを分割統治 (divide and conquer) する上での、契約による設計 (design by contract) の基準となる。</p> <p>また、本研究では、プログラムのフォールトと軌跡の関係を定式化して、プログラムの動作の軌跡からプログラムのフォールトへの対応づけを「フォールトパターン」として提示した。並行プログラムにおける同期問題を対象として、軌跡からフォールトを特定するために、フォールトの分類、フォールトを特定するための誤り軌跡のパターン表現を提示した。P-V 命令を用いた第一種の読み書き問題の解法に対するフォールト集合を示し、フォールトと軌跡の間の関係の定式化の見込みを示した。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	並行システムデバッグ支援のための フォールトパターンに関する考 察	書 名	
雑誌名	情報処理学会組込みシステム研究 会	論 文 名	
巻 号	2022-EMB-59/56	出 版 社	
発行年月	2022年3月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	pp. 1-7	ペ ー ジ	
著 者 名	張 漢明, 高木 裕也, 沢田 篤史, 野呂 昌満	著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）

2021年度

パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2022年 3 月 30日

氏名	村杉恵子	所属	国際教養学部
研究課題	幼児言語、方言とミメティックスから探る普遍文法 (2)		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>生成文法理論は、多くの言語に共通する文法の仕組みを明らかにし、言語の多様性を説明することを目標として発展してきている。一方で、未だに擬態語・擬声語や手話などのアイコニックな特徴をもつ言語、ならびに方言の多様性について、その位置付けや言語としての特徴に関して十分に解明されているとは言えない。また、幼児言語の特性からみた普遍文法に関する理論構築も十分なされていない。本年度は、「幼児言語、方言とミメティックスから探る普遍文法」パツへプロジェクトとして、以下のような成果を得た。</p> <p>昨年度に続き、本年度も、南山大学 ZOOM を用いてアイコニックな特徴をもつ言語の文法的特性について、秋田喜美氏と研究会を重ねた。前半は9月1日ヨーロッパ言語学会での口頭発表にむけて定期的に研究会を開催し、後半は学術雑誌 <i>Morphology</i> への投稿むけて、研究をすすめ、原稿を作成し提出した。投稿原稿は査読を受け、出版される予定である。また、John Benjamins 出版社からは、<i>Morphology</i> に投稿する原稿の基礎と位置付けられる論文が、以下のような K. Toratani 氏の編集した書籍の一部として出版された。 https://benjamins.com/catalog/celcr.25.04aki</p> <p>また、村杉の招聘講演 (2020 年 8 月 16 日 (日) ~ 8 月 17 日 (月) 東北大学大学院情報科学研究科「言語変化・変異研究ユニット」主催 第 6 回ワークショップ、東北大学) の内容を修正した上で執筆した。これについては、11月に出版予定である。</p> <p>一方、昨年度まで積み重ねた研究を基礎として、方言 (長野・飯田・伊那方言、三河方言・瀬戸方言などを中心として) について日本語の擬態語擬声語や文末表現に焦点をあて、記述的研究を行う予定であった。しかし、コロナ禍により具体的な出張が予定通りにはできず、方言研究については、予定されていた内容の一部のみについて成果を出せる結果となった。今年度は昨年度のプロジェクトで達成できなかった部分の一端を補完できるように努力したい。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Binomial adjective doublets in Japanese: A Relational Morphology account	書名	<i>The language of food in Japanese: Cognitive perspectives and beyond</i>
雑誌名	<i>Morphology</i>	論文名	Innovative binomial adjectives in Japanese food descriptions and beyond.
巻号	未定	出版社	John Benjamins,
発行年月	2022 予定	出版年月	2022
ページ	未定	ページ	347 (執筆ページ pp. 111-132).
著者名	Kimi Akita and Keiko Murasugi	著者名	編者: Kiyoko Toratani 論文著者名: Kimi Akita and Keiko Murasugi
備考	済・叵 (2022年12月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)
②		②	
論文題目		書名	コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論3
雑誌名		論文名	幼児の言語獲得から生成文法理論へ
巻号		出版社	開拓社
発行年月		出版年月	2022年の予定
ページ		ページ	未定
著者名		著者名	小川芳樹 (編集) 村杉恵子 (論文執筆)
備考	済・未 (年 月頃予定)	備考	済・叵 (2022年11月頃予定)

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2021年 3月 16日

氏名	平岩 恵里子	所属	国際教養学部 国際教養学科
研究課題	COVID-19 がアジアにおける国際労働力移動に与えた影響についての考察		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>COVID-19 によって移民の動きが止まり、移民の受入れ国だけでなく、送出し国（例えばフィリピン等）にも経済的に大きな影響をもたらしたのではないかと。日本にとっても、技能実習生や留学生などの移動がストップしたことも含めて、COVID-19 がもたらした影響を考察する予定であった。COVID-19 前後を比較するには、COVID-19 以前の状況と特徴を捉えておく必要があり、2021 年度は COVID-19 以前のアジアにおける労働力移動をあらためてデータで確認し、その特徴をまとめることに注力した。まず、アジアを西アジア、中央アジア、南アジア、東アジア、東南アジア、の 5 つの地域に分け、その地域間の移動について、主に World Bank のデータを使って考察することとした。</p> <p>移動のボリュームから浮かび上がった特徴は、①この 20 年間、世界の労働移動（移民）は増加の一途をたどっているが、特にアジアにおける労働移動の増加が著しい、②なかでもアジアにおいては域内移動が圧倒的に多い（欧州や米国への移動に比較して）、③その域内移動の中でも、西アジアが主要な受入れ地域になっており、南アジア、東南アジアからの移動が中心となっている、ということが明らかになった。貿易においては、重力モデルが輸出入国間の距離と貿易量が反比例することを説明しているが、生産要素としての労働力については、移動距離だけでなく、社会的・政治的な要因が移動を説明することが多い。アジアにおいては石油産油国の集積地である西アジアが、その労働力を南アジアや東南アジアから需要する（リクルートする）政策が距離を凌駕する。他方、移動距離の少ない近隣諸国への移動も観察され、タイへは、国境を接するミャンマー等からの移動が不法移民も含めて増加している。</p> <p>以上の考察は、COVID-19 以前の移動の確認にとどまり、「COVID-19 が日本を取り巻く国際労働力移動に変化をもたらす可能性もあるのではないかと」、また、「各国事情による労働力移動の変化はどうだったか」「アジアとの比較対象となる EU 地域、北米・南米地域、アフリカ地域における移動の特徴は何か」については、十分に考察できなかった。COVID-19 以後のデータ分析も含め、次年度への課題としたい。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Revisiting Spatial Mobility in Asian Migration	書名	
雑誌名	愛知学院大論叢経済学研究	論文名	
巻号	第9巻 第1号	出版社	
発行年月	2022年2月	出版年月	
ページ	pp. 9-32	ページ	
著者名	HIRAIWA Eriko	著者名	
備考	済・未 (2022年4月中頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未 (年 月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未 (年 月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年3月22日

氏名	森山 幹弘	所属	国際教養学部
研究課題	蘭領東インド時代のインドネシアにおける出版文化の形成		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p><u>研究経過</u></p> <p>概ね予定していた研究計画に沿って、研究を進めることができた。</p> <p>過去に実施したライデン大学の図書館とインドネシア国立図書館での文献調査において収集した資料を利用して研究を進めた。これまで、それらの文献資料を丁寧に読み込んで情報を取り込み論文にまとめることができていなかったが、情報処理能力の高いコンピュータを使って資料の整理をし、情報を論文に使える形に処理することができた。その作業を通じてインドネシアにおける言語政策と出版文化の形成について論文をまとめ、インドネシアの学術誌の特別号の一編として公刊することができた。</p> <p>今年度は新型コロナウイルス感染症の影響下にあり、海外での調査および国際学会などへは出かけることはできなかったが、計画していたように年間を通じてインドネシア人、オランダ人を中心とする海外の研究者と、オンラインを利用して議論や意見交換を行うことができ、文献資料の分析と解釈を深めることができた。</p> <p>また、この研究成果を基に海外の大学が企画したセミナー、シンポジウムで数回の研究発表を行った。</p> <p>研究費については、ほぼ当初の予定通りコンピュータ等の購入に使用した。</p> <p><u>研究結果</u></p> <p>本研究は、インドネシアの出版文化がどのように形成されてきたかを、オランダ植民地時代の資料を基に考察することが目的であった。とりわけ、ジャワ島の西部に居住するスンダ人が使用するエスニック言語であるスンダ語の 20 世紀前半の出版物を調査することによってその出版文化の展開を明らかにすることが目的であった。本研究の調査から 1920 年代には民間の出版社、特にスンダ人が経営する印刷所、出版社（しばしば印刷所と出版社の区別がなかった）が、中心都市のバンドンだけでなく、西ジャワ州の都市で営業を始め、出版産業が生まれていたことが具体的に明らかになった。ある意味では出版文化が現地社会に根付き、読書をする人々が生まれ、新たなフェーズに入っていったと言える。これまでの研究で論じられてきたように、植民地政府が運営する「民衆図書館」（バライ・プスタカ）が独占的な役割を担っていたのではなく、その傍で現地の人々によって営まれた出版社・印刷所の役割が看過できないものとなってきたと言える。出版物の点数は民衆図書館と比較すると少なかったが、その内容は、啓蒙的な性格が強かった民衆図書館の出版物とは違い、より娯楽性が高いものや、時にはセンセーショナルなもの、民族主義的なものを含んでおり、民衆の間では広く読まれたと推測される。これまでの植民地政府が主導した出版文化の研究からは見えてこなかったもう一つの出版文化の一面を描き出すことができた。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2018 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Colonial Print Culture: Sundanese Book Publishing in the Dutch East Indies in the early twentieth century	書名	
雑誌名	Lembaran Sejarah	論文名	
巻号	Vol. 17, No. 1	出版社	
発行年月	2021	出版年月	
ページ	pp. 18-35.	ページ	
著者名	Mikihiro Moriyama	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 4月 11日

氏名	吉田 信	所属	国際教養学部
研究課題	人の移動と感染症をめぐる歴史的研究：巡礼旅券による移動の制度化と身体の管理		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>2021 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2 の助成を受け、以下の研究活動を実施した。</p> <p>1. 国内史資料所蔵調査</p> <p>研究課題に関する史資料としては、移動、感染症、巡礼、旅券といった事項が関わる。2021 年度はコロナ禍により、海外での史資料の所蔵調査・収集が叶わなかったこともあり、史資料の収集は主に外国語文献の入手を中心に実施することとなった。</p> <p>巡礼・移動に関しては、</p> <p>Lâle Can, Michael Christopher Low, Kent F. Schull and Robert Zens (eds.), <i>The Subjects of Ottoman International Law</i>, Indiana University Press, 2020</p> <p>Lâle Can <i>Spiritual Subjects: Central Asian Hajj at the End of Empire</i>, Stanford: Stanford University Press, 2020</p> <p>Michael Christopher Low, <i>Imperial Mecca: Ottoman Arabia and the Indian Ocean Hajj</i>, New York: Columbia University Press, 2020</p> <p>といった文献資料を入手できた。</p> <p>上記の資料は、これまで研究の進んでいなかったオスマン帝国側からのメッカ巡礼に関する実証研究の成果を公刊したものであり、研究テーマの理解を深める上で大変有益である。</p> <p>2. 研究会参加</p> <p>移動あるいは公衆衛生をテーマとする研究会にオンラインで参加し、現在の研究動向に関する知見を新たに得ることができた。</p> <p>3. 研究結果</p> <p>研究調査の過程で得た知見の一部を盛り込んだ論稿が刊行予定である。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書名	When East Meets Southeast Asia
雑誌名		論文名	Proving “Japaneseness”: Passport and Identification Problems of Japanese in the Dutch East Indies
巻号		出版社	World Scientific Publishing Company
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	155-176
著者名		著者名	Makoto Yoshida
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（2022年10月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2021

**Pache Research Subsidy I-A-2(Specified Research Support:
General) Research Result Report**

Date: 29/03/2022

Name	MUNSI Roger Vanzila	Affiliation	Global Liberal Studies
Research theme	Kakure Kirishitan Practitioners		
<p>Summary of research achievements (Please write down the progress and achievements of your research briefly within 320 ~400 words.)</p> <p>The anthropological cross-sectional research was designed to explore the religious activities and socio-cultural aspects of the present-day remnants of Kakure Kirishitan practitioners. Following a synthetic literature review, I first investigated on the narratives of the descendants of Kakure Kirishitan families in Katatsuki and Sendaiji. Subsequently, I conducted fieldwork in Nagasaki settings. The measures of social distancing prevented me for reaching some informants. However, I tried to handle the crucial issue using online interviews, Zoom conversations, and e-mail correspondences. Some of findings were analyzed and compiled into three articles and one book chapter as indicated in the subsequent page.</p> <p style="text-align: center;">Published Articles</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. “Kakure Kirishitan Footprints in Takatsuki and Sendaiji,” <i>The Japan Mission Journal</i> 74 (3): 181-195 (15 pages). 2. “Secret Transmission in Kakure Kirishitan Families,” <i>The Japan Mission Journal</i> 74 (4):267-282 (13 pages). <p style="text-align: center;">Published Book Chapter</p> <p>“Kakure Kirishitan Survivors and Kirishitan Shrine festivals in Japan: Some Ethnographical Research Perspectives.” In S. Grodz, S. M.Michael, and R. Schroeder, <i>Giant’s Footprints: 90th Anniversary of Anthropos Institute (1931-2021)</i>,</p> <p>However, it is important to note that <u>only the first article</u> contains the required indication “2021 Nanzan University Pache Research Subsidy I-A-2”. The publishers overlooked or did not insert the same indication in two other published works. Other body of the data will be used for my forthcoming book on the <i>Kirishitan Shrines and Festivals in Japan: Looking at the Religiosity of Local Communities</i>.</p>			

Please write down the published researches with clear indication of subsidy support, “2021 Nanzan University Pache Research Subsidy I-A-2”. Please indicate whether the publication has been turned into the Education Planning & Research Promotion Office or not on the “Remarks” column.			
Category of “Magazines”		Category of “Books”	
①		①	
Title of the article	“Kakure Kirishitan Footprints in Takatsuki and Sendaiji”	Title of the book	
Title of magazine	<i>The Japan Mission Journal</i>	Title of the article	
Volume #	75 (3)	Publishing company	
Published date	September 2021	Published date	
Page	181-195 (15 pages)	Page	
Author	Roger Vanzila Roger	Author	
Remarks	Done • Not yet (Turn in by:)	Remarks	Done • Not yet (Turn in by:)
②		②	
Title of the article	“Kakure Kirishitan Practitioners in Nagasaki: An Ethnographic Study of their Community Leadership Patterns”	Title of the book	
Title of magazine	<i>ACADEMIA</i> (Nanzan University)	Title of the article	
Volume #		Publishing company	
Published date	June 2021	Published date	
Page		Page	
Author		Author	
Remarks	Done • Not yet (Turn in by: June 2022)	Remarks	Done • Not yet (Turn in by:)
③		③	
Title of the article		Title of the book	
Title of magazine		Title of the article	
Volume #		Publishing company	
Published date		Published date	
Page		Page	
Author		Author	
Remarks	Done • Not yet (Turn in by:)	Remarks	Done • Not yet (Turn in by:)

2021年度
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 4 月13日

氏 名	神崎宣次	所 属	国際教養学部
研究課題	超学際的研究におけるファシリテーションの諸技法と倫理の研究		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>多様な分野におけるファシリテーションのあり方の調査を行うために、科学技術コミュニケーション、哲学、工学、グラフィックデザインなどの分野の研究者を招いた研究会を四回開催し、ディスカッションを行った。</p> <p><u>第一回研究会 (2021年7月9日 18:10-20:10)</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・一方井祐子氏 (東京大学 カブリ数物連携宇宙研究機構 特任研究員) 「「良い」コミュニケーションを考える」 ・谷口彩氏 (SAI Co-Cre Labo 共創型プロジェクトマネージャー) 「超学際研究における専門家と非専門家間の「補助線づくり」の手法検討 - グラフィックレコードの手法を用いたワークショップより紐解く」 ・吉添衛氏 (立命館大学大学院 情報理工学研究科 博士課程) 「議論支援システム AIR-VAS の開発状況とシステムを活かす議論のデザイン」 <p><u>第二回研究会 (2021年10月29日 15:00-17:30)</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・井上悠輔氏 (東京大学)、山本圭一郎氏 (国立研究開発法人 国立国際医療研究センター) 「「医療と AI」をテーマとしたディスカッション事例作りの試み」について ・菊地建至氏 (金沢医科大学) 「ファシリテートという観点から見ると、哲学カフェなどの対話の場はどのように整理され、それぞれにおいて何がファシリテートされるのか——経験から語り、質問に答える」 <p><u>第三回研究会 (2021年12月18日 10:00-12:30)</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・松山桃世氏 (東京大学) 「伝えるファシリテーション 引き出すファシリテーション」 ・筒井晴香氏 (東京大学) 「先端的科学技術に関するカフェ・市民対話ファシリテーションの経験から」 <p><u>第四回研究会 (2022年2月18日 15:00-17:30)</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・成瀬尚志氏 (大阪成蹊大学) 「ファシリテーションから考えるレポート課題」 ・加納圭氏 (滋賀大学) 「「科学技術への潜在的関心層・低関心層」へのアプローチと対話型パブリックコメント」 <p>対象となる分野の全てを網羅できてはいないので、前年度7月に採択された科研費挑戦的研究(開拓)のプロジェクトの一部として本研究会を引き継ぐ予定である。</p> <p>中間的な成果発表を行う予定であった雑誌の論文募集開始が遅れたため、成果報告は今後になる。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）

2021

**Pache Research Subsidy I-A-2(Specified Research Support:
General) Research Result Report**

Date: February 14, 2022

Name	Brad Deacon	Affiliation	Faculty of Global Liberal Studies
Research theme	Students' self-perceived attitudes on intercultural competence: Towards bridging the domestic and overseas academic divide		
<p>Summary of research achievements (Please write down the progress and achievements of your research briefly within 320 ~400 words.)</p> <p>Thus far, the role of attitude in intercultural competence has not been extensively researched through populations of pre-study abroad participants. This qualitative research aimed to help fill a general need in international student literature to de-mute students by giving greater agency to their voices.</p> <p>I presented a paper entitled “Investigating students’ pre-study abroad self-perceived attitudes on IC” at the JALT 2021 47th Annual International Conference on November 14, 2021. The feedback from the audience was positive and I made a valuable contact with Dr. Ana Sofia Hofmeyr from Kansai University, who is also active in the intercultural competence research field.</p> <p>I co-published a paper with Professor Richard Miles in the Faculty of Global Liberal Studies entitled “Toward better understanding Japanese university students’ self-perceived attitudes on intercultural competence: A pre-study abroad perspective” in Journal of International and Intercultural Communication (the DOI will be: https://doi.org/10.1080/17513057.2022.2033813) by Routledge. This publication will be in the 2022 Volume 15, Issue 1 journal. This article clearly references the generosity of the “2021 Nanzan University Pache Research Subsidy I-A-2” in the Funding section and Acknowledgments at the end of the article. This study sought to uncover the attitudinal factors impacting a group of 1st-year Japanese university students’ (n = 89) self-perceived intercultural competence (IC), prior to embarking on a 6-week US-based study-abroad program.</p>			

Published Research Results (Proposal included)

Please write down the published researches with clear indication of subsidy support, “2021 Nanzan University Pache Research Subsidy I-A-2”. Please indicate whether the publication has been turned into the Education Planning & Research Promotion Office or not on the “Remarks” column.

Category of “Magazines”		Category of “Books”	
①		①	
Title of the article		Title of the book	Journal of International and Intercultural Communication
Title of magazine		Title of the article	Toward better understanding Japanese university students' self-perceived attitudes on intercultural competence: A pre-study abroad perspective
Volume #		Publishing company	Routledge
Published date		Published date	1/11/2022
Page		Page	p.1-21
Author		Author	Brad Deacon & Richard Miles
Remarks	Done • Not yet (Turn in by:)	Remarks	Turn in by: 2/14/2022
②		②	
Title of the article		Title of the book	
Title of magazine		Title of the article	
Volume #		Publishing company	
Published date		Published date	
Page		Page	
Author		Author	
Remarks	Done • Not yet (Turn in by:)	Remarks	Done • Not yet (Turn in by:)
③		③	
Title of the article		Title of the book	
Title of magazine		Title of the article	
Volume #		Publishing company	
Published date		Published date	
Page		Page	
Author		Author	
Remarks	Done • Not yet (Turn in by:)	Remarks	Done • Not yet (Turn in by:)

2021年度
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年3月31日

氏名	中村 督	所属	国際教養学部
研究課題	戦後フランスにおける地方紙の再建に関する研究		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究の研究目的は、地方紙に焦点を当てて、戦後フランスのジャーナリズム界がどのように展開してきたのかを考察することにあつた。とくに第二次世界大戦期から解放期にかけて、政府がどのように地方の新聞や雑誌を再建しようとしたのかという問いを解明することを目指した。</p> <p>フランスのジャーナリズム史およびメディア史においては、パリを拠点とした全国紙の分析が中心的な位置を占めてきたが、本研究の目的にアプローチするためには、地方紙の展開を考慮に入れることが求められる。なかでも本研究は、地域メディアに関する研究成果を踏まえながら、それを従来のジャーナリズム史に位置づけることが課題とした。</p> <p>研究経過としては、主にナチス占領下においてレジスタンス運動に参加した組織および個人がそれぞれいかなるかたちで解放後の情報秩序を構想したのか把握することに努めた。そのためにすでに所有している史料の読解や先行研究の整理を行った。史料の読解としては、とくにレジスタンス運動の一組織である一般検討委員会（CGE）による中央・地方両方の情報秩序構想を正確に追った。</p> <p>こうした研究経過を通じて、研究結果としては以下の点が挙げられる。CGE の情報秩序構想については少なくとも二点を指摘することができる。第一は、CGE は解放後に向けて情報省の人事案を構想したが、そのリストにおいてはキリスト教民主主義者たちが多く含まれていることである。具体的にいえば、フランシスク・ゲイやエミリアン・アモリーらであるが、彼らは大戦間期に社会的カトリシズムの思想潮流を普及した人物たちであるということである。この点は昨年度の研究の延長をより丹念に分析した結果でもある。第二点は、彼らがブルターニュの新聞『ルエスト・エクレール』と深く関係していると思われる点である。これも以前に明らかにしたことであるが、しかし、この点と第一の点が結びつくと、キリスト教民主主義とブルターニュの地方紙のあいだに一定の関係があることが浮かび上がるように考えられる。</p> <p>今年度のうちに論文や著作は出すことができなかったが、3月27日に日仏歴史学会にて「戦後フランスにおける情報秩序構想」という題目のもと研究発表を行い、そこで多くの指摘を受けることができた。また、今年度は感染症拡大のため資料調査の点では難しい状況にあつたが、パッへ研究奨励金 1-A-2 のおかげで研究を進めることができた。感謝の意を記しておきたい。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）

2021年度
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 4月 4日

氏名	山岸 敬和	所属	国際教養学部 国際教養学科
研究課題	日米の新型コロナウイルス関連政策と医療制度		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>アメリカにおいて 2010 年 3 月に成立した患者保護および医療費負担適正化法は、新型コロナウイルスという言わば新しい「外的要因」によって、その問題が浮き彫りになっている。アメリカでは、未だ人口の約 10% いる無保険者が医療サービスを受けることができない問題や、保険を持っていても多額の免責額を負担しなければならないいわゆる低保険者の問題が改めて問われている。日本では、医療保険についての大きな問題は起こっていないが感染者を収容するための病院が整備されていないことが問題となっている。日米共通の問題として、このような感染症が起こった時に、誰がどのように政策決定の判断を下すのか、そして、政府と民間団体がどのように協力して、どのような医療サービス提供システムによって対応するのかという事が問われている。</p> <p>日米ともに新型コロナウイルスによって「医療崩壊」の危機が言われているが、本研究によって、日米政府が新型コロナウイルス問題に対して、どのような政治的対応を行ったのかをその過程に注目して分析した。どのような政治アクターがどのような既存の政治過程を通して影響力を行使しようとしたのか、そしてどのような制度変化をもたらそうとしたのかに焦点を当てた。そして本研究によって、「ポスト・コロナ」の医療制度の整備の議論についても知見を提供した。</p> <p>本研究の成果は、論文一本と、著書三冊の中の章としてまとめた。以下論文①では、現在のバイデン政権が進めようとしている医療保険制度改革がコロナ禍によってどのような影響を受けたのかを明らかにした。著書①では、医療保険制度をより大きな社会保障制度の中に位置付け、それが歴史的にどのように変換したのか、著書②では、アメリカの政治文化が医療保険政策の発展に与えた影響を論じた。そして著書③では、医療保険制度の変化を政治的分極化と制度的収斂という視点から議論を行った。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	コロナ禍と「バイデンケア」の行方	書名	激動期のアメリカ—理論と現場から見たトランプ時代とその後—
雑誌名	歴史評論	論文名	
巻号	854	出版社	大学教育出版
発行年月	2021/06/01	出版年月	2022/03/10
ページ	16-29	ページ	280p
著者名	山岸敬和	著者名	山岸敬和・岩田仲弘（共著）
備考	済・未（年 月頃予定） 2020年度の成果として含めた	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	教養としてのアメリカ研究
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	大学教育出版
発行年月		出版年月	2021/11/21
ページ		ページ	236p
著者名		著者名	清原 聖子・山岸敬和（共著）
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	アメリカ政治の地殻変動—分極化の行方—
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	東京大学出版会
発行年月		出版年月	2021/11/12
ページ		ページ	344p
著者名		著者名	久保文明・山岸敬和（共著）
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
④		④	

論文題目		書名	American Politics from American and Japanese Perspectives—英語と日米比較で学ぶアメリカ政治—(第2版)
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	大学教育出版
発行年月		出版年月	2021/9/30
ページ		ページ	220p
著者名		著者名	山岸敬和・Michael Pisapia(共著)
備考	済・未(年月頃予定)	備考	済・未(年月頃予定)

2021年度

パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2021年 12月 3日

氏名	Richard Miles	所属	国際教養学部
研究課題	From Thunberg to the L2 Classroom: Public Speaking Techniques パッへ 1-A-2		
研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)			
Outline			
To participate in the global conversation on combating climate change, Japanese university students need to be able to utilize their English language skills across a range of contexts. However, few students ever learn about practical public speaking techniques such as messaging and persuasive discursive techniques. Therefore, the purpose of this study was to enhance the voice of future climate change activists by analyzing a series of recent speeches by Swedish climate-change activist Greta Thunberg. Being of a similar age and also speaking in a second language, Thunberg is an ideal public speaker for Nanzan University students to model.			
Research to date			
This research study analyzed six speeches delivered in the last two years, by Greta Thunberg:			
Stockholm – 2018-9-8	<i>Our lives are in your hands</i>		
London – 2018-10-31	<i>Almost everything is black and white</i>		
Katowice – 2018-12-12	<i>Unpopular</i>		
Berlin – 2019-3-30	<i>A strange world</i>		
Washington – 2019-9-18	<i>Wherever I go I seem to be surrounded by fairy tales</i>		
New York – 2019-9-23	<i>The world is waking up</i>		
The analysis first documented the organizational messaging frameworks and message framing techniques used by Thunberg. The analysis then documented the persuasive discursive techniques used by Thunberg. The data collected were then integrated and re-analyzed.			
The findings and implications were drawn up, with the results published in <i>Language Teaching Research Quarterly</i> , 22, and also presented online at the 7 th International Conference on Second Language Studies, Paris, France, 5/6/2021.			
Results			
Findings indicate that Thunberg employed an almost exclusively <i>negative framing</i> approach in her speeches and that these speeches were punctuated with a range of PDTs (interactional techniques) designed to emphasise and clarify her positioning in the climate change debate in relation to the positioning of the audience and world leaders. The implications drawn from this study are that these techniques and the simple language used by Thunberg to express an opinion on a complex topic could easily be incorporated into presentations by university students in the L2 classroom.			
A follow-up study is being planned for 2022 to ascertain if other climate change activists employ similar techniques.			

研究成果公刊（計画を含む）

「2015 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	From Thunberg to the L2 Classroom: Public Speaking Techniques	書名	
雑誌名	<i>Language Teaching Research Quarterly</i>	論文名	
巻号	22	出版社	
発行年月	2021/9	出版年月	
ページ	pp. 49-63 (15 pages)	ページ	
著者名	Richard Miles	著者名	
備考		備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2021年度
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年4月5日

氏名	永江亘	所属	法務研究科
研究課題	米国会社支配権取引における取締役の情報開示義務と信認義務に係る検討		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究では、複数の米国判例について検討したが、研究成果として、デラウェア州最高裁の判決である <i>Morrison v. Berry</i>, 191 A.3d 268, (Del. 2018). を公刊することとした。</p> <p>同事件は、The Fresh Market 社（以下、「F 社」という）はデラウェア州法に準拠して設立された食料品店を展開する会社にかかるものであり、F 社がプライベートエクイティである Apollo Global Management LLC 社傘下の法人（以下、「A 社」という）とともに非公開化（以下、「本件会社支配権取引」という）を実施する際の情報開示に係る事件である。原告である Morrison は、デラウェア州衡平法裁判所に対して、F 社と取締役らの信認義務違反および Brett の信認義務違反の教唆・幫助責任を主張した。</p> <p>衡平法裁判所の Glasscook 判事が Corwin 判決・Volcano 判決を受け、本件事情がまさに Corwin 判決の示す「Ratification」の典型であると示したが、デラウェア州最高裁の Valihara 判事が、これを破棄差戻しを命じたのが本件である。</p> <p>デラウェア州では、2015 年に示された Corwin 判決により、(1)完全公正基準が適用されない現金交付合併において(2)完全な情報開示がなされ、(3)強圧性がない状況下で、(4)利害関係のない株主の過半数が当該合併を承認した場合には、当該合併の過程における瑕疵の治癒効果（<i>Cleansing Effect</i>）を認め、反証を許すことなく経営判断原則が適用されるとされた。完全公正基準の適用は、原告によって取締役会の過半数が利害関係を有していたか、当該取引における独立性を欠いていたことが示された場合に適用されるとされているが、Corwin 判決の趣旨は審査基準の問題ではなく株主の『追認』による瑕疵の治癒効果を明確化したものであり、Corwin 基準に対しては裁判所が従来 Revlon 基準の下で審査してきた取引完了後の主張について機能するものとしての地位が確立されたと評価もされている。すなわち、Corwin 判決は、明示的に Revlon 基準が事前差止めに対して有効な基準として機能することを指摘し、事後的な損害賠償請求については Corwin 基準の下で判断することを明らかにしたのである。その後、Corwin 基準の射程範囲につき、Volcano 判決ではデラウェア州一般会社法 251 条(h)項に基づく二段階買収についても、Corwin 基準と同様の基準を用いるべきことを示した。</p> <p>本判決は、上記(1)～(4)のうち、(2)の条件につき、重要な事実の省略または不実記載に関しても完全な情報開示の射程範囲内にあることを示した事例としての意義を有する。とりわけ、2018 年には本判決以前にも Appel 判決で最高裁が衡平法裁判所の判断を覆して審理を差し戻したこともあり、両判決により(2)に係る審査を最高裁が厳格に運用する姿勢を示したものと理解される。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Corwin 基準による瑕疵治癒効果と不実開示	書名	
雑誌名	商事法務	論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	未（2022年8月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2021年度
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2022年 3月 2日

氏名	洞澤秀雄	所属	法務研究科
研究課題	都市における当事者自治と法的統制：日英の都市法の比較研究を通じて		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究の研究課題は、都市における地域や街区という狭域の区域における当事者自治に関して、法的観点（特にいかに法的統制をすべきかという観点）から分析することを企図するものであった。日本法における近年の当事者自治的な法制度を対象に、イギリス法を比較法の対象とし、考察することをねらいとしていた。</p> <p>こうした研究課題に係る研究経過と現状は次の通りである。まず、日本法における近年の展開のうち、中心市街地等の事業者による当事者自治的な仕組みである BID を取り上げ、イギリスにおける BID 制度に係る法的分析に基づき、日本の制度に関する検討をした論文を公刊した。洞澤秀雄「当事者自治と法的規律：BID (Business Improvement Districts) に係る日本・イギリスの比較法研究を通じて」南山法学 45 巻 1 号（2021 年）。同論文では、当事者自治的な BID について、事業者間の内部関係と、BID と自治体や住民の間の外部関係に分け、内部関係については当事者自治を尊重したでの法のあり方、他方で外部関係については行政法の観点からの法的統制の必要性を論じた。</p> <p>次に、大規模小売店舗・大規模集客施設の設置者としての事業者による地域貢献に係る制度である地域貢献計画に関して、当事者自治の観点を加味した論文を公刊した。洞澤秀雄「まちづくりにおける事業者の地域貢献と法：大規模小売店舗・大規模集客施設による地域貢献計画を中心に」南山法学 45 巻 2 号（2021 年）。同論文では、そうした店舗や施設の設置が、地域の既存事業者や地域住民等への様々な影響を及ぼすものであるがゆえに、地域の当事者との協議等を通じて作り出される地域貢献計画に関して、その法的規律のあり方について分析をした。</p> <p>なお、まだ公刊までは至っていないが、地域におけるエリアマネジメントの主体として制度的に重要なものと位置づけられるようになってきている都市再生推進法人を取り上げ、その都市法における位置づけを検討した論文を南山法学 45 巻 3・4 号に投稿した。ここでは、都市における私的主体によるエリアマネジメント、行政法での位置づけについて考察した。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	「当事者自治と法的規律：BID（Business Improvement Districts）に係る日本・イギリスの比較法研究を通じて」	書名	
雑誌名	南山法学	論文名	
巻号	45巻1号	出版社	
発行年月	2021年10月	出版年月	
ページ	1-55頁	ページ	
著者名	洞澤秀雄	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目	「まちづくりにおける事業者の地域貢献と法：大規模小売店舗・大規模集客施設による地域貢献計画を中心に」	書名	
雑誌名	南山法学	論文名	
巻号	45巻2号	出版社	
発行年月	2021年1月	出版年月	
ページ	1-32頁	ページ	
著者名	洞澤秀雄	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 4月 13日

氏名	森山 花鈴	所属	法学部・社会倫理研究所
研究課題	自殺で家族を失った子どもたちへの支援に関する研究		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>日本における年間の自殺者数は、2 万人を超えており、交通事故死者数の約 6 倍である（警察庁統計）。特に多く亡くなっているのが中高年世代の男性（40 代～60 代の男性で全体の 40% 近く）であり、多くの子どもたちが自殺により親を亡くしている。さらには、2020 年においては女性の自殺が急増していることから、父親世代・母親世代の自殺が多い状況となっている。日本では、子ども・若者世代（15 歳～39 歳）の死因の 1 位も自殺となっており（WHO）、G7 の中でもこのような事態となっているのは日本のみである（10 代前半の死因の 2 位も自殺となっている。）。そして、文部科学省によると、2020 年の小中高生の自殺者数も過去最多となっている。このように、子どもたちの親世代も子どもたち自身も自殺のリスクにさらされているのが日本の現状である。</p> <p>このような中で、親を自殺で失った子どもは、死、特に自殺による死をどのように理解し、受け入れて（もしくは受け入れられずに）過ごしているのだろうか。そして、本来であればどのように死を理解することがその後の人生において適切なものであろうか。多くの自死遺族が生活の困難さやスティグマによる苦しみを抱えているにも関わらず、日本においては自死遺児が自らの経験を書き記した本はあるものの、その現状を踏まえた支援策について研究されたものは少ない。自死遺族への聞き取り調査についても、自死遺族から自殺者のことを聞き出すものが主であり、自殺者本人に視点が当てられたものがほとんどである。</p> <p>そこで、本研究では、自殺対策関係者・自死遺族の人たち（自死遺族支援の支援者含む）にインタビューを実施し、自死遺族・自死遺児が置かれている現状を明らかにした。</p> <p>コロナ禍によりフィンランド現地の調査等は叶わず、日本国内の自死遺族や自死遺児支援の現状の把握が中心となってしまったが、コロナ禍における自死遺族・自死遺児支援も重要であるため、自殺対策・自死遺族支援が進んでいるフィンランドの実態も現地コーディネータの協力を得て把握し、自死遺族・自死遺児支援の現状を把握した上で、幼少期の児童向けの自殺予防教育に資するプログラム（読み聞かせ用の絵本付き）案の検討を実施することができた。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	コロナ禍における自殺者数の推移 と自殺対策	書 名	
雑誌名	日本社会精神医学会雑誌	論 文 名	
巻 号	未定	出 版 社	
発行年月	未定	出 版 年 月	
ペ ー ジ	未定	ペ ー ジ	
著 者 名	森山 花鈴	著 者 名	
備 考	済・未 (2022年夏頃予定)	備 考	済・未 (年 月頃予定)
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未 (年 月頃予定)	備 考	済・未 (年 月頃予定)
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未 (年 月頃予定)	備 考	済・未 (年 月頃予定)

2021年度
 パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2021年 1月 27日

氏 名	五島敦子	所 属	教職センター
研 究 課 題	教職課程の質向上に関する基礎的研究		
<p>研究実績の概要（研究経過，研究結果を800～1,000字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究の目的は、教職課程の質向上に関する基礎的研究として、教職課程の内部質保証のための組織体制をどのように構築するべきかを探究することにある。</p> <p>令和4年4月より、教育職員免許法施行規則改正にもとづき、教職課程における自己点検・評価が義務化されることとなった。そのため、開放制の教職課程を置く私立大学では、それぞれの事情に応じた評価体制を構築することが要請されている。そこで、本研究では、まず、政策的動向と先行研究を整理検討した。具体的には、教職課程の質保証のガイドライン検討会議が示した『教職課程自己点検・評価ガイドライン』と全国私立大学教職課程協議会による教職課程自己点検・評価基準を比較考察することにより、いずれの評価基準においても、全学的な責任体制の構築が強調されていることを明らかにした。とくに、根拠となる資料やデータ等にもとづいて、教職課程教育を通して育まれるべき資質能力を示した学修成果を具体的に提示する必要があることを指摘した。</p> <p>次に、南山大学を対象として、教職課程の教育と運営に関する歴史と現状について、資料にもとづいて基礎データを整理した。その結果、上述の評価基準を本学の状況に照らし合わせると、すでに教職センターを中心とする全学的な責任体制が築かれていることが確認できた。教職課程に関する自己点検・評価は、本学内部質保証委員会の定めに従い、根拠となる資料にもとづいて全学体制のなかで組織的に実施されている。しかしながら、新たに実施が求められている自己点検・評価項目のすべてを網羅しているわけではなく、運営上の懸念事項があることが明らかとなった。具体的には、第一に、学科レベルの自己点検・評価と連動させること、第二に、教職課程の運営を担う事務部門との連携を維持・発展させることが課題であることを指摘した。以上の分析結果まとめて、『教職センター紀要』第8号に投稿した。</p> <p>また、本学では、ボランティアやサービスマーケティングなど、学校と地域を繋ぐための全学的な組織が整っていないことから、他大学のカリキュラムや組織体制などについて調査した。その成果の一部を日米比較の観点から検討して、2021 IARSCLE Virtual Gathering (11/16, Pacific Time)において、黒沼敦子氏とともに共同発表した。ただし、コロナ禍の蔓延により、近年の状況についてはオンラインを通じた情報収集が中心となったため、環境整備や職員体制については不明な点が残されている。したがって、実地調査については、次年度以降も継続して実施する必要があることが明らかとなった。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	教職課程の自己点検・評価の義務化に向けた課題－教職課程の教育と運営に関する歴史と現状－	書名	
雑誌名	南山大学『教職センター紀要』	論文名	
巻号	8	出版社	
発行年月	2021年11月	出版年月	
ページ	1-13	ページ	
著者名	五島敦子	著者名	
備考	済・未（年月頃）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2021年度
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 3月 7日

氏名	飯田祥明	所属	体育教育センター
研究課題	マーカーレス骨格検出ソフトウェアを用いたバスケットボールのシュート動作フィードバックシステム機能の向上		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>近年、簡便にスポーツ動作の動力的データを取得できるツールの開発が進んでいる。一方で動作中の身体各部位の運動情報を指導現場レベルで簡便に取得できるシステムについては未だ確立されているとはいえない。本研究の目的はビデオカメラを用いた映像分析によるマーカーレス骨格自動検出ソフトを利用した、バスケットボールのシュート動作フィードバックシステム機能の向上であった。</p> <p>まず、フォーアシスト社の PoseCap を購入・セットアップし、バスケットボールのシュート動作の測定精度検証を実施した。具体的にはスポーツバイオメカニクス分野で広く用いられている高精度のモーションキャプチャシステム (OptiTrack) と PoseCap を同時撮影し、シュート動作の屈曲局面と伸展局面でのピーク角度（手関節、肘関節、肩関節、股関節、膝関節、足関節）を比較した。実験当初は身体両側の身体部位を推定する設定で実験を行っていたため、身体座標の入れ替わりが頻繁に起こり、PoseCap の測定値が推定値から大きく外れてしまう結果となった。その後検証を重ね、測定側面のみを推定する設定をし、再実験を行った結果、フィードバックに支障が無い精度での測定ができる結果が確認できた。</p> <p>次に、PoseCap を用いたフィードバックシステムの構築を実施した。当初はシュートの結果をもとに動作を平均化する予定であったが、シュートの結果に大きく影響する左右の誤差を PoseCap で検出することが困難であることを確認したため、シュート距離の違いによって動作を平均化してスティックピクチャを選手にフィードバックするシステムを構築することとなった。数回の実験によって、シュート距離の違いによる動作の違いが目視できるシステムを構築した。今後の課題としては、実際のフィードバックによる運動の変化やフィードバックの即時性を高めていくことが挙げられる。</p> <p>また、本研究で得られた知見は「Azure Kinect を用いたバスケットボールのシュート動作中のマーカー式関節角度測定の精度検証(来年度 6 月発行予定)」にて用いられるほか、各種学会大会や学術雑誌にて公表していく予定である。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Azure Kinect を用いたバスケットボールのシュート動作中のマーカ一式関節角度測定の精度検証	書 名	
雑誌名	アカデミア. 人文・自然科学編	論 文 名	
巻 号	24号	出 版 社	
発行年月	2022年 6月頃予定	出版年月	
ペ ー ジ	未定	ペ ー ジ	
著 者 名	飯田祥明, 秋葉俊貴, 藤井勝之, 奥村康行	著 者 名	
備 考	未 (2022年 6月頃予定)	備 考	済・未 (年 月頃予定)
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出版年月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未 (年 月頃予定)	備 考	済・未 (年 月頃予定)
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出版年月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未 (年 月頃予定)	備 考	済・未 (年 月頃予定)

2021年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 4月 6日

氏名	加藤 孝基	所属	体育教育センター
研究課題	筋の弛緩（リラックス）に関わる神経機構の解明		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>ヒトの身体動作は、単純な動作を行う際にも複雑な脳内制御を必要とする。本研究では、より複雑な中枢神経処理を要する筋弛緩のメカニズム解明に先駆け、単純な収縮動作を行う際の神経機構を明らかにした。</p> <p>外的刺激に対する中枢神経処理能力は、反応時間の構成要素でもある前筋運動時間（Premotor Time: PMT）を用いて評価することができる。これまでの研究で、アスリートは PMT が短縮することが報告されているが、その要因は明らかにされていない。PMT が短縮する一要因として、一次運動野から脊髄、筋に至る経路の伝達速度の向上が考えられる。この経路を計測する方法として、経頭蓋磁気刺激法（Transcranial magnetic stimulator: 以下 TMS）がある。TMS は、頭皮上に乗せたコイルに強い電流を流すことで急激な磁場変化を生じ、ファラデーの電磁誘導の法則にともない電流を頭蓋骨内に発生させ、脳内のニューロンを直接興奮させる非侵襲的な方法である。これにより、大脳皮質の一次運動野にある錐体細胞が興奮し、脊髄 α 運動ニューロンを介して、対応する骨格筋から運動誘発電位（Motor evoked potential: 以下 MEP）が発現する。この MEP 出現潜時（反応時間）から、一次運動野以降の伝達速度を評価することができる。したがって、この手法を用いることで、一般人とアスリートの一次運動野以降の処理能力および神経機構をより詳細に比較することができる。</p> <p>本研究では、スポーツの中でも特に素早い反応が求められる陸上競技短距離走者（9名）を対象とし、一般人（10名）との違いを、まず PMT の点から明らかにし（実験 1）、さらに TMS を用いて、得られた MEP から情報処理の神経メカニズムをより詳細に解明する（実験 2）ことを目的とした。</p> <p>実験 1 の結果、短距離走者の PMT は一般人と比較して有意に短縮したことから、短距離走者の音刺激に対する情報処理能力は一般人よりも長けていることが示唆された。また実験 2 の結果より、一般人と短距離走者の間に MEP 潜時に有意な差は認められなかった。音刺激が提示されてから動作に至るまでの過程として、主に物理的な①「音刺激伝達過程」、②前頭前野等での「刺激情報処理、運動の準備過程」、③一次運動野以降の「筋への運動指令伝達過程」の 3 つに分類出来る。実験 2 より、短距離走者の PMT 短縮に貢献するのは、筋への伝達速度の向上ではなく、情報処理過程や準備過程の短縮によるものと示唆された。長年のトレーニングにより、情報処理能力過程における大脳皮質の可塑性（変化）が生じたと考えられる。大脳皮質での神経機構について、今後より詳細に検討する必要があるだろう。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	競技特性と筋収縮反応時間の神経学的考察	書名	
雑誌名	南山大学紀要「アカデミア」人文・自然科学編	論文名	
巻号	第24号	出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未(2022年6月頃予定)	備考	済・未(年月頃予定)
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未(年月頃予定)	備考	済・未(年月頃予定)
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未(年月頃予定)	備考	済・未(年月頃予定)